

# 細 谷 B 遺 跡

一般県道林岩下線道路改築事業に伴う  
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2009

群馬県八ッ場ダム水源地域対策事務所  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 細 谷 B 遺 跡

一般県道林岩下線道路改築事業に伴う  
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2009

群馬県八ッ場ダム水源地域対策事務所  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





## 序

一般県道林岩下線は、ハッ場ダム建設に伴う水源地域住民の生活道路として、また観光客の交通の利便性を確保し地域振興を図る目的で策定された長野原町林から東吾妻町岩下を結ぶ路線であります。

このたび、東吾妻町三島地内において発掘調査された細谷B遺跡の発掘調査報告書が上梓の運びとなりました。本遺跡は平安時代集落と陥穴群、天明三年の畑跡と多岐にわたる遺跡であります。特に住居跡は集落変遷や地域の特徴を表すものであります。また、陥穴の構築時期について一考を得ることができました。これらは本県の平安時代研究の一翼を担うものと思われれます。また、天明三年浅間山噴火に伴う泥流に埋もれた畑からは当時の耕作の様子がうかがえました。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ハッ場ダム水源地域対策事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、東吾妻町教育委員会、地元関係者等には、ご指導・ご協力を賜りました。関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し序と致します。

平成 21 年 3 月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理 事 長 高橋 勇夫



## 例 言

- 1 本書は、一般県道岩下線(長野原町林～東吾妻町岩下)道路改築に伴う細谷B遺跡(町遺跡番号0060)の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 細谷B遺跡は、群馬県吾妻郡東吾妻町大字三島5269-2・5270-2・5271-1・5271-2・5272・5273-2・5275-5・5277-2・5279-2・5298・5299-2・5300-2・5306-3・5307-2・5314-2・5315-3・5315-4・5319-3・5319-4・5445-2・5451-2・5452-1・5452-2・5453-2番地に所在する。遺跡名は、東吾妻町教育委員会による遺跡分布調査の結果命名されたものである。
- 3 発掘調査及び整理事業は、群馬県土整備部八ッ場ダム水源地域対策事務所の委託を群馬県教育委員会が調整し、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理事業期間は以下のとおりである。  
発掘調査 平成20年4月1日～平成20年6月30日  
整理事業 平成20年10月1日～平成20年12月26日
- 5 発掘調査面積 5,032㎡
- 6 発掘調査・整理事業組織は以下のとおりである。  
理事長 高橋勇夫 常務理事 津金澤吉茂 常務理事 木村裕紀  
調査研究部長 飯島義雄 資料整理部長 相京建史 G L 大木紳一郎  
総務 G L 笠原秀樹 矢島一美 齋藤陽子 経理 G L 佐嶋芳明 斉藤恵利子 柳岡良宏  
佐藤美佐子 木間久美子 北原かおり 狩野真子  
八ッ場ダム調査事務所長 中東耕志 調査研究部長 中沢悟 G L 飯田陽一 藤巻幸男  
庶務 G L 吉田有光 若林正人  
調査担当 田村公夫 綿貫昭  
整理担当 田村公夫  
遺物写真撮影 佐藤彦彦  
保存処理 関 邦一 土橋まり子 小材浩一  
整理補助 鈴木幹子、狩野なつ子、堀米弘美、馬場信子  
デジタル写真図版作成 牧野裕美、市田武子、安藤美奈子、酒井史恵、廣津真希子、荒木絵美、  
高梨由美子、矢端真観、横塚由香、下川陽子
- 7 本書の編集は田村公夫が行い、中沢悟が「第5章2」を執筆し、他は田村が執筆した。なお、遺構外石器は関口博幸の協力を得た。
- 8 発掘調査及び整理事業において以下の委託業務を行った。  
表土除去等土木機械賃貸借 南波建設株式会社  
埋蔵文化財遺跡掘削業務 株式会社歴史の杜  
地上測量業務 株式会社測研  
理化学分析 炭化材樹種同定 株式会社パレオ・ラボ  
火山灰分析 株式会社古環境研究所  
デジタル編集業務 株式会社測研

9 発掘調査及び本書作成にあたり、下記の関係機関・関係諸氏にご指導・ご助言・ご協力を得た。記して感謝の意を表す。(敬称略)

群馬県、群馬県県土整備部八ッ場ダム水源地域対策事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、東吾妻町教育委員会、東吾妻町文化財調査委員、地元関係者各位、井上唯雄、大塚昌彦、高橋政充、丸山不二夫

10 出土遺物ならびに図面・写真等の保管は、群馬県埋蔵文化財調査センターで行っている。

## 凡 例

1 遺構の挿図中で使用した方位は、日本測地系座標北である。調査グリッドは日本測地系平面直角座標系9系を使用した。

2 挿図縮尺は、以下を基準に図中に記載する。

遺構 住居跡1/60、カマド1/30、土坑1/60、集石遺構1/60、溝1/100、畑1/100、  
遺構全体図1/700

遺物 土器1/3、石器1/3、小物遺物1/1、大型遺物1/4

3 遺構断面実測図及び等高線に記した数値は標高(m)を表す。

4 本文中で使用する火山灰略称は以下のとおりである。

As-A 浅間山A軽石(1783年)

As-Kk 浅間山箱川(1128年)

As-YPまたはYP 浅間草津黄色軽石(約15,000年前)

5 遺物観察表記載は以下のとおり。

番号は、遺構ごと・各項ごとに通し番号を付し、表題に記した図版・写真の番号と一致する。

単位は、各表の表題中に記載した。土器は、口径・底径・器高をcm、重さはgで表した。

色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」を使用した。

# 目次

序

例言・凡例

目次

挿図目次

表目次

写真目次

## 第1章 経過

第1節 調査に至る経過 ..... 1

第2節 発掘作業の経過 ..... 2

第3節 整理等作業の経過 ..... 2

## 第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境 ..... 3

第2節 歴史的環境 ..... 3～6

## 第3章 調査の方法と成果

第1節 調査方法 ..... 7

第2節 基本土層 ..... 8

第3節 遺構と遺物 ..... 9

1 住居跡 ..... 10～34

2 土坑 ..... 34～54

3 溝 ..... 55

4 畑 ..... 56～64

5 遺構外出土遺物 ..... 64～66

## 第4章 理化学分析

1 火山灰分析 ..... 67～69

2 6号住居跡出土炭化材の樹種同定 ..... 69～71

## 第5章 調査の結果

1 北毛における住居跡出土炭化材について ..... 72～75

2 北毛における奈良・平安時代の土器の様相について ..... 76～89

参考文献 ..... 90, 91

まとめ ..... 92

写真図版

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図	一般県道若林下線と埋蔵文化財調査	1
第2図	調査区概要図	2
第3図	細谷B遺跡周辺の環境	5
第4図	調査区及びグリッド配置図	7
第5図	I層柱状図	8
第6図	II区遺構配置図	9
第7図	住居跡配置図	10
第8図	1号住居跡平・断面図	11
第9図	1号住居跡カマド平・断面図	11
第10図	1号住居跡出土遺物図	11
第11図	3号住居跡平・断面図	12
第12図	3号住居跡出土遺物図	13
第13図	4号住居跡平・断面図	14
第14図	4号住居跡カマド平・断面図	14
第15図	4号住居跡出土遺物図(1)	14
第16図	4号住居跡出土遺物図(2)	15
第17図	5号住居跡平・断面図	17
第18図	5号住居跡出土遺物図	17
第19図	6号住居跡平・断面図	18
第20図	6号住居跡カマド平・断面図	19
第21図	6号住居跡出土遺物図	20
第22図	7号住居跡平・断面図	21
第23図	7号住居跡カマド平・断面図	21
第24図	7号住居跡出土遺物図	22
第25図	8号住居跡平・断面図	23
第26図	8号住居跡カマド平・断面図	23
第27図	8号住居跡出土遺物図	24
第28図	9号住居跡平・断面図	26
第29図	9号住居跡カマド平・断面図	26
第30図	9号住居跡出土遺物図	27
第31図	10号住居跡平・断面図	29
第32図	10号住居跡出土遺物図	29
第33図	11号住居跡平・断面図	31
第34図	11号住居跡カマド平・断面図	30
第35図	11号住居跡出土遺物図	31
第36図	12号住居跡平・断面図	33
第37図	12号住居跡出土遺物図	33
第38図	土坑配置図	35
第39図	土坑 平・断面図(1)	39

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	6
第2表	1号住居跡出土遺物観察表	12
第3表	3号住居跡出土遺物観察表	13
第4表	4号住居跡出土遺物観察表	16
第5表	5号住居跡出土遺物観察表	17
第6表	6号住居跡出土遺物観察表	20, 21
第7表	7号住居跡出土遺物観察表	22
第8表	8号住居跡出土遺物観察表	25
第9表	9号住居跡出土遺物観察表	28
第10表	10号住居跡出土遺物観察表	29
第11表	11号住居跡出土遺物観察表	32, 33

## 写 真 目 次

PL. 1	遺跡遠景・近景	
PL. 2	1号住居跡～5号住居跡	
PL. 3	6号住居跡～8号住居跡	
PL. 4	8号住居跡～11号住居跡	
PL. 5	11号住居跡～II区調査区	
PL. 6	1号土坑～16号土坑	
PL. 7	17号土坑～29号土坑	
PL. 8	30号土坑～48号土坑	
PL. 9	43号土坑～52号土坑	
PL. 10	54号土坑～65号土坑	
PL. 11	66号土坑～74号土坑	
PL. 12	73号土坑～82号土坑	

第40図	土坑 平・断面図(2)	40
第41図	土坑 平・断面図(3)	41
第42図	土坑 平・断面図(4)	42
第43図	土坑 平・断面図(5)	43
第44図	土坑 平・断面図(6)	44
第45図	土坑 平・断面図(7)	45
第46図	土坑 平・断面図(8)	46
第47図	土坑 平・断面図(9)	47
第48図	土坑 平・断面図(10)	48
第49図	土坑 平・断面図(11)	49
第50図	土坑 平・断面図(12)	50
第51図	土坑 平・断面図(13)	51
第52図	土坑出土遺物図	52
第53図	溝 平・断面図	55
第54図	堀 全体図	56
第55図	畑第1区画平・断面図	57
第56図	畑第2区画平・断面図	57
第57図	畑第3区画平・断面図	58
第58図	畑第4区画平・断面図	59
第59図	畑第5区画平・断面図	60, 61
第60図	畑第6区画平・断面図	62
第61図	A泥流中出土遺物図(1)	62
第62図	A泥流中出土遺物図(2)	63
第63図	遺構外出土遺物図(1)	64
第64図	遺構外出土遺物図(2)	65
第65図	6号住居跡土層柱状図	68
第66図	6号住居跡炭化材出土図	70
第67図	炭化材の走査型電子顕微鏡写真	71
第68図	群馬県地域表示図	74
第69図	地区・時代別樹種組成	75
第70図	東吾妻町・中之条町における奈良・平安時代の土器編年(1)	80, 81
第71図	東吾妻町・中之条町における奈良・平安時代の土器編年(2)	82, 83
第72図	長野原町における平安時代の土器編年	84, 85
第73図	旧月夜野町における奈良・平安時代の土器編年(1)	86, 87
第74図	旧月夜野町における奈良・平安時代の土器編年(2)	88, 89

第12表	12号住居跡出土遺物観察表	34
第13表	住居跡計測表	34
第14表	土坑出土遺物観察表	52, 53
第15表	土坑計測表	53, 54
第16表	As-A泥流中出土遺物観察表	64
第17表	遺構外出土遺物観察表	66
第18表	テフラ検出分析結果	69
第19表	屈折率測定結果	69
第20表	6号住居跡出土炭化材の樹種同定結果一覧	70
第21表	群馬県北部樹種同定	75
第22表	吾妻郡における奈良・平安時代の遺跡数	76

PL. 13	83号土坑～90号土坑	
PL. 14	91号土坑～98号土坑	
PL. 15	99号土坑～108号土坑	
PL. 16	109号土坑～1,2号集石	
PL. 17	1号溝・As-A下畑	
PL. 18	As-A下畑1～6区画	
PL. 19	作業風景・見学会	
PL. 20	住居跡出土遺物	
PL. 21	住居跡出土遺物	
PL. 22	住居跡・土坑・As-A泥流中出土遺物	
PL. 23	As-A泥流中・遺構外出土遺物	

## 第1章 経過

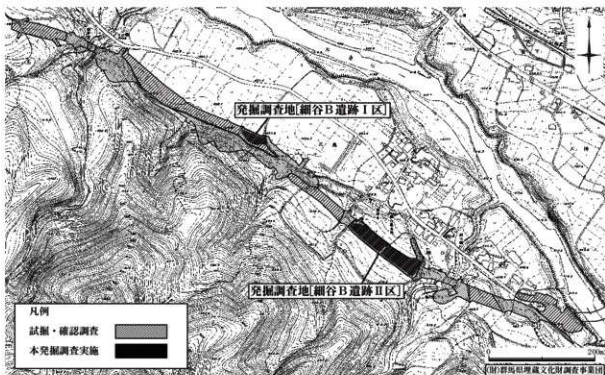
### 第1節 調査に至る経過

一般県道林岩下線は、ハッ場ダム建設に伴う水没者の生活再建の場となる長野原町の林・川原湯兩代替地とダム下流の東吾妻町三島地区等を相互に結び、JR岩島駅前へ至る道路であり、水源地域住民の生活用道路として、また観光客の交通の利便性を確保し地域振興を図る目的で策定された重要な路線である。平成7年度より吾妻郡東吾妻町大字三島から岩下地下内で工事を進め、平成20年3月26日東吾妻町大字三島地内の町道新井横谷松谷線交差点から同岩下地下内の国道145号線交差点までの440mが部分開通した。開通にあわせて県道名を「一般県道林岩下線」改め「一般県道林岩下線」に変更した。

本工事に伴う埋蔵文化財調査は、群馬県教育委員会文化課がハッ場ダム水源地域対策事務所からの調査依頼に対し、平成15年度より随時試掘・確認調査を実施した。今回の発掘調査は平成19年7月20日、同年11月2・7・8日の試掘・確認調査により遺構が検出され調査が必要であるとなった。

平成19年11月22日群馬県知事より文化財保護

法第94条に基づく届出があり群馬県教育委員会教育長は記録保存のための発掘調査の実施を勧告した。これを受けて、県教委文化課は発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施することで調整を行った。平成20年3月14日対策事務所所長飯塚敬と県埋文事業団理事長高橋勇夫との間で、「埋蔵文化財発掘調査・整理委託契約」を締結した。平成20年4月1日県埋文事業団理事長は「文化財保護法第92条第1項の届出」を提出し、県教育長より「埋蔵文化財の発掘調査について（通知）」を受理した。発掘調査は平成20年4月1日より開始し、平成20年6月30日まで行った。平成20年7月1日吾妻警察署長及び県教育長あて「埋蔵物発見届」「埋蔵物保管証」を提出し、吾妻警察署長より「拾得物件預り書」を受領した。平成20年7月14日県教委文化財保護課長は発掘調査整理を県埋文事業団が行うことで調整した。平成20年8月19日発掘調査事業は平成20年度内に調査・整理、報告書刊行となることから「変更委託契約書」を締結した。埋蔵文化財発掘調査整理事業は、平成20年10月1日から12月26日まで実施した。



第1図 一般県道林岩下線と埋蔵文化財調査

## 第2節 発掘作業の経過

平成20年4月1日より発掘調査準備を進め、4月8日に水資源対策事務所より調査事務所用地として橋梁付近の取り付け道路部分を借用した。また、座標杭打設のための基準点資料を水資源対策事務所より借用し、14日より測量を開始した。なお、座標は工事関連で日本測地系である。4月9日地元住民に対し、全戸配布で調査開始のお知らせを行った。4月10日より作業員を投入し、調査区域の雑草等の除去や調査区域の杭打設等を行い、調査環境を整備した。

本発掘調査は、調査区への進入路が狭いこと、その道路が一般農道であることから、極力重機の移動を少なくするため調査区内で排土処理を行うことで八ッ場ダム水源地域対策事務所と調整した。

調査は、地元農道の確保と排土処理を最優先課題とし、調査区域を設定し実施した。Ⅰ区は、調査区を横断する農道を調査区最東側に付け替え、調査区を東西に2分割した。Ⅱ区は、地形を考え、東西の

微高地と谷状に低くなる中央の3分割にした。さらに農道は調査区を斜に通過することから、南側に付け替えた。

調査は以下の日程に行った。

4月14日～4月21日 Ⅱ区 西側西

4月24日～4月30日 Ⅰ区

4月25日～5月8日 Ⅱ区 西側東

5月9日～5月22日 Ⅱ区 東側

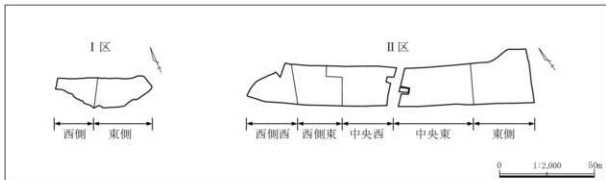
5月19日～6月19日 Ⅱ区中央西

6月12日～6月30日 Ⅱ区中央東

以上の日程で調査は終了し、7月2日八ッ場ダム水源地域対策事務所所員の立会のもと調査地域の引き渡しを完了した。

なお、本調査区中央の未解決地及び南側農道部分については、県教委文化財保護課より本発掘調査は不要との判断がなされた。

本遺跡での特記事項としては、6月14日（土）に地元の方々へ発掘調査風景と成果を示す「地元現地見学会」を行い、31名の参加者があった。



第2図 調査区概要図

## 第3節 整理等作業の経過

平成20年10月1日より開始し、遺物は接合・実測・拓本等により資料化し、遺構は平面図・断面図、遺物出土状態等から資料化した。

整理中に自然科学分析を2件委託を行った。発掘調査中に採取した6号住居跡出土の炭化材について樹種同定を行い当時の構築材を明らかにする目的で行った。また、住居跡や土坑の埋没土層に検出された火山灰の時期を明らかにする目的もふくめ、6号住居跡の埋没土について火山灰分析を行った。

本報告書作成の編集作業はデジタルで行った。この編集には、まず各遺構の調査図面の修正のデータ化と遺構図の平面図断面図のバランス調整、個々の遺物図データ化を行った。次に原稿文章と遺構図の土層註記や番号等、遺物図配置と遺物番号付記等を行った。

整理終了に伴い、遺物・遺構図・写真等はすべて埋蔵文化財調査センターに資料提供し、すいように分類整理し収納した。



## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

細谷B遺跡は、東吾妻町大字三島字細谷に所在する。東吾妻町は、群馬県の北西部にある吾妻郡のほぼ中央に位置する。北は中之条町、西は長野原町、東は渋川市、南は高崎市に接する。北部には吾嬭山(1181.5m)・栗師岳(974.4m)があり、その南側を吾妻川が東流する。西は、高間山(1341.7m)・菅峰(1473.5m)・浅間隠山(1756.7m)があり、東南部は榛名山北西麓にあたる。西側の長野原町とは、国指定名勝吾妻峡(昭和10年12月24日指定)で境となる。吾妻峡のある吾妻川は長野県境に位置する鳥居峠(1362m)に源を発し、吾妻郡内を東流し、渋川市白井と渋川市渋川の境界で利根川に合流する。

吾妻川は、「草津白根山」「硫黄」を含んだ火山)を供給源とする「草津温泉」「万座温泉」「旧硫黄鉱山の坑内排水」等の強酸性水の流入(湯川、谷沢川、大沢川)により魚も棲まない「死の川」と呼ばれていた。群馬県企業局は酸性水流入の最大原因となる湯川に酸性水中和施設を建設し、石灰を大量に投入することで河川水のpH値を中和する「吾妻川総合開発事業」を昭和32年(1957年)より始め、昭和39年にダムを始めとする吾妻川の中和施設は完成した。世界最初の河水中和事業である。現在では、品木ダム水質管理所が行っている中和事業によって、魚類が生息する川に生まれ変わった。

遺跡地は、東吾妻町の西端に位置し、北側は吾妻川が東流する。南側には菅峰の尾根続きの芦鞍山(895.4m)や三島山(986.5m)の坂上山脈(「吾妻郡誌」より)が連なっている。谷間の地形である。

本遺跡から岩櫃山(802m)が真東の方向に見える。吾妻川は吾妻峡を過ぎ東吾妻町に入ると川幅もやや広くなり河岸段丘を形成している。本遺跡はこの段丘が始まる西端に位置する。河岸段丘は二段が形成され、調査区Ⅰ区は下位河岸段丘に位置し、Ⅱ区は上位河岸段丘に位置するが、南側はすぐ三島山麓に移行する。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡周辺には全国的に重要な遺物や遺構が検出されている。本遺跡より吾妻川下流4.5kmの左岸には国指定重要文化財であるハート型土器(縄文時代後期)(指定番号274 昭和40年5月29日指定)が出土した郷原遺跡や、郷原遺跡の北にそびえる岩櫃山には、弥生時代中期の土器標式「岩櫃山式土器」が出土した鷹ノ巣洞窟遺跡など学史的にも重要な遺跡である。また、本遺跡より吾妻川対岸1kmの段丘上にある、群馬県指定史跡「姉山の石組かまど」は古墳時代住居跡である。このように縄文時代から古墳時代の各時代において国や県で重要とする遺跡がある。本遺跡はこれら吾妻川右岸に存在する遺跡に対し吾妻川の対岸に位置する。吾妻川右岸の歴史解明の一資料を提供するものとなる。

本遺跡周辺遺跡を時代別に概観する。

**旧石器時代** 現在確認されていない。

**縄文時代** 中期から後期の集落は、本遺跡より西へ1.8kmの吾妻川右岸の上位段丘面の上郷A遺跡(3)と下位段丘面の上郷岡原遺跡(4)がある。上郷A遺跡では5軒の住居跡が検出している。住居跡は敷石住居や石囲炉や伏襲を伴うものである。上郷岡原遺跡では11軒の住居跡と配石・列石・集石遺構が検出している。住居跡は敷石住居や石囲炉や埋襲を伴うものである。特に石囲埋襲炉から三十稲葉式土器が出土している。その他上郷A遺跡からは90基程の陥穴が検出しており、平面楕円形・底面長方形を呈する土坑、平面長方形・底面長方形を呈するもの、平面円形を呈するもの、底面溝状を呈するもの等に分類されている。なお、陥穴の時期については、縄文時代から平安時代と時間幅を持たせている。このような陥穴は本遺跡でも検出されており陥穴構築時期については妥当であると考えられる。しかし本遺跡も含め当地域が狩猟の場としていたことが窺える。

後期から晩期の遺跡は、本遺跡より2.7km東の吾妻川右岸の下位段丘面の唐堀遺跡がある。本遺跡の

調査では吾妻川の水流を見ながらの調査であった。当地で後期から晩期の土器片が多数検出した。

**弥生時代** 中期の遺跡は、本遺跡より東へ1.8kmの吾妻川左岸上位段丘面に前畑遺跡(13)がある。当遺跡は、現在本地域の岩島麻の普及のために造られた「麻の里会館」の位置である。中期前半の土器を伴う再葬墓が2基検出している。その他多数の土器片も出土しており、当遺跡より当方2kmの岩櫃山との関連も示唆しているが、文様構成や出土状況等が異なる事が報告書で指摘されている。なお、住居跡は検出されていない。

散布地としては、本遺跡より東へ800mの吾妻川右岸の細谷E遺跡や、本遺跡より北東へ600mの吾妻川左岸の天神遺跡がある。調査された遺跡は、当地域東側にある東吾妻町原町で善導寺前遺跡や念仏塚遺跡等がある。

**古墳時代** 東吾妻町には多くの古墳が存在し「上毛古墳総覧」には170数基が掲載されている。その分布は東に多く、西では少ない状態が見られる。なお、本町の西に接する長野原町では古墳は確認されていない。本遺跡より東へ1.7kmの吾妻川左岸に机古墳(15)がある。当古墳は、群馬県でも最西端に位置するものと見られている。石室は竪穴状小石塚で5世紀後半から6世紀初頭の構築である。また、吾妻川右岸では本遺跡より南東3.8kmの6世紀前半から7世紀前半の四戸古墳群がある。三島一厚田間の道路に面して石室の天井石等が露出している四戸Ⅲ号古墳は、横穴式の袖無型で、6世紀後半の構築である。なお、この古墳は「上毛古墳総覧」岩島村第13号古墳にあたる。

集落は、本遺跡より北東方向吾妻川対岸に見える県指定史跡「姉山の石組かまど」(18)(昭和33年3月22日県指定史跡、指定台帳45)がある。耕作中に地下2mから発見された。山石を利用した全長1.75m、焚口35cmの石組かまどであり、石組が良好に残り精巧な造りであることから県指定となった。当地点は小範囲の緩やかな傾斜地であり、小集落が形成されていたことが推測される。また、前出

の前畑遺跡(13)では5世紀から7世紀の竪穴住居跡が11軒検出している。ほとんどの住居跡かまどは、東壁にあり礎が使用されている。5世紀代が2軒、6世紀代が6軒、7世紀代が3軒であり、古墳構築時の集落が考えられる。

本遺跡より東へ800m吾妻川左岸の赤紙遺跡は、耕作中に土師器壺の出土があった。小範囲の緩やかな傾斜地で、小規模な集落の可能性がある。

奈良・平安時代 古代吾妻郡に「太田郷」「長田郷」「伊参郷」の3つの郷が「延喜式」及び「和名類聚抄」にあり、本地域の三島は太田郷に属したものと考えられている。本時代になると集落や住居の分布に広がりが見られる。前出した上郷岡原遺跡(4)では小規模な9世紀から10世紀の集落である。住居跡は9世紀代7軒、10世紀代2軒である。9世紀代の1軒は良好な石組かまどで天井石も残存し、支脚石上に須恵器壺が据え置かれた状態で検出された。本遺跡より西へ1km程の上郷岡原遺跡(4)に隣接する上郷B遺跡(5)では、10世紀前半の住居跡が1軒検出した。かまどは石組かまどである。

吾妻川左岸の前出の前畑遺跡(13)は5世紀から11世紀にかけて継続的に営まれた集落遺跡である。8世紀になると7軒と当遺跡最多の住居軒数となり、9世紀3軒、10世紀はなく、11世紀3軒が検出した。

本遺跡は吾妻川右岸に展開した上郷岡原遺跡(4)、上郷B遺跡(5)に続く10世紀代の小規模集落である。また、左岸の前畑遺跡(13)で検出されなかった時代であることは今後の調査例の増加を待つ必要がある。

**中世** この時代の遺跡は岩櫃城や岩下城、根小屋城(12)など城館址がある。岩櫃城と岩下城の距離は3km、岩下城と根小屋城の距離は吾妻川を挟み1kmである。吾妻郡は戦国期には武田氏が上野へ侵攻する上で重要な地点であった。

岩櫃城は、14世紀頃築かれた代表的な山城で、吾妻郡の政治・軍事の中心であった。城主は吾妻太郎(斉藤氏襲)の名で知られている。のちに武田信玄の支配に属し、久能城(静岡県)、岩殿城(山梨

県)と共に武田氏の三名城の一つと言われた。武田氏の没落後は真田氏の城となり、元和元年(1615)に廃城となった。

岩櫃城主斉藤氏と岩下城富沢氏とは主従関係であるが、根小屋城は大戸城方にあり岩櫃城攻めの拠点となった。岩櫃城が武田方になるとその役目を終え廃城となった(天正年間1574頃)。

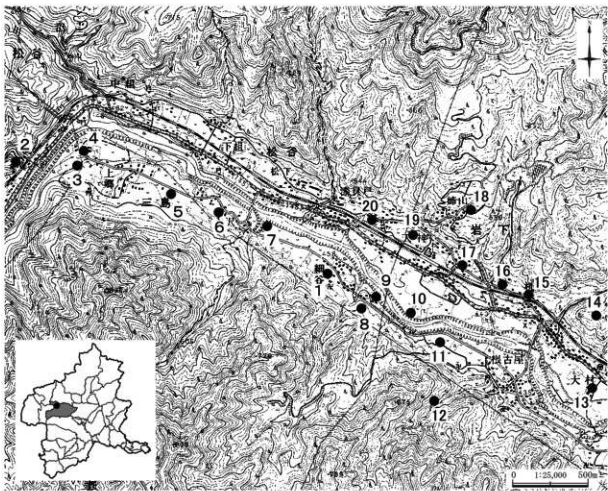
近世 本地域は、農業を主に生計をなし、主な産物は麻と繭であった。当地は真田領から1682年に天領となった。江戸時代、群馬県の麻の主産地は甘楽郡、吾妻郡岩島地方周辺一帯で、原料麻の産地として知られていた。麻織物は極めて少なく、大部分は原料麻として売り出されていた。当時、地元商人の菅谷勘右衛門や上州一の分限者、大戸の加部安左衛門は大量の麻を購入して、倉賀野河岸から船で江戸の麻問屋に納め、需要に応じて北陸、関西方面に

出荷していた。

現在「岩島の麻栽培と精麻生産」は、平成4年5月15日に県選定保存技術の県選定文化財(指定台帳15)の指定を受け保存団体吾妻麻保存会により保存・伝承が成されている。

1783年(天明三年)の浅間山大噴火で吾妻川を流下した泥流の被害を受けた下位河岸段丘面ではこの泥流が厚く堆積する。上郷岡原遺跡(4)では泥流下に畑とともに屋敷の基礎部分や多くの生活用品が残された民家跡が見つかっている。本遺跡1区でも畑が検出されている。

また、本発掘調査区Ⅱ区の北側に神社があり、明治41年に三島地区一円を氏子とする鳥頭神社へ合祀された。本発掘調査では寺域の跡に注意したが、検出されなかった。



第3図 細谷B遺跡周辺の環境

[図1:地理院1:25,000地形図を使用]

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	町遺跡番号	所在地	時代・主な遺構	備考
1	細谷B遺跡	0060	三島	縄文土器、平安(住居11軒)、近世(A泥流下掘)、陥穴61基	本報告書
2	雁ヶ沢の岩跡	0078	松谷	中世(城館跡)立地:山・平地、存続期間:16世紀、築・在城者:横谷氏、遺構・遺物等:堀切・腰郭	群馬県教委「中世城館跡」No.777
3	上郷A遺跡	0017	三島	縄文(住居5軒)、陥穴91基	群馬県埋文事業団第349集「久々戸遺跡(2)中郷B遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡」
4	上郷岡原遺跡	0095	三島	縄文(住居11軒)、平安(住居9軒)、近世(A泥流下掘・屋敷跡)	群馬県埋文事業団第410集「上郷岡原遺跡(1)」、群馬県埋文事業団第438集「上郷岡原遺跡(2)」
5	上郷B遺跡	0057	三島	縄文土器、平安(住居1軒)、陥穴22基	群馬県埋文事業団第379集「上郷B遺跡・寶石A遺跡・二反沢遺跡」
6	大沢遺跡	0058	三島	縄文、平安、近世、近代	包蔵地
7	細谷A遺跡	0059	三島	縄文	包蔵地
8	細谷C遺跡	0061	三島	縄文、平安	包蔵地
9	細谷D遺跡	0062	三島	縄文	包蔵地
10	奈天沼遺跡	0039	岩下	縄文	包蔵地
11	細谷E遺跡	0063	三島	弥生	包蔵地
12	根小屋城跡	0081	三島	中世(城館跡)立地:山林・高、存続期間:16世紀、築・在城者:江見氏・浦野下守野、遺構・遺物等:堀切・塹壕・戸口・腰郭	群馬県教委「中世城館跡」No.780
13	前畑遺跡	0014	岩下	縄文土器、弥生(中期土坑9基、内2基は再葬墓)、古墳(住居11軒)、奈良平安(住居13軒)中世(墓坑4基)、土坑18基	吾妻町教委「前原遺跡」1998
14	岩下城跡	0080	岩下	中世(城館跡)立地:山林・高・社地、存続期間:16世紀、築・在城者:斉藤氏・富沢氏、遺構・遺物等:堀切・土居・塹壕・戸口・腰郭	群馬県教委「中世城館跡」No.779
15	机古墳	0015	岩下	古墳(5世紀後半～6世紀初頭、塹穴式石室)	昭和40年1月に調査。詳細は岩島村誌p1355「四戸古墳群及び机古墳発掘調査報告」
16	北浦遺跡	0041	岩下	縄文	包蔵地
17	赤紙遺跡	0040	岩下	古墳	岩島村誌、包蔵地
18	峠山の石組かまど	0016	岩下	古墳	県指定史跡(昭和33年3月22日指定)
19	天神遺跡	0038	岩下	弥生、古墳、平安	包蔵地
20	猿貝戸遺跡	0064	岩下	縄文、古墳	包蔵地
—	岩棚城	0032	原町	中世(城館跡)立地:山・平地、存続期間:16世紀、築・在城者:斉藤憲広・富沢氏・海野幸光、遺構・遺物等:本城・柳沢城天狗丸・平沢根小屋等から成る	群馬県教委「中世城館跡」No.781
—	大戸城(千子丸城)	0033	大戸	中世(城館跡)立地:山、存続期間:16世紀、築・在城者:浦野氏・北条氏・日向大和入道・斉藤定盛、遺構・遺物等:堀切・腰郭・戸口・塹壕・土居・井戸・根小屋	群馬県教委「中世城館跡」No.775
—	四戸古墳群	0020	三島	古墳(「上毛古墳群」に21基掲載、6世紀前半～7世紀初頭、横穴式石室)	昭和39年7-8月・42年4月に4基調査。詳細は岩島村誌p1355「四戸古墳群及び机古墳発掘調査報告」

### 第3章 調査の方法と成果

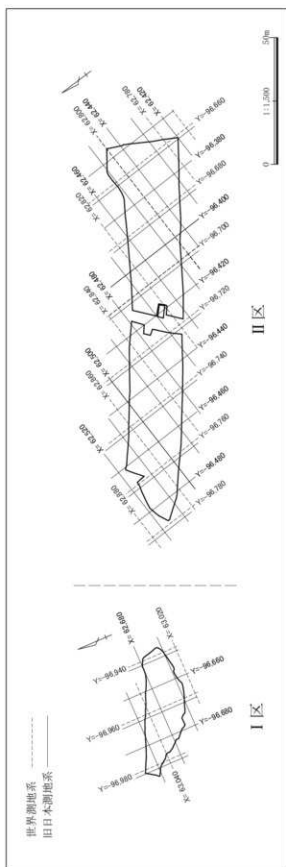
#### 第1節 調査方法

遺構・遺物の記録方法として、グリッド設定による調査方法を基本とした。グリッドは日本測地系第9系に基づく5m方眼を設定した。グリッド名称は南東隅の5m単位の座標値の下3桁を用い、X値・Y値の順で標記した。なお、本遺跡の中心部に位置する480-420は、日本測地系X=62,480、Y=96,420を表し、世界測地系のX=62,834.96、Y=96,711.51である。

発掘調査において、表土掘削等は調査の効率化を図るため掘削機械を使用した。Ⅰ区は表土とA泥流の除去を行い、泥流中の遺物を採取しながら進めた。Ⅱ区は西側（西・東）と東側では表土除去を行い、表土直下にローム面を検出した。中央（西・東）は表土直下の黒色土面まで行った。その後人力によるグリッドトレンチ調査で土層確認を行い、厚く堆積した黒色土を除去し、ローム面を検出した。機械掘削後の遺構等掘削は人力で行った。

遺構等の記録は、測量と写真撮影と文書で行った。測量は、地上測量で行い、住居跡1/20、カマド1/10、土坑1/20、溝1/40、畑1/40、全体図1/100の縮尺を基本に行った。断面図は1/10・1/20で行った。写真撮影は、全体・各遺構・土層断面等に対し担当職員が行った。使用した機種はブローニー版(120)一眼レフ7×7(ペンタックス)、一眼レフ35mm(キャノンEOS)。フィルムはモノクロームとデジタルで行った。

出土遺物は、出土位置を記録し適宜出土状況等の写真撮影を行い取り上げた。その後遺構毎に分別し収納ケースに保管した。出土品の洗浄・注記は出土量が少ないことから発掘調査中より機会を見て担当が行った。



第4図 調査区及びグリッド配置図

## 第2節 基本土層

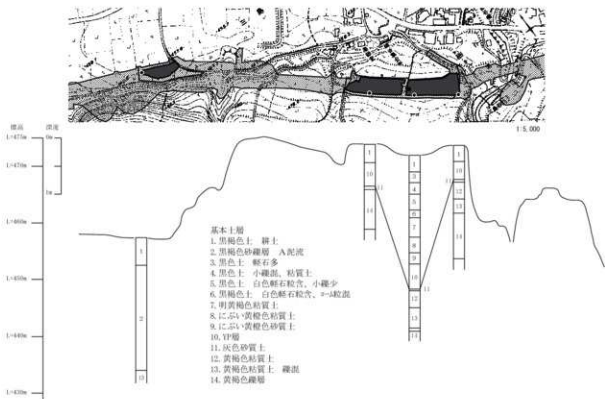
細谷B遺跡は、2地点で調査が行われた。

I区は吾妻川の河岸段丘の下段で標高458m、II区は上段で標高473m程を測る。I区では表土(1層)50cm程下にAs-A泥流(2層)が1.8m程堆積し黄褐色土(13層)の畑面が検出した。なお、黄褐色土層は畑面より50cm以上深く砂礫層が続き、周辺の試掘・確認調査結果より山体崩落土であることが判明している。畑耕作土は上層のわずかな土壌を使用されていたものと考えられる。

II区ではローム層が良好に堆積する。調査区は微高地と谷地形とに大別され、微高地部分は耕作によりローム上層の粘質土が除去されYP層(10層)が露出していた。谷地形部分ではAs-A軽石(3層)の堆積が見られ、住居跡や土坑の検出する部分については、軽石層(3層)下層に火山灰(As-Kk)が確認された。以下黒色土(4~6層)が最深部1.2mほど堆積していた。遺構確認面は微高地部では表土下のローム面で行われ、谷地形部では軽石層(3層)下

で住居跡は確認し、土坑については厚く堆積した黒色土中で断面を確認し、その後ローム(7層)上面で調査を行った。旧石器の試掘溝を5カ所行ったが遺物の出土は無かった。

本路線調査にあたって試掘・確認調査を実施した。結果、I区西側は山体崩落による黄褐色砂礫層が厚く堆積し、遺構・遺物は検出しなかった。II区に接し谷を挟み西と東に微高地がある。西側微高地は中央西側では表土下に10cm厚の黒色土の堆積と安定したローム層を確認したが遺構遺物は検出されなかった。東側は表土にも礫を含み表土下は山体崩落による黄褐色土砂礫層となる。また、東側微高地でも高い所では表土下に10cm厚保の黒色土、下層にローム層を確認し、低い部分では表土下はYP層となっていた。ともに平坦面の面積が狭いことと、日照時間の問題から遺跡が希薄であったものと考えられる。



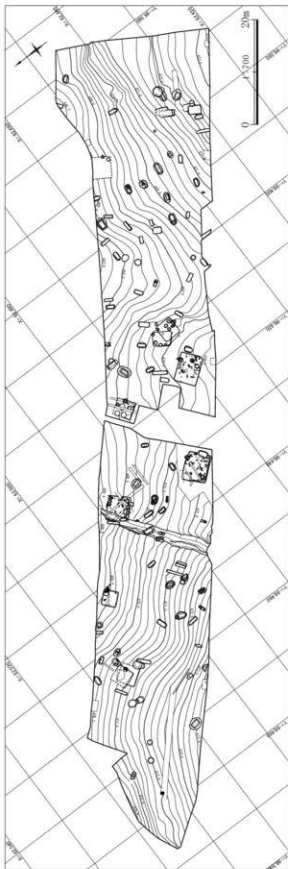
第5図 土層柱状図

### 第3節 遺構と遺物

細谷B遺跡より検出した遺構は、平安時代住居跡11軒、縄文時代～近代の土坑9基、近代集石遺構2基、近世溝1条、近世畑6区画である。

I区は、現在集落の広がる標高458m付近であり、天明三年以前はさらに低い地形を成し、畑等の生活が成されていた。しかし、天明三年の浅間山噴火に伴う泥流により2m程埋没し、現在の地形になったことが判明した。調査では、近世畑6区画とともに泥流が南側の山裾に押し寄せた状況を解明することができた。

II区は、現在の集落より15m程高い標高470m程の山裾にわずかに開かれた畑地帯である。現在の状況は北側に傾斜するほぼ平坦面で地形変換は明瞭ではない。しかし、調査の結果、ローム面は谷地形とそれを挟む微高地で形成されていた。なお、微高地は現在より高く、耕地拡大の際に削平されたことが分かった。特に中央部で検出した住居跡、土坑には火山灰(As-Kk)の堆積が良好に残存し、噴火降灰時期には窪みとなっていたことがうかがえた。このことから火山灰降下以前の構築と考えられる。住居跡は南東にカマドを付設するタイプと南西に付設するタイプがあり、両タイプともに遺物の出土はカマド部に集中し、居住域からの出土はほとんど無かった。土坑はAs-A軽石を充填する復旧溝と狩猟目的の陥穴とに2分される。陥穴は確認面が楕円形を呈し、底面が長方形を成すものと、確認面及び底面が長方形を成すものがある。溝は、微高地と谷地形の変換点に沿うように南西-北東方向に検出した。覆土から近代のものと考えられるが、地元の古老もその存在を知らないことから近世までさかのぼる可能性がある。検出された遺構は平安時代を中心とするが、縄文時代の土器片もわずかではあるが出土しており、その時期は前期が多いことから周辺に同時代の遺構の存在がうかがえる。



第6図 II区遺構配置図

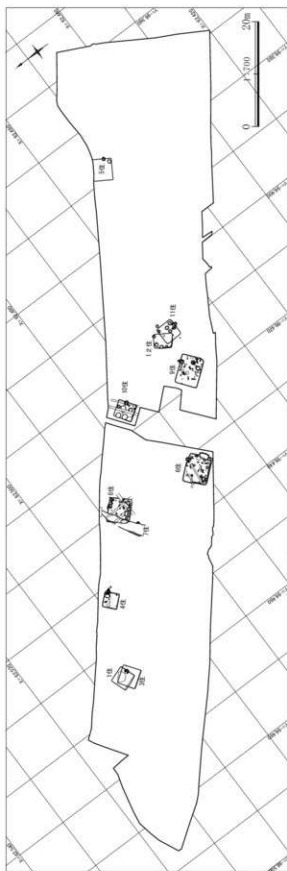
## 1 住居跡

住居跡は、II区で11軒を検出した。時期は10世紀前半から11世紀前半の約100年間であり、9世紀代の住居は確認されていない。

これまで東吾妻町では、10世紀後半から11世紀段階の住居跡はほとんど報告されていない。この遺跡ではその段階の住居が多い。その中で11号住居跡は、出土遺物から見て、竪穴住居跡から出土する平安時代の遺物の煮沸と盛器のセットとして出土するおそらく最終段階に近い遺物群である。土師器や須恵器と言った概念から離れた古代より中世に近い遺物群と思われる。

住居の分布状況は、調査区中央東側の谷頭に向かって低くなりその高い部分が居住域となっている。調査範囲が狭く全体でも11軒と調査例が少ないが、傾向として10世紀前半代の住居は、西側の高い部分に集中し、10世紀後半から11世紀になると、中央の谷部縁辺部に多くなるようである。この地区の10世紀後半の6・8号住居跡覆土上位置、9・11号住居跡の覆土中位置から、緑灰色砂質土（As-Kk 粕川テフラ1128年）が確認されている。この時期に近い時期の住居である事を物語っている。

住居の確認面は、西側に微高地及び東側微高地は表土下のローム及びYP層である。中央部は表土及び軽石多混土下の黒色土が確認面となる。住居は黒色土を掘り込み、ローム面を床面とする。床面の標高は470cmを測り、1・3・6・9号住居跡が高く4・5・7・8・10・11・12号住居跡は等高線に沿うように低くなる。最も高いのは1号住居の470.87m、最も低いのは8号住居の469.07m、比高差1.8mは傾斜地形を反映させている。カマドは南東壁及び北東壁に付設される石組みカマドである。カマド内には支脚石が残されているものもある。出土遺物量は少ない。カマド内外から使用時の物及びカマド構築材として使用された羽釜等が出土している。以下住居番号順に報告するが、2号住居跡は調査の進捗精査により生じた欠番であり、報告に際しても準拠している。



第7図 住居跡配置図



## 1号住居跡 (第8~10図、PL.20)

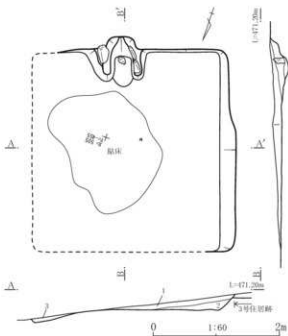
**位置** 500-455グリッドに位置する。

**重複関係** 3号住居跡と重複する。本住居跡の方が新しい。

**規模** 規模は南北3.2m、東西3.24mを推測する。床面積9.05㎡を測る。

**主軸方位** E-73°-Sを示す。

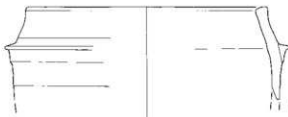
**形態** 住居跡の平面形は隅丸方形を呈し、確認面は表土下のローム面である。なお、北東側は地形の傾斜にあわせローム面も削平されており不明である。覆土は焼土粒混の自然埋没である。残存する西壁の状態は、ローム面を掘り抜き、傾斜角度は急で垂直に近く、壁の崩壊は少ない。壁高は西壁20cmを測る。



1号住居跡

1. 黒褐色土 小礫含、焼土粒・炭化粒含
2. 暗褐色土 焼土粒・炭化粒含、 $\alpha$ -M粒・ $\beta$ -M $\alpha$ 含
3. 黒褐色土 小礫含、炭化粒少、 $\alpha$ -M粒混

第8図 1号住居跡平・断面図

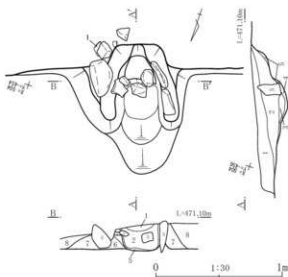


第10図 1号住居跡出土遺物図

**内部施設** 柱穴・貯蔵穴・周溝は確認されなかった。

**床** 床面はローム面である。YP粒を含む黒色土で平坦面を構築し、カマド手前にはロームと黒色土を混ぜた土で薄く貼床を行っている。東側は削平されYP層が露出している。

**カマド** 南壁中央に位置する。石組カマドである。確認は表土除去直下で、左袖部の礫と焼土ブロック範囲を検出した。燃焼部は壁を僅かに掘り込み構築されている。煙道部は削平されている。規模は全長78cm、幅50cm、壁外長17cm、焚口幅32cm、燃焼部長48cmを測る。主軸方位は、住居壁に対しやや東に傾くE-71°-Sを示す。燃焼部は箱形で内面は一様に赤化し、覆土には焼土層が厚く堆積してい



1号住居跡カマド

1. 暗褐色土 焼土粒・炭化粒少
2. 暗褐色土 焼土 $\beta$ 混、黄褐色粘土 $\beta$ 混
3. 焼土層
4. 黒褐色土 焼土粒・炭化粒含
5. 焼土塊
6. 暗褐色土 焼土 $\beta$ 混
7. 暗褐色土 焼土粒・黄褐色粘土及 $\beta$ 混
8. 暗褐色土 小礫含、焼土粒・炭化粒含

第9図 1号住居跡カマド平・断面図

る。奥壁部分では焼土が堅く壁面をなしていた。中央部に長軸15cm、短軸8cm、高さ18cmの支脚石が据え置かれている。支脚底部は住居床面より3cm程下がりに、灰層が見られる。火床面は住居床面より8cmほど下がる。袖は両袖ともに礫を心材としてローム混土の粘土を貼り付け構築されている。壁面には板状の礫が使用され、煙道部付近には角礫が散乱し

ていた。

**遺物出土状態** 遺物は、カマド部に羽釜片や甕胴部片数点あり、(1)の羽釜口縁部片は左袖付近に出土した。住居内からは甕胴部細片と須恵器碗口縁部細片が3点程出土したのみである。

**時期** 本住居跡の構築は、羽釜等出土遺物から10世紀前半と考えられる。

第2表 1号住居跡出土遺物観察表(第10図、PL.20)

No. PL.	種類 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径/底径/器高	胎土/焼成/色調	成整形の特徴	概要
1	須恵器 羽釜	カマド 口縁部片	(19.0) / - / (7.2) 残	細砂粒/酸化塩/ 浅黄	口縁部は内傾し、端部は強い面取り。罅はやや細い。内外面横ナズ。	
2	須恵器 羽釜	覆土 口縁部片	(19.8) / - / (7.5) 残	細・黒砂粒・赤褐色 色粒子含/酸化塩/ 暗褐	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。罅は高く土壇は面取り、一部指頭痕。外面罅に向かう縦方向へ削り。	

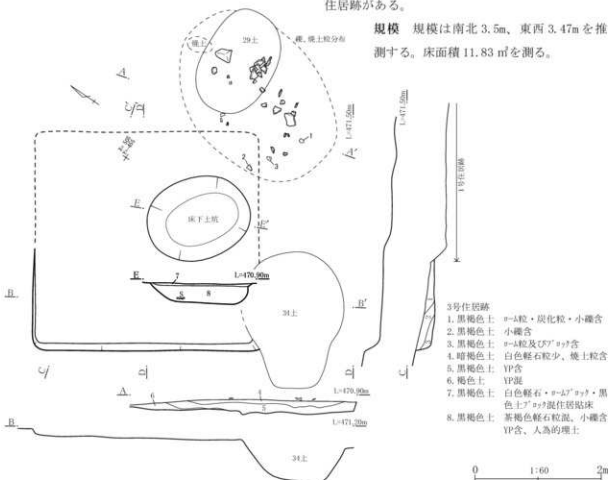
### 3号住居跡 (第11・12図、PL.20)

**位置** 505-455グリッドに位置する。

**重複関係** 1号住居跡と重複する。本住居跡の方

が古い。南隅に34号土坑と東側には29土坑が重複し、共に本住居の方が古い。南東15m程に4号住居跡がある。

**規模** 規模は南北3.5m、東西3.47mを推測する。床面積11.83㎡を測る。



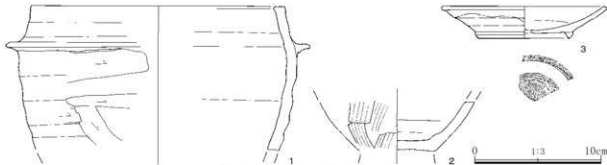
第11図 3号住居跡平・断面図

- 3号住居跡
1. 黒褐色土 砂・炭粒・炭化粒・小礫含
  2. 黒褐色土 小礫含
  3. 黒褐色土 砂・炭粒及び砂・礫含
  4. 暗褐色土 白色軽石粒少、焼土粒含
  5. 黒褐色土 VP含
  6. 褐色土 VP混
  7. 黒褐色土 白色軽石・砂・炭粒・黒色土・砂・炭粒住居跡床
  8. 黒褐色土 茶褐色軽石粒混、小礫含、VP含、人為的埋土

**主軸方位** E-55°-Sを示す。

**形態** 住居跡の平面形は隅丸方形を推定し、確認面は表土下のローム面であり、地形の傾斜にあわせローム面も削平されており、北東側は不明である。1号住居跡調査トレンチ調査にて確認された。覆土は焼土粒混の自然埋没である。残存する西壁の状態は、ローム面を掘り抜き、傾斜角度は急で垂直に近く、壁の崩壊は少ない。壁高は西壁22 cmを測る。

**内部施設** 柱穴・貯蔵穴・周溝は確認されなかった。  
**床** 床面の状況は、ローム面を硬化している。東側でロームと黒色土を混入する貼り床があり、その下部に平面形楕円形を呈する長軸162 cm、短軸130 cm、



第12図 3号住居跡出土遺物図

第3表 3号住居跡出土遺物観察表(第12図、PL20)

No. PL	種別 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径/底径/器高	胎土/焼成/色調	成整形の特徴	備考
1	須臾器 羽釜	カマド 口縁部片	(20.6) / - / (9.3) 残	細砂粒/酸化焙/ 灰黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面横すず。	
2	須臾器 羽釜	カマド 底部片	- / (6.9) / (3.9)	細砂粒/酸化焙/ 褐色	台底面剥離。胴部縦方向籠所り。	
3	扁軸陶器 皿	カマド 1/6	(13.0) / (7.2) / 2.6	緻密/還元焙/灰 白	体部は直線的に開く。内外面ロクロ整形。高台 貼付。	

#### 4号住居跡 (第13~16図、PL 20)

**位置** 495-440 グリッドに位置する。

**重複関係** 重複する遺構はない。北西15m程に1号・3号住居跡、南東16m程に8号住居跡がある。

**規模** 規模は南北2.8m、東西2.78mを測る。床面積 6.66 m<sup>2</sup>を測る。

**主軸方位** E-52°-Sを示す。

**形態** 住居跡の平面形は隅丸方形を呈し、確認面は表土下の黒色土である。覆土は焼土粒混の自然埋没で、床面より30 cmほど上層に30 cm大の礫の混入、10 cm程上に焼土ブロックや炭化物の混入が見られた。壁の状態は、黒色土を掘り抜き、ローム層を一

深さは床面から30 cmを測る土坑が検出した。土坑覆土は黒褐色土・ローム等が斑状にある人為的な埋め土である。

**カマド** 東壁隅の構築を推測する。住居東側に礫と土器、焼土粒の分布がみられたことから、本住居跡のカマドを推測した。カマド部は29号土坑と重複し、土坑覆土には焼土粒の混入がみられることから、本住居跡カマドを壊して構築されたものと考えられる。

**遺物出土状態** 遺物は、東隅のカマド想定部分に集中する。住居内からの出土は極僅かの細片であった。

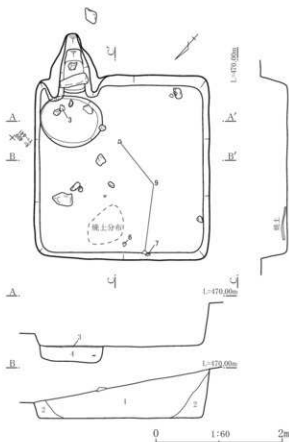
**時期** 本住居跡の構築は、羽釜等出土遺物から10世紀前半と考えられる。

部掘り込んでいる。傾斜角度は急で垂直に近く、壁の崩壊は少ない。壁高は北壁38 cm、南壁43 cm、東壁36 cm、西壁74 cmを測る。

**内部施設** 柱穴・貯蔵穴・周溝は確認されなかった。

**床** 床面の状況は、黒色土の硬化している部分とローム層の硬化部分がある。カマド手前でロームと黒色土を混入する貼り床があり、その下部に長軸100 cm、短軸80 cm、深さは床面から25 cmを測る土坑が検出した。壁面にはロームブロックが貼付され、確認時ロームブロックが筋状に楕円形を成していた。覆土は黒色土・ローム等が斑状にある人為的な埋め土である。

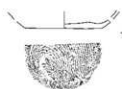
**カマド** 南壁側に構築されている。石組カマドである。燃焼部は壁を掘り込み構築されている。規模は全長104 cm、幅60 cm、壁外長68 cm、焚口幅36 cm、燃焼部長50 cmを測る。主軸方位は、住居壁に対し垂直にあり住居主軸と同様にE-52°-Sを示す。確認時に礫と僅かな焼土分布、ロームブロックが見られた。燃焼部は箱形で内面は一樣に赤化し、底面には焼土層が厚く堆積している。また、中央部に11 cm方形で高さ20 cmの角柱の支脚石が据え置かれている。



4号住居跡

1. 黒褐色土 小礫少、焼土粒・炭化粒含
2. 黒色土 焼土粒・炭化粒含、粘性有
3. にごり黄褐色土 砂・砂質多
4. 黒褐色土 砂・A粒及びF・砂質、砂・A粒混、炭化粒含  
人為的埋土

第13図 4号住居跡平・断面図



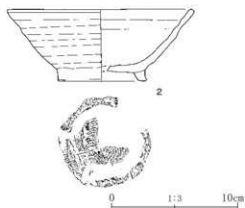
第15図 4号住居跡出土土物図(1)

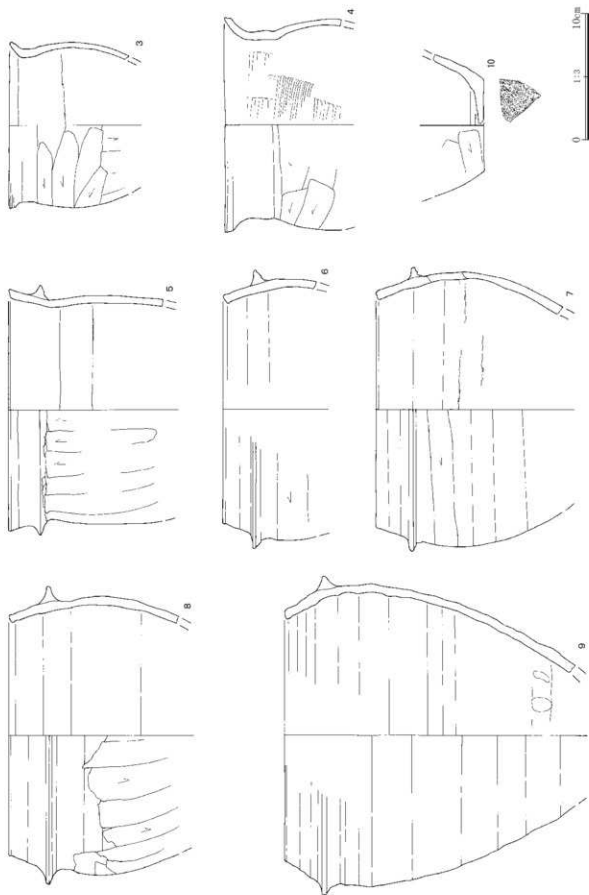


4号住居跡カマド

1. 黒褐色土 小礫少、焼土粒・炭化粒含
2. 黒褐色土 焼土粒及びF・砂質
3. 焼土層
4. 黒褐色土 焼土粒含

第14図 4号住居跡カマド・断面図





第16図 4号住居跡出土遺物図(2)

支脚底部は住居床面より4cm程上がり、灰層が見られる。火床面は住居床面より3cm程下がる。カマドは、礫を心材として粘土を充填し構築する。側面には板状の礫を壁に沿うように立て掛けるように置き、袖の突出部分には左袖25cm×15cm×20cmの川原石、右袖に25cm×10cm×10cmの山石の切石を配している。その両袖の礫にかけるように長軸43cm、短軸15cm、厚さ14cmの四角柱の礫を乗せている。カマド内には天井礫の板状礫が崩落している。

第4表 4号住居跡出土遺物観察表(第15-16図、PL20)

No. PL	種別 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径/底径/器高	胎土/焼成/色調	成整形の特徴	摘要
1	須恵器 杯	覆土 底部片1/2	— / 6.0 / 60.5	粗砂粒、赤褐色粒子/還元焰/橙	底部右回転糸切り。	
2	須恵器 壺	カマド 1/2	14.6 / 7.0 / 5.6	細砂粒/還元焰/橙灰	体部はほぼ直線的に開く。内外面ともに口縁口整形。底部回転糸切り。雑な付高台。	
3	土師器 小型壺	カマド口縁 ～胴部1/4	(13.0) / — / (9.4)	粗砂粒/酸化焰/鈍褐	「コ」字状口縁。胴上部に最大径を置く。口縁部横撫で。胴部外面造削り。	
4	土師器 壺	カマド 口縁胴部	(17.6) / — / (9.2)	粗砂粒/酸化焰/赤褐	「コ」字状口縁。胴上部に最大径を置く。口縁部横撫で。胴部外面造削り。内面造撫で。	
5	須恵器 羽釜	カマド 口縁～胴上 部1/4	(19.0) / — / (12.1)	粗砂粒/酸化焰/橙	口縁部はわずかに外傾し端部は強い面取り。内外面横ナデ。踵は三角に整形。口縁部横撫で。体部縦方向の造削り。器内が特に薄い。	月夜野型
6	須恵器 羽釜	カマド 口縁部	(18.0) / — / (7.3)	粗砂粒/酸化焰/橙	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。内外面横ナデ。踵は上位で水平に撫で。	
7	須恵器 羽釜	カマド 口縁～胴上 部1/5	(18.6) / — / (14.7)	粗砂粒/酸化焰/鈍黄橙	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。内外面横ナデ。踵端部整形。胴部外面下部は造削り。	
8	須恵器 羽釜	カマド 口縁～胴上 部1/4	(19.0) / — / (13.4)	粗砂粒/酸化焰/橙	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。内外面横ナデ。踵端部整形。胴部外面下部は造削り。	
9	須恵器 羽釜	カマド 口縁～胴部	(19.8) / — / (22.9)	粗砂粒/酸化焰/橙	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。内外面横ナデ。踵は三角に整形。	
10	須恵器 羽釜	カマド 底部	— / (7.2) / (3.9)	粗砂粒/酸化焰/橙	胴部外面下部は造削り。	

## 5号住居跡(第17・18図、PL20)

位置 450-375グリッドに位置する。

重複関係 重複する遺構はない。西30m程に11号・12号住居跡がある。

規模 規模は南北3.98m、東西3.478mを推測する。床面積15.91㎡を測る。

主軸方位 E-33°-Sを示す。

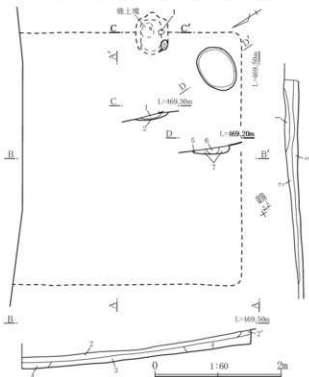
形態 住居跡の平面形は隅丸方形を呈し、確認面はルーム面で、礫と焼土分布を確認した。土層観察はルーム面まで掘削した状態で行い、炭化物混入土層を確認した。住居の覆土は1層が住居床面に相当し、2層が掘り方覆土と考えられる。

遺物出土状態 遺物は、カマド付近に集中し、左袖上に羽釜片(8)が礫に覆うように出土した。火焼面と天井石の間に羽釜(5)が住居内に口縁部を向けて出土した。羽釜(9)は住居カマド対面の壁出土とカマド内出土が接合した。また床下土坑より(9)と同一個体と思われる羽釜胴部片が出土したが接合はしなかった。住居内からの出土は極僅かな細片で、(2)の碗はカマド手前で細片が接合した。

時期 本住居跡の構築は、羽釜等出土遺物から10世紀前半と考えられる。

内部施設 柱穴・周溝は確認されなかった。貯蔵穴は、カマド右側の住居跡南隅に検出した。確認時に5層ルームブロックが外周を成しており、貯蔵穴上位から中位にかけて壁面に貼付られていたものと考えられる。覆土は炭化物を混入する黒褐色土である。床 床面の状況は、カマド手前が僅かに硬化しているが、他の部分は炭化物を含むしまりのない黒色土である。床面は耕作等により残存していない。カマド 南東壁西よりに構築されている。確認時にすでに燃焼部底面であり、焼土範囲と焼土を囲むルームブロック土からカマドを想定した。燃焼部は

壁を掘り込み構築されている。規模は全長67cm、幅50cm、壁外長30cm、焚口幅30cm、燃焼部長53cmを推測する。主軸方位は、住居壁に対し垂直にあり住居主軸と同様にE-33°-Sを示す。燃焼部は箱形で内面は一様に赤化し、特に左壁部分に焼土塊が見られた。右袖部分に長軸17cm、短軸12cm、深



第17図 5号住居跡平・断面図

さ2cm程の楕円形の落ち込みがあり、袖石の抜き取り痕と考えられる。

**遺物出土状態** 遺物は、住居確認時に、カマドに(1)と覆土中から(2)が出土したものであった。

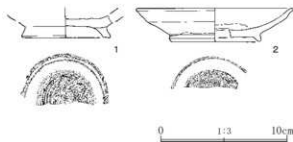
**時期** 本住居跡構築時期は不明であるが、出土遺物から10世紀後半と考えられる。

## 5号住居跡

1. 黒褐色土 炭化粒少
2. 黒色土 0-4粒・白色軽石含、炭化粒少
- 2' 炭化粒混入層
3. 暗褐色土 0-4粒及びアロイ含
4. 黒色土 粘性有、御木組
5. 明褐色土 0-2アロイ・黒色土混
6. 黒褐色土 0-4粒・焼土粒含
7. 黒褐色土 0-4粒及びアロイ、焼土粒・炭化粒・炭化物含

## 5号住居跡カマド (C-C')

1. 黒褐色土 焼土粒含
2. 黒褐色土 焼土アロイ多



第18図 5号住居跡出土遺物図

第5表 5号住居跡出土遺物観察表 (第18図、PL20)

No. PL	種類 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径/底径/器高	胎土/焼成/色調	成形形の特徴	摘要
1	土師質塊 カマド	底部1/2	- / 7.0 / (1.8)	細砂粒/還元焰/ 明焼	底部回転糸切り。付高台は大きく外反して開く。	
2	蓋軸陶器 皿	覆土 1/5	(12.4) / (7.2) / 2.6	微砂粒/還元焰型 織/灰白	体部は直線的に開く。内外面ともロクロ整形。高台貼付。	

## 6号住居跡 (第19~21図、PL.20・21)

**位置** 470-430グリッドに位置する。

**重複関係** 74号土坑と重複する。本住居跡の方が古い。北15m程に8号、東15m程に10号住居跡、南東15m程に9号住居跡がある。

**規模** 規模は南北4.54m、東西5.4mを測る。床面積 21.26㎡を測る。

**主軸方位** N-43°-Eを示す。

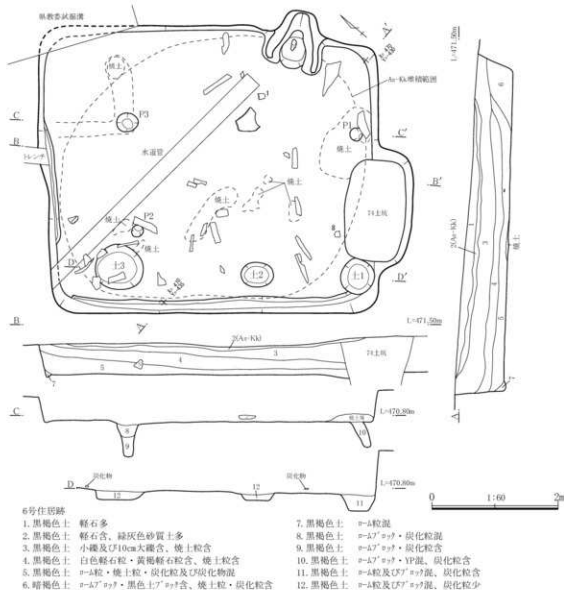
**形態** 住居跡の平面形は隅丸方形を呈し、確認面は表土下の黒色土である。覆土は軽石多混黒色土下に

火山灰層 (As-Kk) があり、以下に焼土粒混土で埋められた自然埋設である。床面より10cm程の間には焼土ブロックや炭化物の混入が見られ、床面直上に炭化物や焼土の分布が見られた。消失家屋と考える。壁の状態は、黒色土を掘り抜き、ローム層を一部掘り込んでいる。傾斜角度は急で垂直に近く、壁の崩壊は少ない。壁高は北壁57cm、南壁77cm、東壁47cmを測る。なお、確認面で周堤帯や外部施設の精査を行ったが耕作により削平され確認できなかった。

**内部施設** 柱穴は3本検出した。4本柱であるが、1本は土坑により壊されていると考えられる。規模はP1直径20cm、深さ40cm、P2は直径20cm、深さ47cm、P3は直径40cm、深さ52cmを測る。周溝は北壁と西壁に検出した。幅は10～15cm、深さ5cm程を測る。P1とP3間は3.7m、P2とP3間を測る。また、西壁より南隔(土1)と中央(土2)西隔(土3)に土坑が検出した。土1は平面円形、断面鍋状を呈し直径54cm、深さ25cmを測る。底面は平坦でYP層である。土2は平面楕円形、断面皿状を呈し、長軸52cm、短軸38cm、深さ12cmを測る。底面は平坦でYP層である。入口部の梯子掘穴と考

えられる。土3は平面不定円形、断面皿状を呈し、直径75cm、深さ15cmを測る。上層には炭化物が多く検出した。各土坑ともに、小粒のロームブロックを混入する黒褐色土でしまりはあまりなかった。土1の上層には炭化粒の混入が顕著であった。

**床** 床面の状況は、ローム層を硬化していた。北隔に南北140cm、東西160cmの方形に幅30cm程の浅い溝状の落ち込みによる区画が見られた。当区画内はあまり硬化していなかった。また、床面より5cm程上には炭化物や炭化粒混の焼土ブロックが見られた。炭化物は棒状や板状を呈するものがあり、住居中央に向かう放射状を呈している。焼土ブロックは



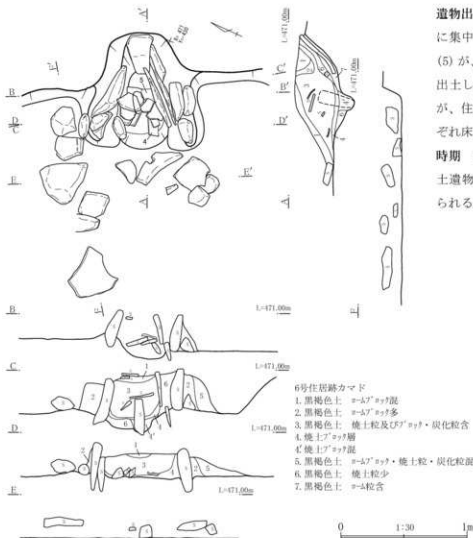
第19図 6号住居跡平・断面図



住居中央から西側に炭化物とともに分布している。土3の上層には炭化物の集中が見られた。炭化材について自然科学分析を行いすべてクリであった。樹種については第4章理化学分析の項を参照されたい。貯蔵穴は確認されなかった。

**カマド** 東壁南よりに構築されている。燃焼部は住居内に構築されている。規模は全長92 cm、幅70 cm、壁外長39 cm、焚口幅38 cm、燃焼部長60 cmを測る。主軸方位は、住居壁に対しやや南に傾くN-63°-Eを示す。確認時に礫と僅かな焼土分布、ロームブロックが見られた。水道管が上部に通過するが、遺構面への影響は少ないが調査はやりにくかった。燃焼部は箱形で内面は一様に赤化し、底面には焼土層

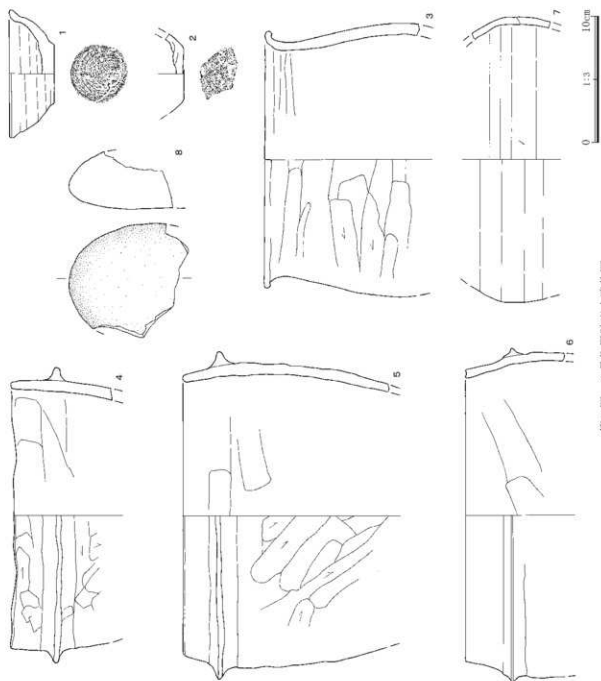
が厚く堆積している。また、燃焼部奥には10 cm方形で高さ55 cmの角柱の支脚石が据え置かれている。支脚底部は住居床面より22 cmほど下がり、礫底部より25 cm程度上位に焼土層が見られる。火床面は住居床面より5 cmほど下がる。カマドは、礫を心材として粘土を充填し構築する。奥壁と側面には板状の礫を壁に立ててある。壁面の礫は緑色を呈し他の礫と異なることから意図的に用いられたものと考えられる。天井礫はカマド手前に散乱し、小さい板状礫は燃焼部に見られた。特にカマド前の長軸80 cm、短軸20 cm、厚さ10 cmの礫は袖に架かる天井礫とみられ、火による影響が僅かな力で割れてしまった。また、カマド構築材のロームブロック土はカマド手前右側に多く分布していた。



第20図 6号住居跡カマド平・断面図

**遺物出土状態** 遺物は、カマドに集中し、燃焼部より羽釜(4)(5)が、左袖付近より甕(3)が出土した。カマド手前に碗(1)が、住居南隅に磨石(8)がそれぞれ床直で出土した。

**時期** 本住居跡構築時期は、出土遺物から10世紀後半と考えられる。



第21図 6号住居跡出土遺物図

第6表 6号住居跡出土遺物観察表(第21図、Pl.20-21)

No. Pl.	種類 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径 / 底径 / 器高	胎土 / 焼成 / 色調	成型形の特徴	摘要
1	土師質 環	カマド ほぼ完形	(10.2) / 4.6 / 3.5	粗砂粒 / 還元焼 / 浅黄橙	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。内外面ともに口口整形。底面は右回転糸切り。	
2	土師質 環	覆土 底部	- / (4.0) / -	粗砂粒 / 酸化焼 / 褐色	底部調整不明。	
3	土師器 土釜	覆土 口縁～胴部	(20.2) / - / (12.1)	粗砂粒 / 酸化焼 / 橙	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は大きく外反する。胴部外面隈削り。口縁部横ナデ、内面ナデにて器表面密。	
4	須恵器 羽釜	カマド 口縁部	(21.6) / - / (7.8)	粗砂粒 / 酸化焼 / 黄黄橙	口縁部は直線的に立ち上がり、端部撫でにより丸みを持ち緩やかな波状を呈する。口縁部、胴に指頭痕有。内外面ともに横ナデ、雑な跡。	

第6表 6号住居跡出土遺物観察表(第21図、PL20-21)

No. Pl.	種類 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径/底径/器高	胎土/焼成/色調	成型形の特徴	摘要
5	須恵器 羽釜	カマド 口縁~胴部	(22.6) / - / (16.1)	粗砂粒/酸化塩/ 褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部丸みがある。口縁部、胴に指頭痕有。内外面口クロ整形。胴部外面は斜に強い段削り。	
6	須恵器 羽釜	覆土 口縁部	(23.0) / - / (7.8)	粗砂粒/酸化塩/ 褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り溝状を有する。踵は低い。内外面横ナツ。	
7	麻輪陶器 長頸壺	覆土 胴部	- / - / -	緻密/還元焙煎窯/ 灰黄	口クロ整形。輪軸は不透明な緑灰色。	
8	右製品 磨石	覆土 1/2	長(9.4)/幅(8.9)/厚(4.5) 重370g		粗粒輝石安山岩。表面を平滑に磨り使用。	

## 7号住居跡(第22~24図、PL.21)

**位置** 485-430 グリッドに位置する。

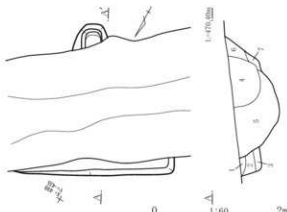
**重複関係** 1号溝と重複する。本住居跡の方が古い。東1m程に8号住居跡がある。

**規模** 規模は南北2.0m、東西2.5mを推測する。床面積4.67㎡を推測する。

**主軸方位** N-30°-Eを示す。

**形態** 住居跡の平面形は隅丸方形を推定し、確認面は表土下の黒色土面である。溝により多くを失うが、僅かに残存する北壁部における覆土は1層に火山灰ブロックが含まれ、その他に焼土粒混の自然埋没である。残存する北壁の状態は、黒色土を掘り抜き、傾斜角度は急で垂直に近く、壁の崩壊は少ない。壁高は北壁30cmを測る。

**内部施設** 柱穴・貯蔵穴・周溝は確認されなかった。



7号住居跡

1. 暗褐色土 白色軽石粒・緑灰色砂混
2. 黒褐色土 白色軽石粒・焼土粒・炭化粒含
3. 黒褐色土 砂・4粒混
4. 暗褐色土 軽石混、灰色砂質土ブロック含
5. 鈍褐色土 軽石混、褐色土ブロックと砂礫の互層
6. 暗褐色土 軽石少、焼土粒混
7. 黒褐色土 軽石少

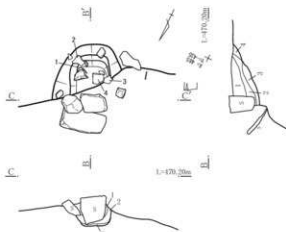
第22図 7号住居跡平・断面図

**床** 床面の状況は、黒色土面を硬化している。

**カマド** 南壁に構築する。溝の調査中に焼土分布と礫が検出したことにより確認した。残存する部分は住居北側との比高差から煙道部と思われる。残存している規模は全長35cm、幅50cmを測る。主軸方位は、住居壁に対し垂直にあり住居主軸と同様にN-30°-Eを示す。左側にある10cm方形、長さ15cmの礫が左壁を成すものと考えられ、長軸20cm、短軸12cm、厚さ20cmの天井礫は溝の壁に張り付く様に残り、長軸33cm、短軸17cm、厚さ4cmの板状礫は溝に落ちている。

**遺物出土状態** 遺物は、カマド部分に出土した。

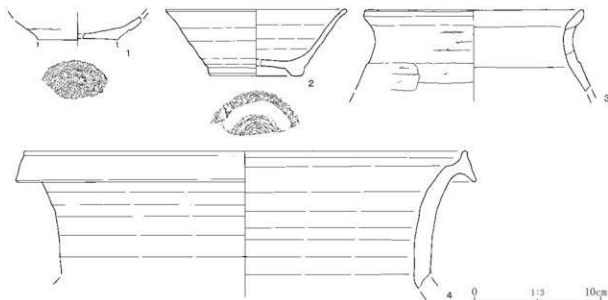
**時期** 本住居跡構築時期は不明であるが、住居覆土や出土遺物から10世紀前半と考えられる。



7号住居跡カマド

1. 黒褐色土 小礫含、焼土粒混
2. 焼土層
3. 黒色土 灰層
4. 黒褐色土 小礫混

第23図 7号住居跡カマド平・断面図



第24図 7号住居跡出土遺物図

第7表 7号住居跡出土遺物観察表(第24図、Pl.21)

No. Pl.	種類 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径/底径/器高	胎土/焼成/色調	成型形の特徴	備考
1	土師器 甕	カマド 底部	— / (6.2) / —	粗砂粒/還元焰/ 明赤	底部回転ナデ。	
2	須恵器 埴	カマド 口縁~底部	(14.2) / (7.2) / 5.2	粗砂粒、小礫含/ 還元焰/浅黄	体部はほぼ直線的に開き、端部は大きく外反する。内外面ともに口タ口整形。高台は太く全体に雑なつくり。	
3	土師器 甕	カマド 口縁部	(17.0) / — / (6.4)	粗砂粒/酸化焰/ 明赤	「コ」字状口縁。口縁部に輪積痕。口縁部は横撫で、胴部外面箇所削り。内面磨撫で。器内が特に厚い。	
4	須恵器 甕	カマド 口縁部	(34.8) / — / —	緻密/還元焰/灰 1-ア	口縁部は外滑して開き、端部は上端を揃みあげ、下端に粘土帯を付し口縁帯をなす。内外面ナデ整形。	

## 8号住居跡 (第25~27図、Pl.21)

**位置** 485-430 グリッドに位置する。

**重複関係** 1号溝と重複する。本住居跡の方が古い。

西1m程に7号、南17m程に6号住居跡、北西17m程に4号住居跡がある。

**規模** 規模は南北4.2m、東西4.5mを測る。床面積16.2㎡を測る。

**主軸方位** N-45° - Eを示す。

**形態** 住居跡の平面形は隅丸方形を呈し、確認面は表土下の黒色土である。確認時、軽石多混黒色土下に火山灰層の分布が楕円形に見られた。以下の覆土は焼土粒混土で埋められた自然埋没である。南側に分布する30cm大の礫は、床面より10cm程高く、小礫は床直である。壁の状態は、黒色土を掘り込み、黒色土中で床面となる。傾斜角度は急で垂直に近く、

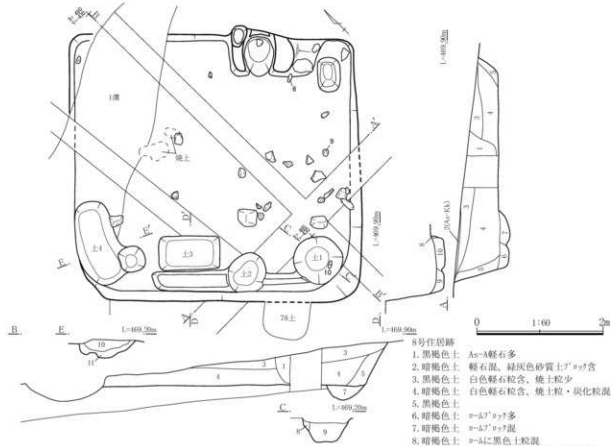
壁の崩壊は少ない。壁高は1号溝北側で僅かに残る北壁11cmと南壁57cm、東壁7cm、西壁72を測る。

**内部施設** 貯蔵穴は、カマド右側の隅隅に検出した。ロームを壁面上部に巡らすように確認された。隅隅長方形を呈し、長軸54cm、短軸35cm、深さ18cmを測る。覆土は暗褐色土の埋没後、カマド崩落流れ込みと思われる焼土粒を含む黒色土で埋められていた。遺物の出土は無かった。周溝は西壁で幅28cm、深さ15cm、長さ2.5mが確認された。柱穴は検出されなかった。

**床** 床面の状況は、黒色土面を硬化していた。カマド手前ではよく硬化した面が見られ、カーボン分布が見られた。西壁側は黒色土浅く、ロームを掘り込む土坑状の掘り方が検出した。土1は南隅に平面円

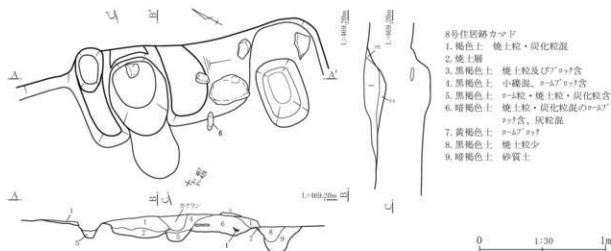
形の直径75cm、深さ35cm、断面鍋底状を呈する。覆土は白色軽石粒とローム粒混土で、底面は平坦でYP層に至っている。覆土中より(10)の磨石が出土した。土2は西壁中央に平面円形を呈する直径57cm、深さ15cmの断面皿状を成す。土3は平面長方

形を呈し、長軸97cm、短軸54cm、深さ20cmを測る。土4は西隅に住居に沿うように楕円形を呈し、長軸135cm、短軸63cm、深さ15cmを測る。なお、南東隅に直径40cm、深さ10cm程の浅い円形の落ち込みが検出した。



第25図 8号住居跡平・断面図

- 8号住居跡
1. 黒褐色土 土3・A軽石多
  2. 暗褐色土 軽石混、緑灰色砂質土<sup>7</sup>の付含
  3. 黒褐色土 白色軽石粒含、焼土粒少
  4. 暗褐色土 白色軽石粒含、焼土粒・炭化粒混
  5. 黒褐色土
  6. 暗褐色土 土3・A<sup>7</sup>の付多
  7. 暗褐色土 土3・A<sup>7</sup>の付混
  8. 暗褐色土 土3・Aに黒色土粒混
  9. 黒褐色土 土3・A粒・白色軽石粒・炭化粒含
  10. 黄褐色土 土3・A<sup>7</sup>の付混
  11. 暗褐色土 土3粒多

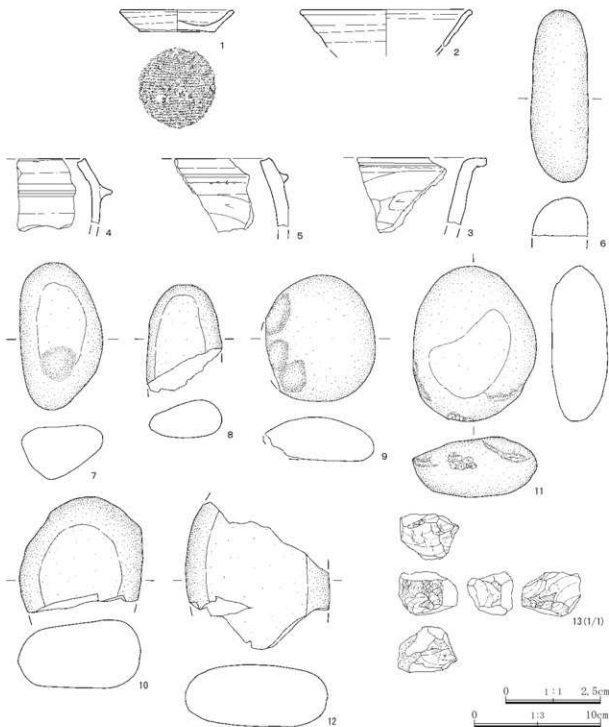


第26図 8号住居跡カマド平・断面図

- 8号住居跡カマド
1. 褐色土 焼土粒・炭化粒混
  2. 焼土層
  3. 黒褐色土 焼土粒及び<sup>7</sup>の付含
  4. 黒褐色土 小礫混、土3・A<sup>7</sup>の付含
  5. 黒褐色土 土3・A粒・焼土粒・炭化粒含
  6. 暗褐色土 焼土粒・炭化粒混の土3・A<sup>7</sup>の付含、灰粒混
  7. 黄褐色土 土3・A<sup>7</sup>の付
  8. 黒褐色土 焼土粒少
  9. 暗褐色土 砂質土

**カマド** 東壁南よりに構築されている。燃焼部は住居内に構築されている。規模は全長72cm、幅60cm、壁外長10cm、焚口幅31cm、燃焼部長62cmを測る。主軸方位は、住居壁に対しやや南に傾くN-47°-Eを示す。確認時に礫と僅かな焼土分布、ロームブロックが見られた。燃焼部は箱形で内面は一様に赤

化し、底面には焼土層が厚く堆積している。火床面は住居床面より7cmほど下がる。カマドは、礫を心材として粘土を充填し構築する。左袖住居壁に長軸34cm、短軸22cm、深さ13cmの礫抜き取り痕がある。また右袖と貯蔵穴の間にはカマド構築材のロームブロック混土上に長軸30cm、短軸20cm、厚さ3cmの



第27図 8号住居跡出土遺物図

扁平な天井構築と思われる礫がある。さらにカマド構築材のロームブロック土はカマド手前右側に多く分布していた。

**遺物出土状態** 土器片は、カマド付近に集中し、(1)は扁平な礫の下にロームブロック混の構築材中に出

土した。また、(6)も構築材中の出土である。また、礫は住居南側に集中し(7)～(12)が出土した。

**時期** 本住居跡構築時期は、カマド基礎下より出土した(1)は異質であり、羽釜や土釜から10世紀後半と考えられる。

第8表 8号住居跡出土遺物観察表(第27図, PL21)

No. Pl.	種類 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径/底径/器高	胎土/焼成/色調	成整形の特徴	摘要
1	土師質皿	カマド 底部	(9.0) / 6.1 / 1.7	細砂粒/還元焰/ 鈍橙	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は静止未切り。	異質
2	須恵器 坏	覆土 口縁部	(13.6) / - / (3.0)	細砂粒・小礫少/ 還元焰/鈍橙	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ロクロ整形。	
3	土師器 土釜	覆土 口縁部	(17.0) / - / (5.2)	粗砂粒/酸化焰/ 橙	口縁部は外反し、面取りされる。内外面ともロクロ整形。	
4	須恵器 羽釜	覆土 口縁部	(12.0) / - / (5.0)	粗砂粒/酸化焰/ 灰	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。踵は高く上端は面取り。内外面ナダ整形。	
5	須恵器 羽釜	覆土 口縁部	(12.0) / - / (5.3)	粗砂粒/酸化焰/ 鈍橙	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。踵はやや細い。内外面ともにナダ整形。	
6	石製品 磨石	覆土 縦位1/2	長13.5/幅4.5/厚 (3.0) / 265g		粗粒輝石安山岩。長軸方向に割れる。表面を平滑に磨り使用。	
7	石製品 磨石	覆土 完形	長11.5/幅5.5/厚 4.2 / 418g		粗粒輝石安山岩。表面を平滑に磨り使用。	
8	石製品 磨石 1/2	覆土 口縁部	長(8.5)/幅5.9/厚 3.0 / 183g		粗粒輝石安山岩。表面を平滑に磨り使用。火受けによるものか短軸方向で割れる。	
9	石製品 磨石	覆土 ほぼ完形	長10.0/幅(8.7)/厚 3.4 / 443g		粗粒輝石安山岩。表面を平滑に磨り使用。端部破損。	
10	石製品 磨石	覆土 端部欠損	長(9.0)/幅9.6/厚 5.2 / 682g		粗粒輝石安山岩。表面を平滑に磨り使用。火受けによるものか短軸方向で割れる。	
11	石製品 磨石	覆土 完形	長12.2/幅9.7/厚 4.6 / 636g		粗粒輝石安山岩。表面を平滑に磨り使用。	
12	石製品 磨石	覆土 端部欠損	長(11.5)/幅(11.3)/厚 4.8 / 764g		粗粒輝石安山岩。表面を平滑に磨り使用。火受けによるものか端部欠損。	
13	石製品 火打石	カマド	長2.3/幅3.1/厚 2.4 / 18.3g		石英。多面体のサイコロ状石。火打ち石の可能性あり。	

### 9号住居跡(第28～30図, PL.21)

**位置** 460-415グリッドに位置する。

**重複関係** 重複関係はない。北西18m程に6号、東8m程に11号・12号、北14m程に10号住居跡がある。南東壁より2m離れ112号土坑がある。

**規模** 規模は南北4.2m、東西5.5mを測る。床面積21.35㎡を測る。

**主軸方位** N-52°-Eを示す。

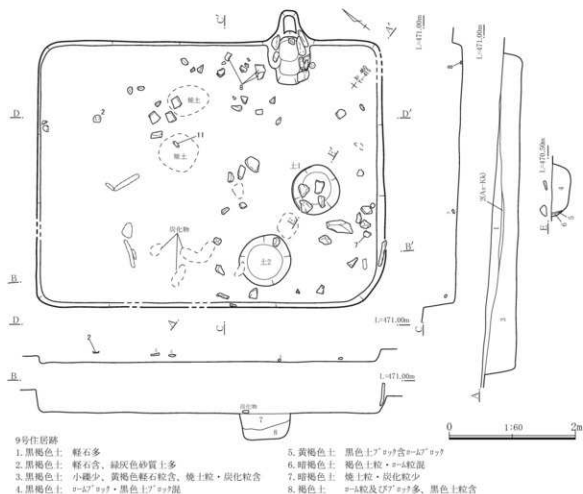
**形態** 住居跡の平面形は隅丸長方形を呈し、確認面は表土下の黒色土である。確認時、軽石多混黒色土下に火山灰層の分布が楕円形に見られた。以下の覆土は焼土粒混土で埋められた自然埋没である。覆土中の20cm大の礫は、床面より10cm程高く、焼土ブ

ロックや炭化物は床直～5cm程の間に見られた。壁の状態は、黒色土を掘り込み、黒色土中で床面となる。傾斜角度は急で垂直に近く、壁の前縁は少ない。壁高は北東壁15cm、北西壁11cm、南西壁50cm、南東壁37を測る。南東壁西側には長軸40cm、短軸35cm、厚さ5cmの緑色の板状礫が壁面に立てるように検出した。

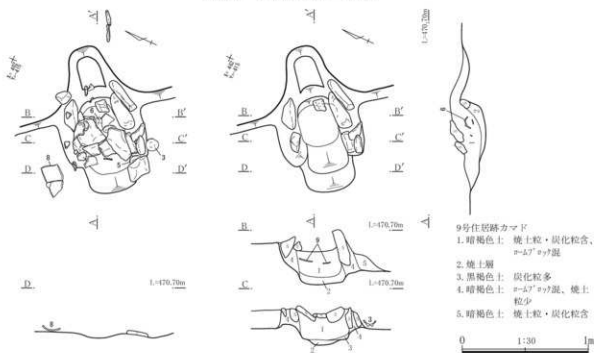
なお、確認面で周堤帯や外部施設の精査を行ったが耕作により削平され確認できなかった。

**内部施設** 貯蔵穴・柱穴・周溝は検出されなかった。

**床** 床面の状況は、黒色土面を硬化していた。カマド手前ではよく硬化した面が見られ、カーボン分布



第28図 9号住居跡平・断面図



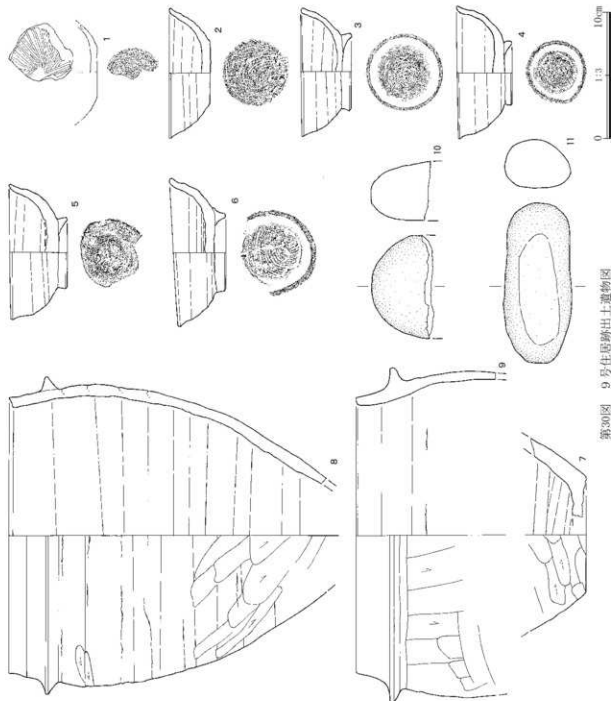
第29図 9号住居跡カマド平・断面図



が見られた。南壁側は黒色土が浅く、ロームを掘り込む土坑状の掘り方が検出した。土1は、南西壁際中央東に平面円形の直径80cm、深さ41cm、断面鍋底状を呈する。住居床面に炭化物があり、土坑上層には炭化粒や焼土粒が僅かに見られた。床下土坑と考えられる。土2は、南東壁中央から1m程内側に直径75cm、深さ30cmが検出した。土坑上部にロームブロック混土が巡る。土1同様床下土坑と考える。

土1・2からの出土遺物はない。

**カマド** 北東壁南よりに構築されている。石組カマドである。燃焼部は住居内に構築されている。規模は全長117cm、幅50cm、壁外長47cm、焚口幅30cm、燃焼部長75cmを測る。主軸方位は、住居壁に対しやや北に傾くN-49°-Eを示す。確認時に礫と僅かな焼土分布、ロームブロックが見られた。燃焼部は箱形で内面は一様に赤化し、底面には焼土層が厚



第30図 9号住居跡出土遺物図

く堆積している。火床面は住居床面より10cmほど下がる。カマドは、礫を心材として粘土を充填し構築する。袖礫には扁平な川原石が使用され、燃焼部上や右袖部に出土した天井礫は緑色の扁平な礫が用いられていた。この礫の使用には意図的なものが感じられた。

**遺物出土状態** 遺物は、カマドに集中し、(9)の羽

釜は燃焼部に(6)とともに出土した。(3)と(5)は右袖部に、(8)はカマド左側に出土した。また、住居内からの出土は少なく、北側で床面より15cm高く(2)が出土し、南側で床面より10cm高く(7)が出土した。その他は、細片が少量出土した程度である。時期 本住居跡構築時期は、出土遺物から10世紀後半と考えられる。

第9表 9号住居跡出土遺物観察表(第30図、PL21)

No. PL	種類 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径 / 底径 / 器高	胎土 / 焼成 / 色調	成型形の特徴	摘要
1	土師器 杯	覆土 底部	— / 6.0 / (2.0)	細砂粒 / 酸化塩 / 鈍橙	底部回転糸切痕、内側底部放射状のヘア磨きに より光沢を持つ。	
2	土師器 杯	覆土 完形	10.3 / 5.0 / 3.3	細砂粒 / 酸化塩 / 鈍黄橙	底部右回転糸切痕。外面に体部下平から口縁部 に向かう、回転に伴う強い稜線。	
3	土師器 塊	カマド 口縁部が一部 欠損	10.2 / 6.1 / 4.0	細砂粒 / 酸化塩 / 鈍黄橙	付高台。高台部内側回転ナデ、底部中央部に刺 突状の加工痕あり。体部回転横ナデ、口縁部が やや外反している。丁寧な作りである。	
4	土師器 塊	覆土 口縁部が1/3 欠損	10.4 / 5.0 / 4.3	細砂粒 / 酸化塩 / 鈍黄橙	付高台。高台部内側回転ナデ、体部回転横ナデ、 口縁部がやや外反している。丁寧な作りである。	
5	土師器 塊	カマド 高台部と口縁 部が一部欠損	10.6 / 5.6 / 4.5	細砂粒 / 酸化塩 / 鈍黄橙	付高台。高台部内側回転ナデ、体部回転横ナデ、 口縁部がやや外反している。	
6	土師器 塊	覆土 高台部と口縁 部が一部欠損	11.6 / 6.1 / 4.0	細砂粒 / 酸化塩 / 明赤橙	付高台。高台部内側に右回転糸切痕、太い高台 がやや踵に貼り付けてある。体部回転横ナデ、 口縁部がやや外反している。器肉が全体に厚い。	
7	須恵器 羽釜	覆土 底部～胴下平 1/3	— / 9.2 / (4.3)	粗砂粒 / 酸化塩 / 鈍赤橙	底部外面割られている。内面横方向のナデによる 凹凸を持つ。胴内面ナデ。	
8	須恵器 羽釜	カマド 口縁部～胴下 平1/2	21.6 / — / (25.0)	粗砂粒 / 酸化塩 / 灰褐	口唇部内側中央部が凹状となる。踵は丁寧に貼 り付けている。胴部外面に輪積線、胴上半横方 向ナデ、胴下半左上から右下に向かう斜め方 向のヘア磨り、胴内面横方向ナデ。	
9	須恵器 羽釜	カマド 口縁部～胴上 半2/3	21.6 / — / (11.0)	粗砂粒 / 酸化塩 / 橙	口唇部やや内傾、中央部がわずかに凹状となる。 踵はやや踵に貼り付けてある。胴上半横方 向のナデと踵下部から底部に向かう縦方向のヘア磨り。 胴内面横方向ナデ。	
10	石製品 磨石	カマド 1/2	長(4.9) / 幅(8.1) / 厚(4.7) / 206g		粗粒輝石安山岩。表面を平滑に磨り使用。	
11	石製品 磨石	覆土 完形	長12.7 / 幅5.3 / 厚4.8 / 425g		粗粒輝石安山岩。表面を平滑に磨り使用。	

#### 10号住居跡(第31・32図、PL.22)

**位置** 470-415グリッドに位置する。

**重複関係** 114号・115号・116号土坑と重複する。本遺構の方が古い。南14m程に9号住居跡、南東15m程に11号・12号住居跡、西17m程に6号住居跡、北西18m程に8号住居跡がある。  
**規模** 規模は南北3.21m、東西3.48mを測る。床面積10.49㎡を測る。  
**主軸方位** E-57°-Sを示す。

**形態** 住居跡の平面形は隅丸方形を呈し、確認面は表土下の黒色土面で、カマドの礫と焼土分布を確認した。住居の中央を水道管があるが、床面には至っていない。壁の状態は、黒色土を掘り込み、黒色土中で床面となる。南東壁や北東壁は耕作が床面までなされていた。残存する南西壁と北西壁の一部では傾斜角度は急で垂直に近く、壁の崩壊は少ない。壁高は北西壁15cm、南西壁15cmを測る。

**内部施設** 貯蔵穴・柱穴・周溝は確認されなかった。

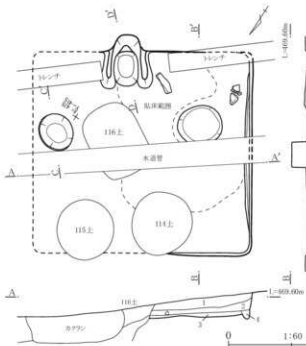
**床** 床面の状況は、カマド手前から北西方向にルームによる貼床がなされ硬化している。住居中央の西側に貼床が直径70cm、深さ5cm程で浅く落ち込んでいた。住居中央東側の土1は、長軸60cm、短軸55cm、深さ15cmの断面皿状を呈する。壁面上部にロームブロックによる貼付があり、確認時ロームブロックが円周していた。

**カマド** 南東壁東よりに構築されている。燃焼部は住居内に構築されている。規模は全長86cm、幅55cm、壁外長26cm、焚口幅35cm、燃焼部長55cmを測る。主軸方位は、住居壁に垂直でE-57°-Sを示す。確認時に焼土分布、ロームブロックが見られた。燃焼部は箱形で内面は一様に赤化していた。火

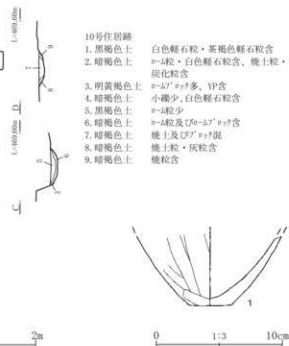
床面は住居床面より5cmほど下がる。右袖外に長軸40cm、幅7cm、厚さ10cmの角柱の礎が床直で出土した。カマド構築材の一部と考えられる。住居地内に検出した115号土坑や116号土坑の覆土には焼土ブロックや炭化粒が多量に含まれ、116号土坑より羽釜片が出土するなど、本カマドが後世の破壊を受け土坑内に埋没したものと考えられる。

**遺物出土状態** 遺物は、ほとんど無くカマド脇から(1)が出土したのみである。重複する115号や116号土坑から出土した羽釜等が本住居に伴う遺物と考えられる。

**時期** 本住居跡構築時期は、覆土や住居形態から他の住居跡同様の10世紀前半と考えられる。



第31図 10号住居跡平・断面図



第32図 10号住居跡出土遺物図

第10表 10号住居跡出土遺物観察表(第32図, PL.22)

No. PL.	種類 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径 / 底径 / 器高	胎土 / 焼成 / 色調	成整形の特徴	摘要
1	土師質 壺	カマド 底部	— / 3.4 / (5.5)	粗砂粒 / 炭化焙 / 純焼	胴部外面塗粉り。	

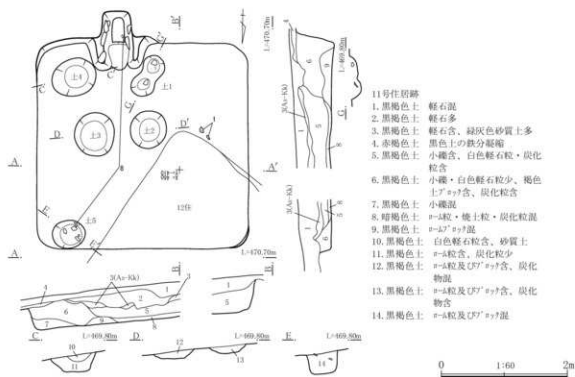
### 11号住居跡 (第33~35図, PL.22)

**位置** 455-405グリッドに位置する。

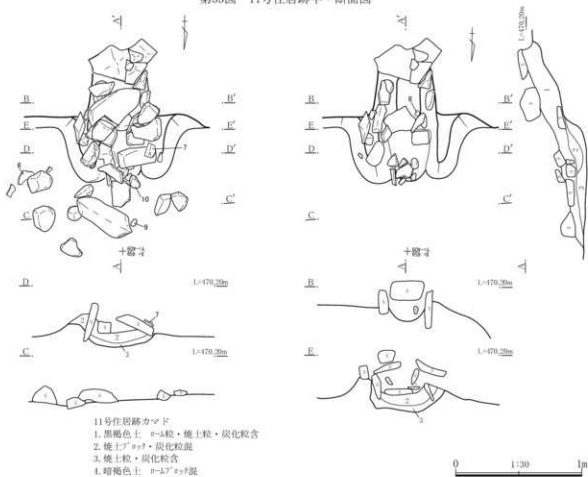
**重複関係** 12号住居跡と重複する。本遺構の方が新しい。西8m程に9号住居跡、北16m程に10号住

居跡がある。

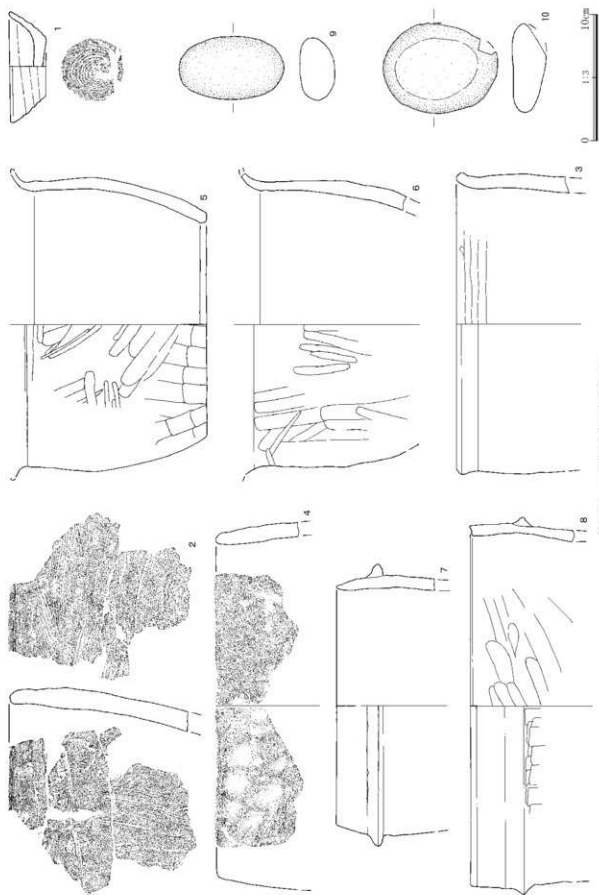
**規模** 規模は南北3.36m、東西3.32mを測る。床面積10.39㎡を測る。



第33図 11号住居跡平・断面図



第34図 11号住居跡カマド平・断面図



第35図 11号住居跡出土遺物図

**主軸方位** N-88°-Eを示す。

**形態** 住居跡の平面形は隅丸方形を呈し、確認面は表土下の黒色土である。確認時、軽石多混黒色土下に火山灰層の分布が楕円形に見られた。以下の覆土は焼土粒混土で埋められた自然埋没である。壁の状態は、黒色土を掘り込み、西壁付近はローム層をわずかに掘り込む。傾斜角度は急で垂直に近く、壁の崩壊は少ない。壁高は北壁20cm、南壁58cm、東壁40cm、西壁45cmを測る。

なお、確認面で周堤帯や外部施設の精査を行ったが耕作により削平され確認できなかった。

**内部施設** 貯蔵穴・柱穴・周溝は検出されなかった。床 床面の状況は、東側は黒色土とローム混土の面を、西側はローム面を硬化していた。カマド手前ではよく硬化し、カーボン分布が見られた。床下からはカマド手前で4基の土坑が検出した。土1はカマド右側に長軸70cmで短軸30cmの瓢箪型を呈し、深さは北側のビット状で最深で15cmを測る。覆土は褐色土で北側のビット状から羽釜口縁部小破片が出土した。土2・3はカマド手前にあり、土2は直径55cm、深さ12cm、土3は直径65cm、深さ14cmを測る。2・3ともに覆土内に炭化物の混入が見られた。土4はカマド左側にあり長軸72cm、短軸58cm、深さ28cmを測る。土坑上層の住居床面には30cm程のカマド構築礫が2個と(6)の瓶片が出土した。覆土には僅かに炭化粒が含まれていた。北東隅に土5は、

直径50cm、深さ38cmを測る。覆土中より羽釜片が5点出土し口縁部片がカマド出土の口縁部片と接合した。土5は土1〜4と異なり住居跡より新しいものと考えられる。

**カマド** 南壁中央東よりに構築されている。石組カマドである。燃焼部は住居内に構築されている。規模は全長93cm、幅50cm、壁外長48cm、焚口幅25cm、燃焼部長45cmを測る。主軸方位は、住居壁に垂直にN-88°-Eを示す。確認時に礫とロームブロックが見られた。燃焼部は箱形で、底面には焼土・炭化粒が厚く堆積している。火床面は住居床面より5cmほど下がる。カマドは、礫を心材として粘土を充填構築する。袖礫には扁平な礫が使用され、燃焼部上や右袖部に出土した天井礫は緑色の扁平な礫が用いられていた。この礫の使用は9号住居跡と同様である。また、カマド手前長軸48cm、短軸20cm、厚さ15cmの角柱状の緑色の礫が見られた。カマド構築材のローム混土はカマド右側に多く流れ出るように検出された。

**遺物出土状態** 遺物は、カマドに集中し、羽釜は燃焼部に瓶が左側に出土した。また、住居内から出土はすくないが、環が中央から出土した。また、北東隅のビットからカマド左側から出土した瓶片が出土した。

**時期** 本住居跡構築時期は、出土遺物から11世紀前半と考えられる。

第11表 11号住居跡出土遺物観察表(第35図、PL22)

No. 凡	種別 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径/底径/器高	胎土/焼成/色調	成整形の特徴	摘要
1	土師質 環	覆土	8.7 / 4.7 / 2.9	細砂粒/酸化燼/ /明赤褐	体部はやや内湾味に立ち上がる。内外面クロ 口整形。底部は右回転糸切り無調整。	
2	一 環	カマド 口縁部	- / - / (14.0)	細砂粒・小礫含/ 酸化燼/鈍黄	器厚。口縁部横溝で、指頭直有。胴部外面縦に 縦溝あり。内面撫でにて器表面施。	
3	一 土釜	カマド 口縁部	(23.8) / - / (8.9)	細砂粒・小礫含/ 酸化燼/鈍赤褐	胴上部に最大径を置き、内湾し立ち上がり、口 縁部は外反する。口縁部横溝で、端部は面取り。 内外面クロ口整形。	
4	一 環	カマド 口縁部	(27.0) / - / (6.5)	細砂粒・小礫含/ 酸化燼/鈍黄褐	直線的に立ち上がる。口縁部及び端部に指頭直 有。胴部外面へラ削り。胴部内面撫で、輪積み 直有。	
5	一 瓶	カマド 胴部〜底部	- / (17.8) / (15.3)	細砂粒・小礫含/ 酸化燼/鈍赤褐	胴部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部外 反する。底部端部は面取り。底部端から1.8cm 横付着無し。内外面ナゲ整形。	
6	一 瓶	カマド 胴部	- / - / (13.2)	細砂粒・小礫含/ 酸化燼/鈍赤褐	上記5と同一体	

第11表 11号住居跡出土遺物観察表(第35図, PL.22)

No. Pl.	種類 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径/底径/器高	胎土/焼成/色調	成型形の特徴	摘要
7	須恵器 羽釜	カマド 口縁部	(18.8) / - / (7.7)	細砂粒/酸化塩/ 鈍黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は細い。踵は指頭 狭み状有。口唇端部は脱臼状に細くなっている。	
8	須恵器 羽釜	カマド 口縁部	(28.6) / - / (8.1)	細砂粒/酸化塩/ 鈍橙	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 踵は細い。踵に向かって縦方向の溝あり。	月夜野 型
9	石製品 磨石	カマド 完形	長8.2/幅4.9/厚2.7/149g		粗粒輝石安山岩。小さな楕円形。表面を平滑に 磨り使用。	
10	石製品 磨石	カマド 端部欠損	長9.0/幅(7.1)/厚(2.7)/194g		粗粒輝石安山岩。表面を平滑に磨り使用。	

## 12号住居跡(第36・37図、PL.22)

**位置** 460-405グリッドに位置する。

**重複関係** 11号住居跡と重複する。本住居跡の方が古い。

**規模** 規模は南北2.65m、東西3.47mを推測する。床面積8.83㎡を測る。

**主軸方位** E-32°-Sを示す。

**形態** 住居跡の平面形は隅丸台形を呈し、確認面はローム面で、北西部の黒色土の落ち込みと炭化粒の分布、11号住居内に検出した焼土分布から確認した。

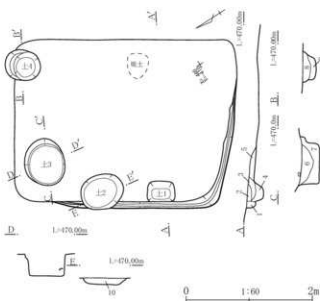
**内部施設** 周溝は北西部に幅13cm、深さ3cm程である。貯蔵穴・柱穴は確認されなかった。北西の壁高は22cmを測る。土1は方形を呈し、長軸43cm、短軸32cm、深さ12cmを測る。入口部の梯子据え置き穴とも考えられる。

**床** 床面の状況は、ローム面で硬化し、炭化粒が散布している。土2は北西壁中央に検出した。平面楕円形を呈し、長軸70cm、短軸55cm、深さ10cmを測る。土3は北隅に検出し、直径65cm、深さ35cmを測り、覆土中より坯(1)が出土した。土4は東隅で平面円形を呈し、直径43cm、深さ20cmを測る。

**カマド** 南東壁西よりに構築されていたものと考えられる。確認時にすでに燃焼部底面であり、焼土範囲からカマドを想定した。燃焼部は壁を掘り込み構築されたものと考えられる。

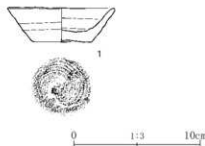
**遺物出土状態** 遺物は、土3から出土した坯(1)のみである。

**時期** 本住居跡構築時期は、出土遺物から11世紀前半と考えられる。



第36図12号住居跡平・断面図

- 12号住居跡
1. 暗褐色土 0-A粒少
  2. 暗褐色土 小礫含、0-A粒・褐色土粒混
  3. 黒褐色土 0-A粒少
  4. 黒褐色土 0-A粒及び0-A?混
  5. 暗褐色土 小礫含、0-A粒及び0-A?混、炭化粒少
  6. 黒褐色土 0-A粒多、褐色土粒・YP含
  7. 黒褐色土 0-A粒含、礫含
  8. 暗褐色土 0-A粒・褐色土粒含
  9. 暗褐色土 0-A?0-A?混
  10. 暗褐色土 0-A?0-A?・黒褐色土?0-A?含



第37図 12号住居跡出土遺物図

第12表 12号住居跡出土遺物観察表(第37頁、PL.22)

No. PL	種類 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径/底径/器高	胎土/焼成/色調	成型形の特徴	概要
1	土師質 杯	土3 口縁部欠損	8.4/4.6/2.6	粗砂粒/酸化焙/橙	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面口ロ整形。底部は右回転糸切り無調整。雑な切り離し。	

第13表 住居跡計測表

住居 番号	住居				カマド				備考
	南北長 (m)	東西長 (m)	最深長 (m)	主軸方位	全長 (m)	幅 (m)	焚口幅 (m)	主軸方位	
1	3.20	3.24	0.2	E-73-S	0.78	0.5	0.32	E-71-S	右組カマド10c前
3	3.50	3.47	0.22	E-55-S	—	—	—	—	10c前
4	2.80	2.78	0.74	E-52-S	1.04	0.60	0.36	E-52-S	右組カマド10c前
5	3.98	3.46	—	E-33-S	0.67	0.50	0.30	E-33-S	10c後
6	4.54	5.40	0.77	N-43-E	0.92	0.70	0.38	N-63-E	右組カマド10c後
7	2.60	2.50	0.30	N-30-E	0.35	0.50	—	N-50-E	10c前
8	4.20	4.30	0.72	N-45-E	0.72	0.60	0.31	N-47-E	10c後
9	4.20	5.50	0.50	N-52-E	1.17	0.50	0.30	N-49-E	右組カマド10c後
10	3.21	3.48	0.15	E-57-S	0.86	0.55	0.35	E-57-S	10c前
11	3.36	3.32	0.58	N-88-E	0.93	0.50	0.25	N-88-E	右組カマド11c前
12	2.65	3.47	0.22	E-32-S	—	—	—	—	11c前

## 2 土坑

本遺跡より検出した土坑はすべてⅡ区である。縄文時代～近代94基、集石遺構2基である。遺構確認面は表土下である。調査区西側・東側の表土下はローム面である。しかし、中央は黒色土であり、特に南西側は軽石多混黒色土下に火山灰 (As-Kk) の堆積が部分的に見られた。そこで黒色土の堆積状況と火山灰下の遺構の有無を断面観察するためグリッドに合わせサブトレンチを設定しローム面まで掘削した。結果、火山灰下には土坑等の存在が確認された。黒色土内の構築であるがローム面に至ることから、最終的にローム面に遺構確認を行った。陥穴はYP層を掘り込み構築され、同層で壁面は抉れている。覆土は地形に合わせ南側から自然埋没を呈する。

なお、欠番は調査の進捗精査により生じたもので、報告に際しても準拠している。

94基の土坑は、形態としてA類(長い長方形を呈する)、B類(平面楕円形を呈し、底面長方形の陥穴)、C類(平面長方形を呈し、底面長方形の陥穴) D類(底面円形を呈する陥穴) E類(その他)に大別できる。A類17基、B類33基、C類28基、D類4基、E類12基である。

以下に各類の概要と主な個別土坑について記す。

A類は、As-A軽石を多く含むAs-A復旧溝と考え

られる。等高線に対し直交するようにあり、現在の耕作走行とも直交する。平均的な規模は長さ220cm、幅57cm、深さ30cm程を測る。

### 12号土坑 (A類)

Ⅱ区調査区西側で検出した。34号土坑と重複し、本土坑の方が新しい。確認時黒色土にAs-A軽石が充填され遺構の有無は判断できるが、表土もAs-A軽石を混入していることから範囲確認までには表土を確実に除去する必要がある。同様の遺構は北へ7mに23号土坑があり、両土坑主軸中心平行幅6.4m(約3.5間)を測る。南10mの14号土坑とは平行幅5m(約3間)である。表土下の土量は約0.5m<sup>3</sup>である。

### 23号土坑 (A類)

Ⅱ区調査区西側で検出し、本調査区最西に位置する。南7mに12号土坑があり主軸中心平行幅は6.4m(約3.5間)を測る。表土下の土量は約0.23m<sup>3</sup>である。覆土中より東に接する1号・3号住居跡の遺物と思われる須恵器焼片1片(第52図PL.22)出土した。

### 41号土坑・42号土坑・48号土坑 (A類)

Ⅱ区調査区東側で検出した。3基は重複する。41号・42号・48号は、同順で新から古へとなる。41



号と48号は主軸方位が平行するが、42号はやや東にふれる。41号は多くの復旧坑同様の筋状の土坑であるが、42号・48号は幅広に行われている。表土下の土量は41号が約0.31㎡、42号が約0.75㎡、48号が約0.48㎡で併せて1.54㎡が表土となる。周辺には、41号・48号と平行する幅広の45号・46号土坑は南西2m程にあり等高線に対し斜にあり、長軸方向で繋がるようにある。また、41号同様の筋状の土坑は、西7mに56号土坑があり、主軸中心平行幅5.2m(約3間)を測る。

### 73号土坑(A類)

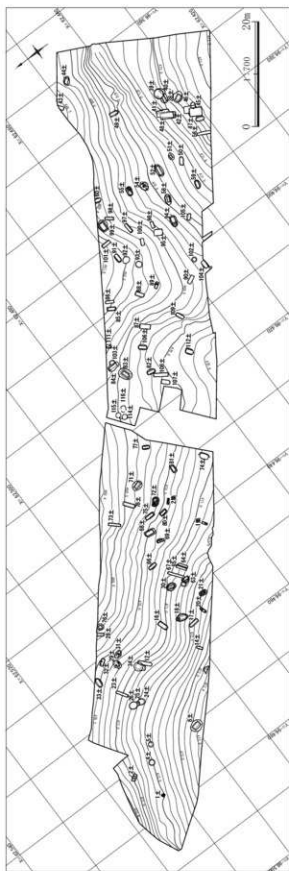
II区調査区中央西側で1号住居跡と重複し検出した。本遺構の方が古い。南東の78号土坑とはほぼ並行し、主軸中心平行幅3.8m(約2間)を測る。表土下の土量は約0.75㎡である。覆土からは近接する8号住居跡の遺物と思われる羽釜口縁部片(第52図PL.22)が出土した。

### 111号土坑(A類)

II区調査区中央東側の調査区北壁で検出した。覆土観察では、まず直径30cm程の川原石を埋め、その後As-A軽石混土を埋めていた。

以上(A類)はAs-A軽石が降下後、農地復旧のために掘られたものと考えられ、調査により検出した土坑から、総量約7㎡が新しい土として軽石上の耕土として敷かれたものと考えられる。

B類・C類は陥穴と考えられる。黒色土を掘削し、ローム層Y層を掘り込んでいる。底面形状はすべて長方形を呈し、埋没土層には褐色土がレンズ状に堆積する。確認時この褐色土は陥穴の目安となった。埋没は掘削後しばらくの間開放し砂等が堆積し、その後ローム層等壁面の崩壊があり、黒色土で埋まり、次に褐色土で埋没していく。特に調査区中央東側から調査区東側に検出した土坑底部への砂粒堆積は多い。規模の平均は長軸1.7m、短軸0.9m、深さ1.0mを測る。最大は83号土坑の長軸2.6m、短軸1.82m、深さ1.6mである。また、74号土坑は6号住居跡と重複して検出し、構築時期が限定される土坑である。覆土と住居跡の関係から、上層に堆積した火山



第38図 土坑配置図

灰(As-Kk)から1128年より古く、6号住居跡10世紀後半より新しい平安時代構築であることが判明した。多くの陥穴で覆土が類似することから当地域に平安時代に構築されたものと考えられる。なお、覆土や遺構外からは縄文土器も出土していることからすべてが平安時代とは考えられない。構築方法については、等高線に対しほぼ平行する陥穴は、40号・50号・52号・55号・58号・59号・94号・96号・100号・105号・116号土坑の11基で調査区東側の北斜面に集中し、他の陥穴は等高線に対し直交ないし斜に構築されている。

#### 6号土坑(B類)

Ⅱ区調査区西側で検出した。等高線に対し斜めに北側の沢に向かうように構築されている。YP層を掘り抜き礫混土層を底面とする。底面主軸が同様な18号土坑は南東20.5mにある。確認面のローム面からの掘削土量は3.58m<sup>3</sup>である。

#### 18号土坑(B類)

Ⅱ区調査区西側で検出した。掘削方法は長軸に均等に楕円形を呈するのではなく、傾斜の低い方がふくらむ様にある。このような掘削は、31号・38号・71号・99号・105・112号土坑等で見られる。また、傾斜に対し、高い方が広がるのは、44号・59号・63号土坑等がある。本土坑からは底面より20cm程度上で縄文前期土器片が1片(第52図PL.22)出土した。

#### 29号土坑(B類)

Ⅱ区調査区西側で検出した。3号住居跡東に位置し、覆土に3号住居跡カマドの焼土粒を混入することから本土坑の方が新しいと考える。本土坑と底面の主軸方位が同様な土坑として、北側4mに33号土坑がある。さらに南10mに16号土坑、さらに南へ6.5mに20号土坑がある。その他主軸方位が同様な土坑は調査区東側に集中する。

#### 30号土坑(B類)

Ⅱ区調査区西側で検出した。確認面の楕円形状と底面の長方形はやや軸線が異なる。等高線に対し斜めに、北側の沢に向かうように構築されている。確

認面は楕円形を呈し、底面は確認面とはやや軸線を変えた長方形を呈する。周辺には底面主軸方位が同様な土坑は、西へ6mに18号土坑、7.5mに17号土坑があり、南西5.5mに21号土坑、東5mに66号土坑がある。また、63号土坑が1.2mの間隔を置いて長軸が直線になるようにある。

#### 33号土坑(B類)

Ⅱ区調査区西側で検出した。29号土坑と3.6mの間隔で平行する。YP層を掘り抜き、底面は礫層において平坦面をなす。YP層が西側で大きく抉られる。覆土は他の陥穴に見られる褐色土がある。また第2層黒褐色土中より縄文前期土器片が1片(第52図PL.22)出土した。

#### 38号土坑(B類)

Ⅱ区調査区東側で検出した。県教委試掘・確認時に確認した土坑である。底面は他の土坑が長方形を呈するのに対し方形を呈する。規模は小さいが北西9mの51号土坑が類例である。

#### 40号土坑(B類)

Ⅱ区調査区東側で検出した。39号土坑と重複する。本遺構が古い。周辺で長軸方位を同じにする土坑は、北西へ9mの51号土坑や北西12mの52号土坑がある。

#### 54号土坑(B類)

Ⅱ区調査区東側で検出した。YP層を掘り抜き、底面は礫層に至る。底面の礫は30～40cm大で北2.5mに位置する55号土坑同様に礫をされるように掘削を行っている。覆土より縄文前期土器片が1片(第52図PL.22)出土した。

#### 66号土坑(B類)

Ⅱ区調査区中央西側で検出した。本遺構の南西6mの68号、4.5mの69号、8.5mの75号、10mの80号土坑と西6mの63号、13mの17号土坑が平行して等高線に対し斜に構築されている。覆土には上層に褐色土が見られる。また第6層黒褐色土より縄文前期土器片が1片(第52図PL.22)出土した。

#### 72号土坑(B類)

Ⅱ区調査区中央西側で検出した。確認面の形状は

楕円形と方形が見られ構築時の作業の変更が示唆された。掘削はYP層を掘り抜き、底面の40cm大の礎を避け進めたことが伺える。覆土より縄文前期土器片が1片(第52図PL.22)出土した。

#### 83号土坑(B類)

II区調査区中央東側ルーム面にて検出し、本調査では最深の掘削調査が行われた陥穴である。確認平面形楕円形を呈し、底面は長方形を呈する。長軸260cm、短軸182cm、深さ160cmを測り、底面は長軸125cm、短軸40cmを測る長方形を呈する。確認時中心部に褐色土が楕円形を呈し、周囲を黒色土が囲むように検出した。なお、この褐色土は他の陥穴に共通し検出され、陥穴検出の鍵土である。壁面は礫層から橙色粘質土を斜に立ち上げ、YP層では崩落によるものが抉られ、ルーム層で垂直に近い傾斜で立ち上げる。底面は礫層を掘り込み長方形の角は直角に近い形状を成す。遺物の出土は無い。

#### 106号土坑(B類)

II区調査区中央東側ルーム面にて検出した。楕円形掘削から底面付近より角は直角に方形に掘削されている。南西8mの112号土坑とは等高線に直交し直線的に位置する。

#### 2号土坑(C類)

調査区西側で検出した。等高線に斜にあり、北側の沢に向かうように構築されている。底面は両端が僅かに窪み逆茂木や獣のものがいた足跡と考えられまいだろうか。

#### 16号土坑(C類)

等高線に対し斜めに北東の傾斜に向かうように構築される。YP層まで掘り込んでいる。確認面は長方形を呈し、底面も長方形を呈する。

#### 17号土坑(C類)

確認時1層が円形を呈することから2基の土坑を想定し長軸に合わせ土層観察を行ったが、自然埋没によるものであった。等高線に対し斜めにあり、北側の沢に向かうように構築されている。YP層まで掘り込んでいる。確認面は長方形を呈し、底面も長方形を呈する。

#### 21号土坑(C類)

II区調査区中央西側で検出した。YP層を掘り込んでいる。底面の礫層には逆茂木痕と思われる窪みが2箇所見られた。

#### 28号土坑(C類)

II区調査区壁際にて検出。等高線に斜めにある。平坦面にあり北側の沢及び北東の谷の中間にある。表土下に間層を持ち、遺構掘削面となる。確認面は長方形を呈し、底面も長方形を呈する。覆土より縄文前期土器片が1片(第52図PL.22)出土した。

#### 43号土坑(C類)

II区調査区東側区画の調査区北壁で検出した。ルーム層を掘り込み、掘削工具痕が壁面ルーム層面に明瞭に見られた。長方形陥穴の角の部分と50cm程離れた中央部壁面で、幅4cm、長さ20cmの縦に掘削した状況が確認された。厚3cm程の板状のもので角を使って掘削した様子が見られる。この2箇所の間にも不明瞭ではあるが、同工具による刺したような痕が数カ所見られた。本遺構は確認面でも長方形を呈し、底面も長方形を呈し、その角は直角に掘削されていた。

#### 74号土坑(C類)

II区調査区中央西側で、6号住居跡と重複して検出した。調査では周囲に火山灰(As-Kk)が楕円形に確認され、6号住居跡のプラン確認を行う中、住居形状と異なるふくらみがありサブトレンチを設定し確認した。土層観察から本遺構は住居跡より新しく、堆積土層の火山灰より古いことが判明した。このことから本遺構は、火山灰(As-Kk)と住居跡(10世紀後半)の間の時期に構築されたこととなる。中央東で検出した75号土坑の陥穴も上層に同火山灰が堆積していることから、陥穴構築時期について一考を投じるものである。覆土より6号住居跡遺物と考えられる灰胎陶器片が1片(第52図PL.22)出土した。

#### 88号土坑(C類)

II区調査区中央東側にて検出した。表土下の周辺には火山灰層(As-Kk)の堆積が見られた。本遺構では

火山灰層は確認されなかったが、同様の相違に砂質の赤褐色を呈する鉄分凝縮層が見られた。90号土坑も同様である。本遺構と長軸方向を同じにする土坑に南西7mに109号土坑がある。

#### 101号土坑（C類）

Ⅱ区調査区調査区東側の北壁際に検出した。グリッド調査により表土下からの土層観察が行えた。遺構は表土下より掘削され第2層に多くの陥穴で見られる褐色土が認められた。底面はYP層を平坦にしている。本遺構の長軸方向は多くの陥穴が等高線に対し平行するようにあるのに対し直交する。同様の方向を示す土坑に東8mの60号、西10mの85号・86号土坑がある。

D類の陥穴は底面が円形で埋没過程はB・C類同様である。

#### 102号土坑（D類）

Ⅱ区調査区中央東側に検出した。壁面は朝顔型に開き、底面はYP層上層の粘質土層を平坦にしている。覆土はローム粒混の黒色土と褐色土で、底面付近も壁の崩落土は見られなかった。

E類は、円形を呈し、覆土はB・C・D類とは異なり、黒色土を主にする類でA類より古く、B・C・D類よりは新しいと考える。

#### 1号土坑（E類）

西側区画の最も西に位置する。県教委試掘時に集石土坑として確認された土坑である。土坑四隅に礫が配され、上位の崩れた礫が埋没し、西側に扁平な礫が倒れるような形態を成す。平面楕円形を呈し長軸70cm、短軸52cm、深さ50cmを測る小規模な墓坑の可能性がある。また、近代以前の神社城の柱穴も想定し周辺を確認したが、同様の遺構は検出されなかった。

#### 5号土坑（E類）

底面はYP層を掘り込んでいる。4号土坑と芯々で3.3mを測る。4号土坑と合わせ柱穴を想定したが周辺に同様な遺構は確認されなかった。

#### 24号・25号・26号土坑（E類）

3基の円形土坑が連続する。新旧関係は26号構

築後、25号を構築、最後に24号が構築される順である。なお、24号土坑の覆土より縄文前期土器片が1片（第52図PL.22）出土した。

#### 39号土坑（E類）

Ⅱ区東側区画に検出した。覆土はYP粒を含む黒色土であるが、底面は赤化し加熱の跡が見られる。覆土中には炭化物・焼土粒、遺物の混入は無く、底面に僅かに炭化物が認められた程度である。底面下の断面観察を行い底面壁際が比熱していることが確認された。遺構の性格は不明である。

#### 115号土坑・116号土坑（E類）

2土坑は10号住居跡と重複し検出した。ともに10号住居跡より新しい。覆土内には焼土が多量にあり、10世紀後半の羽釜片等が出土した。これは10号住居跡カマドのものと考えられる。形状は他の陥穴とは異なり115号は円形を呈し、116号は隅丸方形を呈する。

#### 1号集石

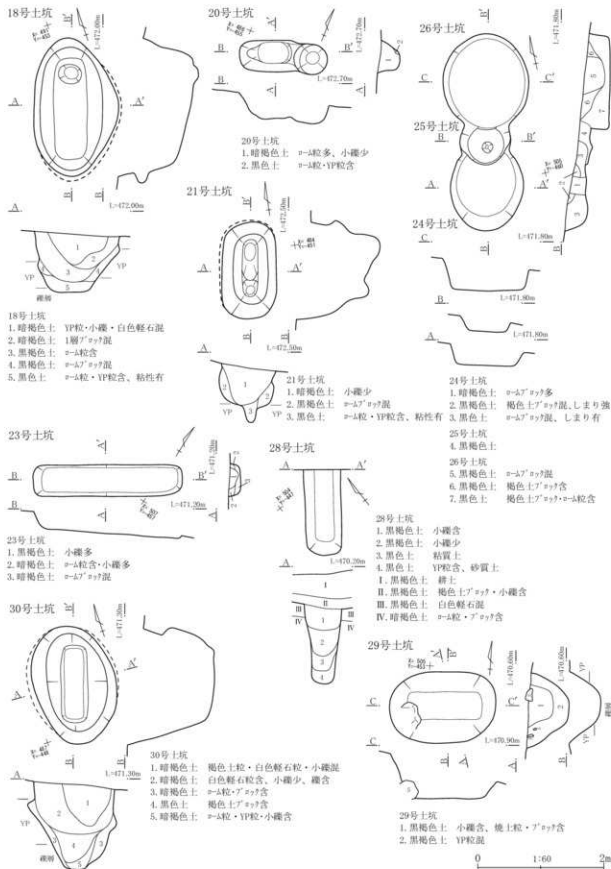
Ⅱ区調査区中央東側に検出した。2号集石は、東へ8mの位置にある。長軸102cm、短軸38cm、深さは礫上位から23cmを測る。長軸方位はN-51-Eで等高線に対し直交するようにある。礫は10～20cm大で、中央の礫を囲むように縁辺部に検出した。特に南側の扁平な礫は縁をなすように立っていたものと考えられる。覆土から骨片等は出土しなかったが、近世・近代の墓坑の可能性がある。

#### 2号集石

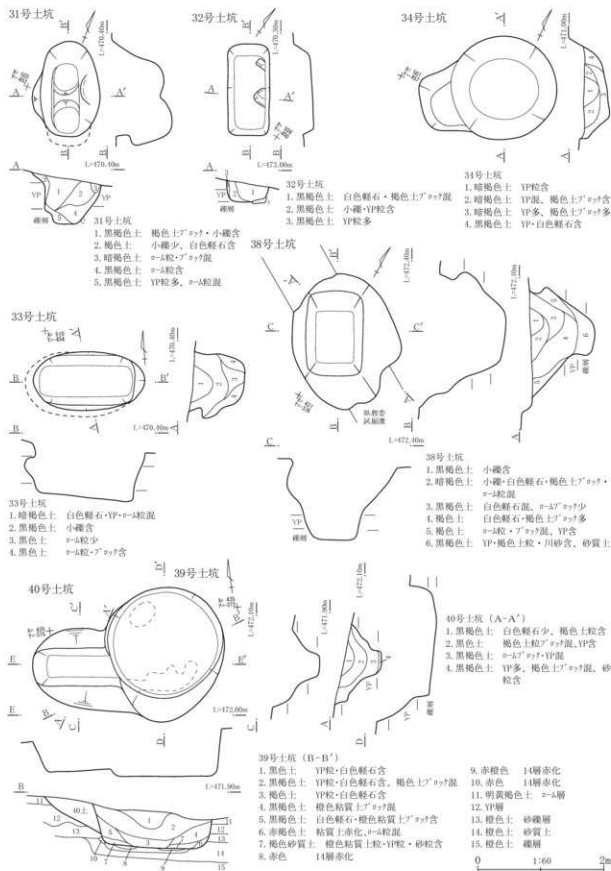
Ⅱ区調査区中央東側に検出した。長軸116cm、短軸40cm、深さ礫上位から40cmを測る。長軸方位はN-53-Wを示し、等高線に平行にある。礫は10～40cm大で、中央が盛り上がるように検出した。上層に大きな礫が判然とあり、下層では中央に傾くように検出した。特に南東隅の長軸43cm、直径25cmほどの礫を中心に礫が集中しているように見られた。1号集石同様覆土からは骨片は出土しなかったが、同時代の墓坑の可能性がある。



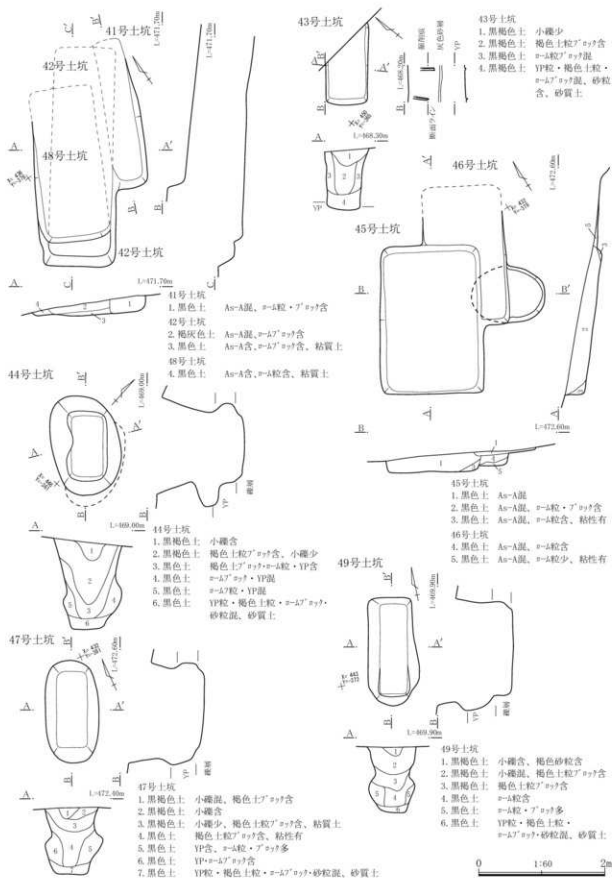
第39図 土坑 平・断面図 (1)



第40図 土坑 平・断面図 (2)

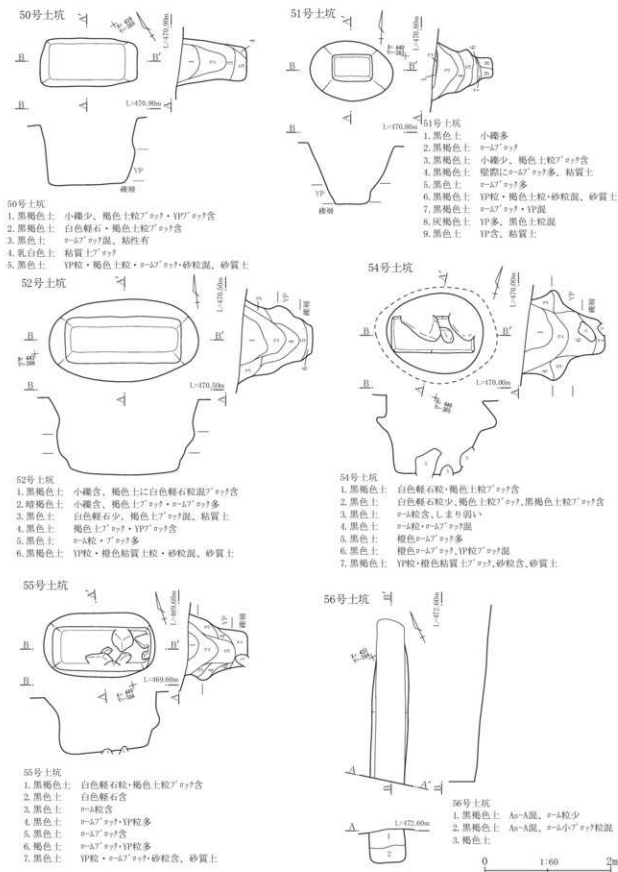


第41図 土坑 平・断面図 (3)

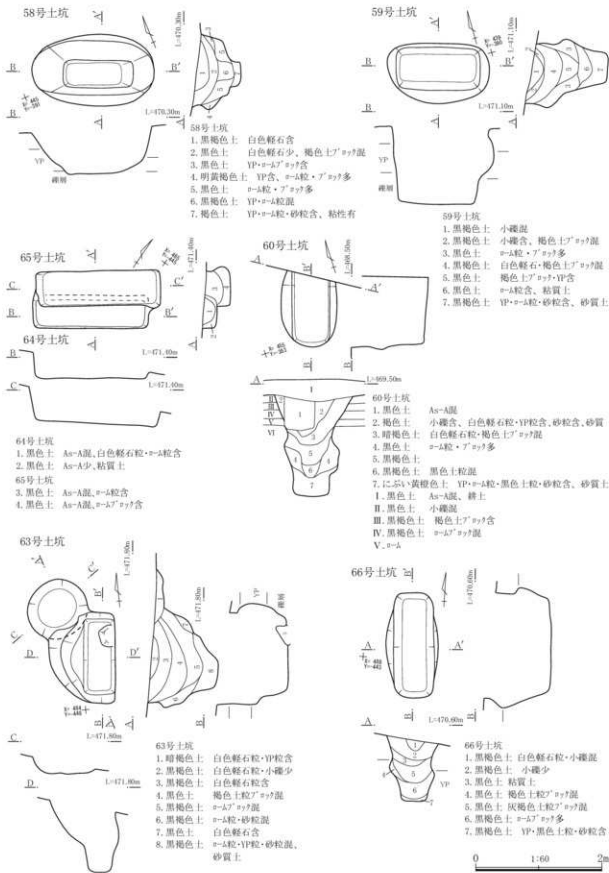


第42図 土坑 平・断面図 (4)

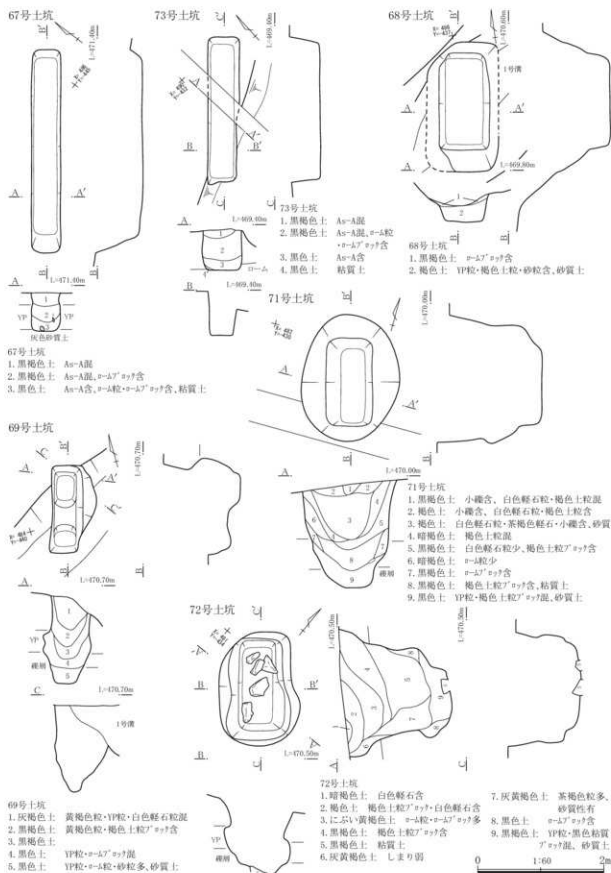




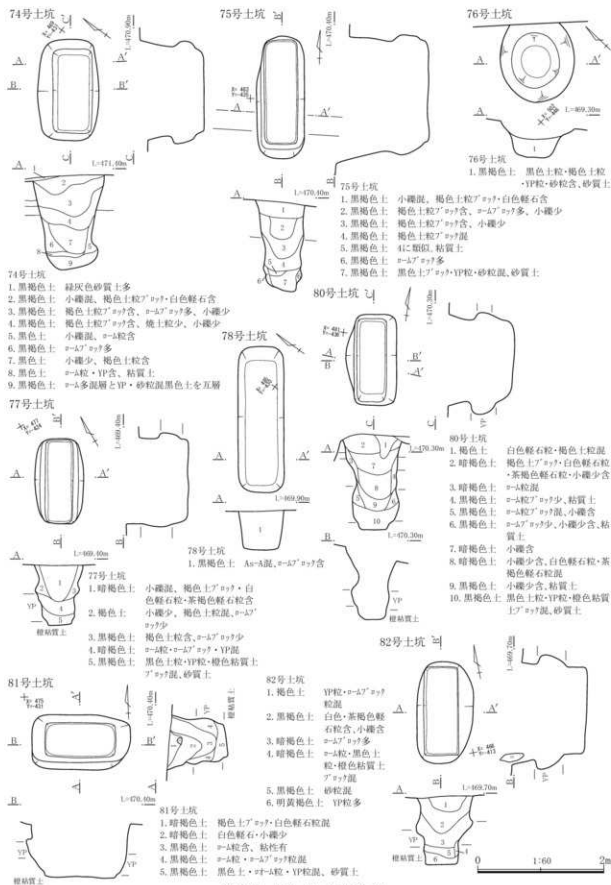
第43図 土坑 平・断面図 (5)



第44図 土坑 平・断面図 (6)



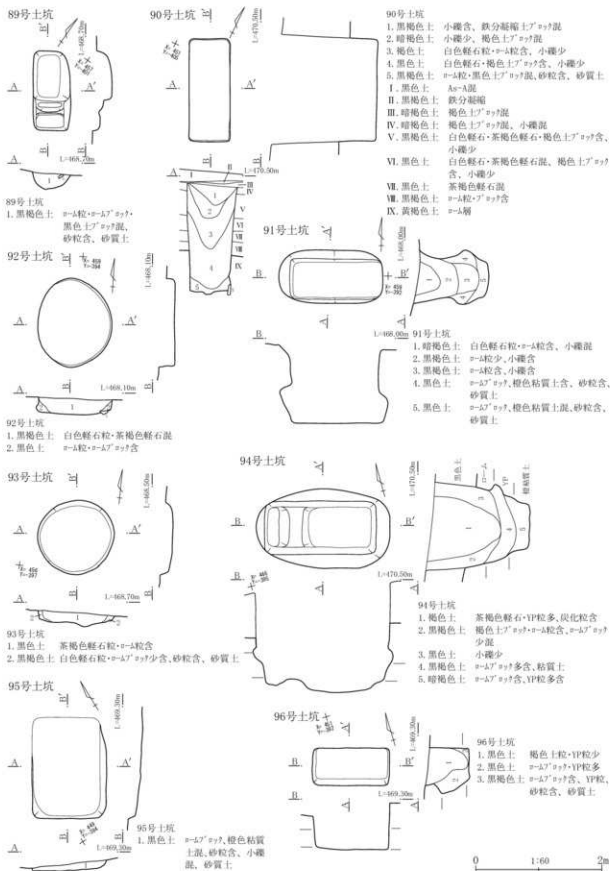
第45図 土坑 平・断面図 (7)



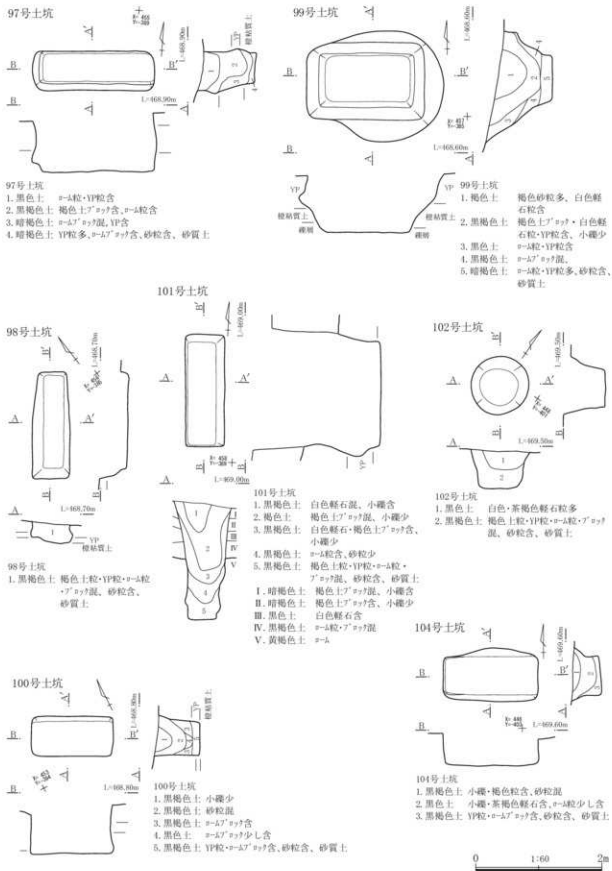
第46図 土坑 平・断面図 (8)



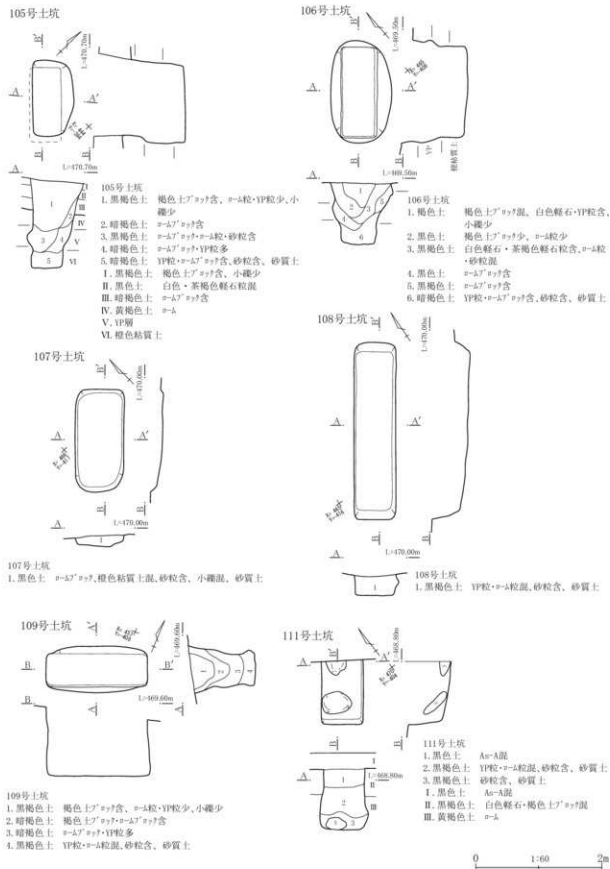
第47図 土坑 平・断面図 (9)



第48図 土坑 平・断面図 (10)

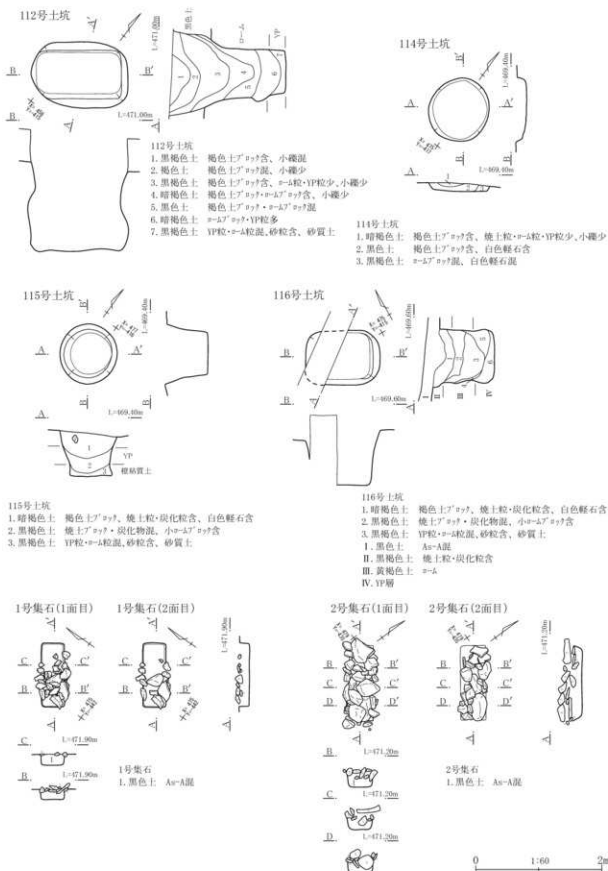


第49図 土坑 平・断面図 (11)

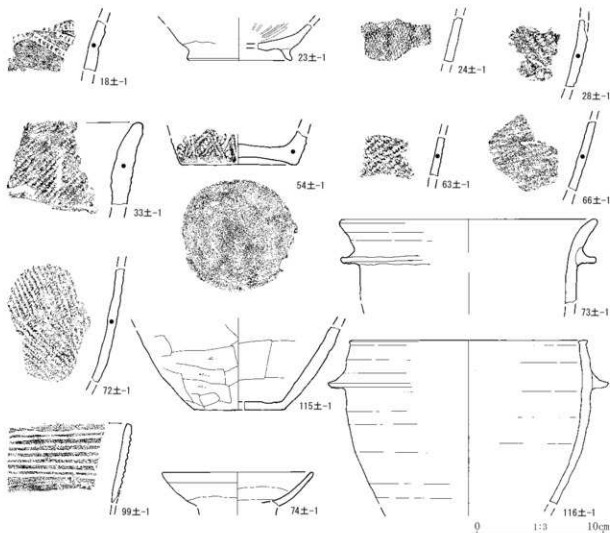


第50図 土坑 平・断面図 (12)





第51図 土坑 平・断面図 (13)



第52図 土坑出土遺物図

第14表 土坑出土遺物観察表(第52図,Pl.22)

No. Pl.	種類 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径/底径/器高	胎土/焼成/色調	成型形の特徴	備考
18-1	縄文土器 深鉢	18土坑 胴部	—	繊維・小礫含/良 好/灰黄褐色	平截竹管による爪形文施す。	黒浜
23-1	須臾器 高台付椀	23土坑 高台部片	—/(8.2)/(2.5)	細砂粒/還元焰/ 褐色。	内面黒色磨き。付高台。	
24-1	縄文 深鉢	24土坑 胴部	—	繊維・細砂粒/堅 /赤褐色	単節縄文肌。横位回転施文。	諸磯 a
28-1	縄文 深鉢	28土坑 胴部	—	繊維・小礫含/良 好/純黄褐色	縄文肌。横位回転施文。	黒浜
33-1	縄文 深鉢	33土坑 口縁部	—	繊維・小礫含/良 好/明赤褐色	やや外反する口縁部片。単節縄文肌を縦位気 味に施文。	前期初
54-1	縄文 深鉢	54土坑 底部	—	繊維・小礫含/良 好/明赤褐色	直前段合橋の羽状縄文。底部指頭圧痕。	関山
63-1	縄文 深鉢	63土坑 胴部	—	繊維・小礫含/良 好/純黄褐色	縄文肌。横位回転施文。	黒浜
66-1	縄文 深鉢	66土坑 胴部	—	繊維・白色粒子/ 良好/明赤褐色	繊維器面多	前期初。 花積平行
72-1	縄文 深鉢	72土坑 底部付近	—	繊維・小礫含/良 好/明赤褐色	縄文肌。横位回転施文。	前期初。 花積平行

第14表 土坑出土遺物観察表(第52図、PL22)

No. PL	種類 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径/底径/器高	粘土/焼成/色調	成整形の特徴	摘要
73-1	羽釜	73土坑 口縁部	(20.3) / - / (8.3)	粗砂粒/酸化焙/橙	口縁部は外反。内外面ナデ整形。器は高く指頭微有。胴部外面造削り。	
74-1	灰積陶器 皿	74土坑 口縁部	(11.9) / - / (2.6)	緻密/還元焙整焼/灰黄	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ナデ整形。	
99-1	縄文 深鉢	99土坑 口縁部	-	小礫多/良好/橙	地文横位縄文LR並文後、幅3mmの沈線を施す。磨減多。	晩期終末
115-1	土師器 甕	115土坑 胴下~底部	- / (7.0) / (6.3)	粗砂粒/酸化焙/褐黄橙	底部と胴部外面へラ削り。胴部内面ナデにて器表面磨。輪軸痕。	
116-1	須恵器 羽釜	116土坑 口縁~胴部	(18.8) / - / (12.9)	粗砂粒/酸化焙/橙	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。踵は高くよく無調整され、端部面取り。内外面コクロ整形。	

第15表 土坑計測表

番号	位置	分類	平面形		確認面規模 (cm)			底面規模 (cm)		主軸方位	重複関係	備考(出土遺物)
			確認面	底面	長軸	短軸	深さ	長軸	短軸			
1	510-475	E	楕円形	隅丸長方形	72	53	50	51	15	N-22-E		試掘
2	510-470	B	隅丸長方形	長方形	142	54	82	117	40	N-33-W	7土	
4	510-470	E	円形	円形	113	111	54	88	83	N-10-W		
5	505-465	E	円形	円形	95	85	55	65	64	-		
6	495-470	B	不整楕円形	長方形	243	195	134	125	54	N-6-W		
12	500-455	A	長方形	長方形	264	66	26	248	58	N-47-E		
14	490-455	A	隅丸長方形	長方形	124	46	11	105	34	N-52-E		
16	490-450	C	長方形	長方形	184	78	84	155	65	N-74-E		
17	485-455	C	長方形	長方形	200	65	80	170	40	N-4-W		
18	485-450	B	楕円形	長方形	218	134	95	162	55	N-19-E		18土1
20	485-450	C	長方形	隅丸長方形	95	50	25	45	34	N-70-E		
21	480-450	B	楕円形	隅丸長方形	153	86	94	90	25	N-7-E		
23	505-455	A	長方形	長方形	236	52	19	215	40	N-57-E		23土1
24	505-460	E	楕円形	楕円形	-	116	34	-	90	N-13-E	25・26土	24土1
25	505-460	E	円形	円形	-	82	26	-	58	N-13-E	24・26土	
26	505-460	E	円形	円形	152	137	52	140	70	N-13-E	24・25土	
28	500-455	C	長方形	長方形	135	58	136	115	30	N-26-E		28土1
29	500-450	B	楕円形	長方形	170	112	67	117	43	N-96-E	3住	
30	485-445	B	楕円形	長方形	188	116	138	110	30	N-19-E		
31	500-450	B	楕円形	隅丸長方形	150	106	84	108	40	N-21-W		
32	505-450	C	長方形	長方形	145	68	36	115	50	N-34-W		
33	505-450	B	楕円形	長方形	176	92	92	147	50	N-87-W		33土1
34	500-455	E	円形	円形	168	162	44	109	95	N-67-E	3住	
38	430-375	B	不整楕円形	長方形	212	166	128	81	60	N-28-W		試掘
39	430-370	E	楕円形	円形	214	190	74	162	165	-	40土	
40	430-370	C	長方形	長方形	130	126	48	106	33	N-83-W	39土	
41	435-375	A	長方形	長方形	238	55	27	222	45	N-24-E	42・48土	
42	435-375	A	長方形	長方形	346	115	22	330	100	N-35-E	41・48土	
43	450-360	C	長方形	長方形	126	70	96	115	60	N-51-E		
44	445-360	B	楕円形	長方形	155	110	144	95	50	N-41-W		
45	430-380	A	長方形	長方形	235	165	32	220	147	N-33-E	46土	
46	430-375	A	長方形	長方形	222	128	24	212	125	N-30-E	45土	
47	430-380	B	楕円形	長方形	162	85	106	70	50	N-25-E		
48	435-375	A	長方形	長方形	245	108	22	235	100	N-28-E	41・42土	
49	440-370	B	不整長方形	長方形	172	75	110	142	43	N-12-E		
50	435-385	C	長方形	長方形	154	76	110	120	58	N-58-W		
51	435-380	B	楕円形	長方形	130	96	96	55	30	N-87-E		
52	440-380	B	楕円形	長方形	236	132	118	170	40	N-84-W		
54	445-385	B	楕円形	長方形	154	126	132	122	50	N-74-E		54土1
55	445-380	C	隅丸長方形	長方形	176	102	100	135	50	N-73-W		
56	430-380	A	長方形	長方形	254	56	52	-	47	N-26-E		

第15表 土坑計測表

番号	位置	分類	平面形		確認面規模 (cm)			底面規模 (cm)		主軸方位	重複関係	備考(出土遺物)
			確認面	底面	長軸	短軸	深さ	長軸	短軸			
58	440-385	B	楕円形	長方形	194	116	76	85	35	N-68-W		
59	435-390	B	楕円形	長方形	161	96	126	120	44	N-75-W		
60	455-380	B	楕円形	長方形	112	90	110	104	53	N-18-E		
63	480-445	B	不整形楕円形	長方形	144	106	112	107	36	N-5-E		63土1
64	480-445	A	長方形	長方形	182	53	20	170	42	N-66-E	65土	
65	480-445	A	長方形	長方形	197	55	40	180	52	N-55-E	64土	
66	485-440	B	不整形長方形	長方形	165	82	105	145	40	N-4-W		66土1
67	485-445	A	長方形	長方形	320	45	60	280	38	N-53-E		
68	480-435	B	不整形長方形	長方形	137	60	138	120	35	N-8-E	1溝	
69	480-435	B	不整形長方形	長方形	138	70	137	117	34	N-16-E	1溝	
71	480-425	B	楕円形	長方形	200	155	170	135	40	N-15-W		
72	480-430	B	楕円形	長方形	180	115	125	120	50	N-40-W		72土1
73	485-430	A	長方形	長方形	230	50	65	210	35	N-42-E		73土1
74	465-430	C	長方形	長方形	160	97	150	120	50	N-54-E	6住	74土1
75	480-430	C	長方形	長方形	195	75	145	160	48	N-2-W		
76	500-445	D	円形	円形	127	120	58	50	50	N-39-E		
77	475-420	C	長方形	長方形	135	80	95	125	35	N-31-E		
78	480-430	A	長方形	長方形	220	73	60	195	48	N-42-E	8住	
80	480-435	C	長方形	長方形	145	80	150	115	40	N-8-W		
81	470-430	C	長方形	長方形	155	85	95	108	50	N-88-W		
82	465-410	B	不整形長方形	長方形	160	90	105	135	50	N-11-E		
83	470-410	B	楕円形	長方形	260	182	160	125	40	N-71-E	103土	
84	470-405	B	不整形楕円形	長方形	220	115	100	150	48	N-0		
85	465-395	C	長方形	長方形	165	68	130	139	50	N-33-E		
86	460-395	C	長方形	長方形	165	50	60	153	42	N-31-E		
87	460-405	C	長方形	長方形	200	87	63	175	82	N-42-E		
88	455-400	C	長方形	長方形	170	77	180	143	56	N-53-E		
89	455-400	C	長方形	長方形	125	60	25	67	35	N-35-W		
90	450-400	C	長方形	長方形	163	65	172	158	65	N-25-W		
91	455-390	B	隅丸長方形	長方形	165	85	125	140	55	N-89-E		
92	455-390	D	楕円形	楕円形	140	117	25	135	115	N-4-W		
93	455-395	D	円形	円形	120	118	20	112	105	N-84-E		
94	445-390	B	楕円形	長方形	213	125	155	180	65	N-75-W		
95	450-390	C	長方形	長方形	160	120	10	155	105	N-31-E		
96	450-390	C	長方形	長方形	123	60	70	115	50	N-74-W		
97	450-385	C	長方形	長方形	195	62	80	177	45	N-85-E		
98	455-385	C	長方形	長方形	170	60	35	145	30	N-39-E		
99	455-385	B	不正楕円形	長方形	215	174	90	135	70	N-89-W		99土1
100	450-390	C	長方形	長方形	130	62	75	130	55	N-64-W		
101	455-385	C	長方形	長方形	178	63	185	164	45	N-3-W		
102	445-400	D	円形	円形	92	90	60	60	57	-		
103	470-405	E	円形	円形	108	70	34	83	63	-	84土	
104	445-400	C	長方形	長方形	150	85	50	145	60	N-89-E		
105	440-395	B	不正長方形	長方形	120	65	140	115	50	N-46-W		
106	465-405	B	楕円形	長方形	160	95	95	140	50	N-40-E		
107	465-415	A	長方形	長方形	160	80	15	150	70	N-44-E		
108	465-410	A	長方形	長方形	280	66	30	250	58	N-35-E		
109	455-405	B	不整形長方形	長方形	161	74	100	161	50	N-68-E		
111	470-400	A	長方形	長方形	102	65	65	91	63	N-39-E		
112	455-410	C	不整形長方形	隅丸長方形	154	105	180	135	65	N-53-E		
114	475-415	E	円形	円形	100	96	13	91	85	-	10住	
115	475-415	E	円形	円形	90	91	68	65	65	-	10住	115土1
116	470-415	E	隅丸長方形	隅丸長方形	117	86	87	-	72	N-60-W	10住	116土1
1集E	475-440	-	長方形	長方形	102	38	18	98	33	N-51-E		
2集E	475-430	-	長方形	長方形	116	40	17	98	30	N-53-W		

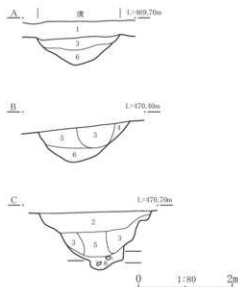
分類A: As-A復旧溝、長い長方形、B:陥穴、平面楕円形・底面長方形、C:陥穴、平面長方形・底面長方形、D:陥穴、平面円形、底面円形、E:その他

### 3 溝

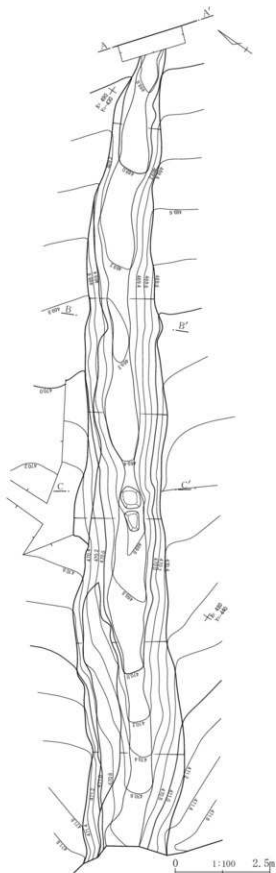
#### 1号溝

調査区中央西に検出し、斜面に直交するように南西から北東方向に直線的にある。規模は確認面での幅は、南側で2.2m、北側で1.7m、底面幅は南側で65cm、北側で50cmを測る。底面の比高差は2.1mを測る。底面には川砂利の砂礫層が堆積し流化していたことが窺える。また、南側はローム層を掘り込むのに対し、北側の底面はローム上層の黒色土である。

水源は本地点から西側100m程の山地から当地点の緩斜面になる谷地点に湧水地があり、現在もその地から管を使い民家に引いている。本溝も同様の地点から流下していたものと考えられる。覆土はAs-Aを多く含むもので、陥穴等に見られる褐色土ブロックを含む黒色土が見られないことから近世・近代のものと思われる。なお、現地見学会等で地元の高老もこの溝の存在を把握していなかったことから近代には埋没していたものと考えられる。溝からの出土遺物は無い。



- 1号溝  
 1. 黒色土 As-A混練土  
 2. 黒色土 As-A混  
 3. 黒褐色土 As-A含、褐色土ブロック混  
 4. 黒褐色土 7号仕根カマド焼土粒ブロック混  
 5. 褐色土 川砂ブロックを互層  
 6. 川砂利層



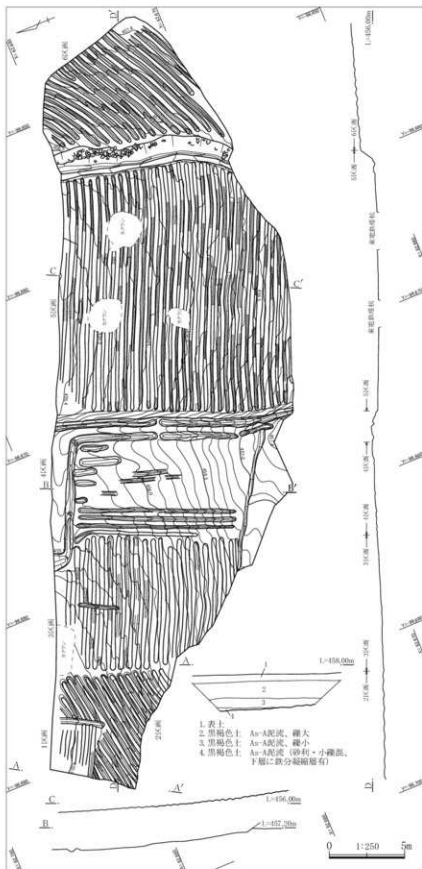
第53図 溝平・断面図

#### 4 畑

調査地I区で検出した。当地点の現在の標高は457.5～457.2mとほぼ平坦である。検出した畑は南側が457.4m、北側が455.4mと山なりに傾斜し平坦になる。このような山体傾斜と平坦面の変換点に検出した泥流下の畑は、当時の耕作の南端と、泥流が南側山裾にどのように押し寄せ畑を埋没させたかを知る上でも重要な地点である。

泥流は2m程堆積し3層に分層される。表土(1層)下第2層は1m程の礫を含み、3層は2層より礫の大きさが小さくなる砂礫層である。泥流中の遺物は2層から出土した。なお、(6)の鉢は県教委試掘・確認時に出土したものである。4層は砂利層で鉄分沈着土ブロックも見られた。4層の畑直上では鉄分層が0.5cm程あり畑面上の白色のAs-A軽石により剥がす様に調査を進め、畑面を検出した。なお、鉄分沈着層は調査区北半分の傾斜の緩やかになる平坦部のみで、南側は泥流砂礫層下でAs-A軽石がサクに堆積していた。

畑は、6区画検出し、耕作走行が異なることと、境の道状から区画を判断した。2区画と3区画の間には畑と比高差はなく平坦で幅20cm程の間隔で南北方向の等高線に直交するようにある。等高線に平行する3



第54図 畑全体図

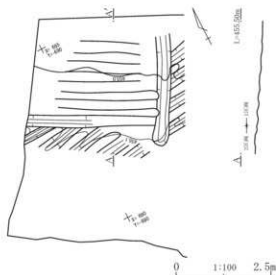
区画と等高線に直交する4区画の境は耕作方向で区画される。4区画と5区画の境には、幅1.5mの道状の高まりがある。両脇には幅45cm深さ10cm程の溝が平行し、平坦部は幅30cm程である。南側の山裾から13mで直角に西側に曲がり、7.5m進み北側へ直角に曲がる。この道状を境に5区画は4区画より40cm程下がり平坦に広がる。5区画と6区画の境は、段差の大きな土手で区画される。比高差1m程である。5区画よりには70cm幅で土手下に沿う道状が南北方向にある。両脇に幅10cm程の皿状の浅い溝があり、幅30cm程の高まり平坦面がある。土手に検出した礫は泥流の礫で、土手に張り付くようにある。

1区画は等高線に平行した畝サク走行を示す。東西3.3m、南北2.9m、面積10㎡を測る。畝サクは明瞭ではないが4条のサクの中心と次のサクの中心の幅(以下「サク間」という)の平均は48cmを測る。

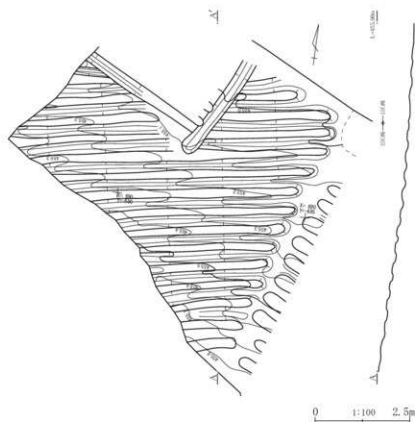
2区画は等高線にほぼ沿う様に山裾に平行する走行を示す。1区画と重複する部分があり、畝サクの状況から1区画の方が新しいと考えられる。東西8.7m、南北8.0m、面積35㎡を測る。12条のサク間平均は49.5cmで、畝サクの比高差は8cm程である。

3区画は等高線と山裾に平行する走行を示す。東西8.9m(約5間)、南北12.0m、面積93㎡を測る。18条のサク間平均は57cmで畝サクの比高差は5cm程である。

4区画は等高線及び山裾に直交する走行であるが、畝サクは不明瞭である。東西6.4m(約3.5間)、南北11.6m(約6.5間)、面積125㎡(約38坪)を測る。西端に検出した3条のサク間平均は47cmである。



第55図 畑 第1区画 平・断面図



第56図 畑 第2区画 平・断面図

5区画は、他の区画より最も低く残存状況は良好でサクにはAs-A軽石が堆積し筋状を成していた。3区画同様に等高線と山裾に平行する走行を示す。東西平均15.8m(約8.5間)、南北15.5m、面積242㎡を測る。30条のサク間平均は48.8cmで、畝サク比高差は8cm程である。

6区画は、現在の表土から1m程下で検出した。畝サクは、2区画同様の等高線にはぼ沿う様に山裾に平行する走行を示す。5区画境の土手際まで耕作されていた。東西長は南側で11mを測る。南北10.3m、面積75㎡である。18条のサク間平均は52cmで、畝サク比高差は8cm程である。

本遺跡検出全区画のサク間平均は51.3cmである。この間隔は本遺跡より1.5km西に位置する上郷岡原遺跡で検出された麻畑と同様である。

麻は、日陰や悪地では栽培できず、畑の格付けとして、上畑・中畑に限られる作物である。麻の栽培の条件としていくつかある。○温度の急激な変化がなく、生育期間中は降雨があり湿度の高いところ(茎の伸長をはかり、繊維の発育を促すため)。○強風の吹かないところ(茎が倒れ、繊維の質を落とさないため)。○生育後期から収穫期にかけて晴天の多いところ(繊維細胞膜の肥厚を促し、また収穫調整乾燥のため)。○土壌は砂質でなく有機質に富んだ排水のよい土壌ないし植土壌が適する。○水が豊富で便利なところ(収穫後茎を浸水精練するため)。などが上げられ、本地域は高温多湿・無風状態など麻の生育条件に恵まれている。なお、麻の成熟期間は播種から収穫期まで108～115日と言われる。



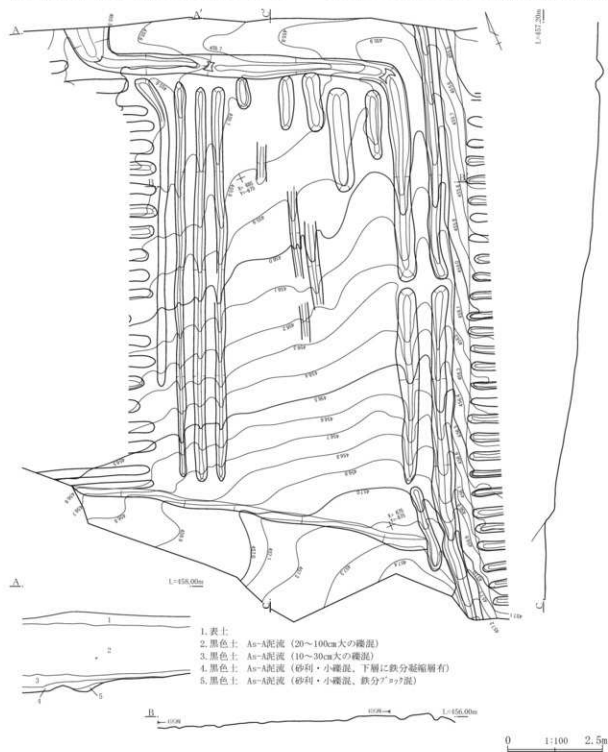
第57図 畑 第3区画 平・断面図



本発掘調査地域は、現在東吾妻町大字三島に所在する。江戸時代は三島村といわれた地域である。

明治9年に作成された「三島村村誌」には「天正18(1590)年真田伊賀守信幸を領す。天和2(1682)年直に徳川氏に隸し、代官を以て支配し」とある。

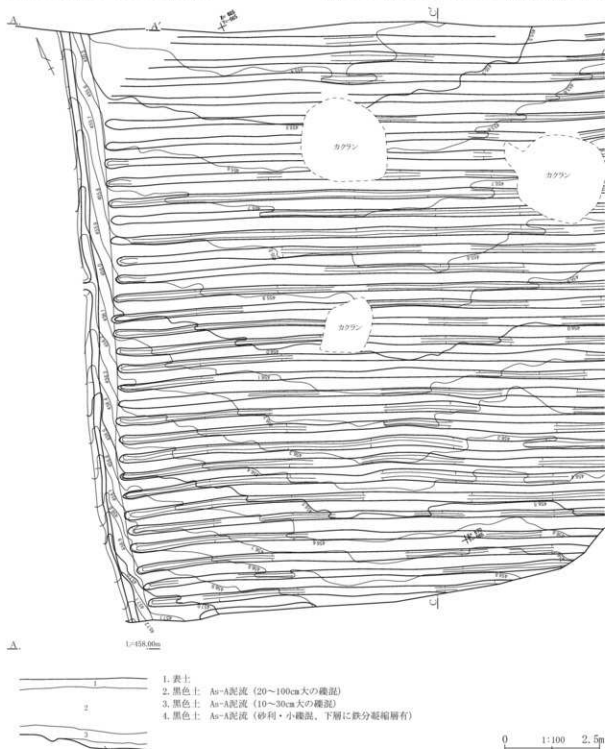
耕地は「田反別 8町4反5畝14歩(83,848㎡)、畑 121町6反3畝29歩(1,206,344㎡)」物産は「蕨1,482貫(5,557.5kg)当国群馬郡渋川・高崎・前橋且者同郡原町・中之条市街に売輸す。麻6,322貫(23,707.5kg)上中品、越中国水見高岡に売輸す。



第58図 畑 第4区画 平・断面図

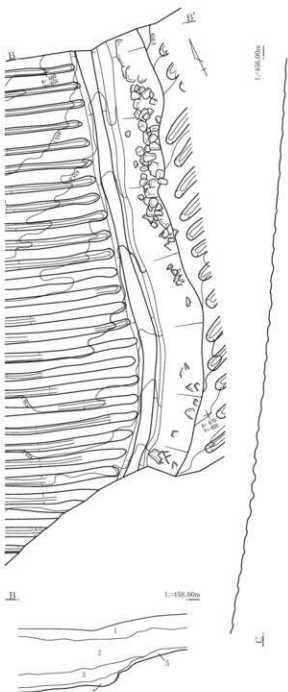
下品は越後国柏崎辺に売輸す。」、民業は「男 農  
麻桑、女 養蚕」とある。当地域は江戸時代天領  
であった事が窺える。また、主な生業は農業で、  
畑は田に対し14.4倍の面積があり、麻や養蚕によ  
り現金収入を得ていたことが記される。

吾妻地方の麻の栽培は、「加沢記」の岩櫃落城に  
関する記事の中に「麻から」があることから16世  
紀には行われていたものと思われる。三島村に代  
表される岩島麻は全国的に知られ、織物や漁網の  
原料として関東地方はもとより、北陸、関西、さ



第59図 畑 第5区画平・断面図

らに四国地方にまで流通していた。この麻の栽培には江戸時代上州の分限者（財産家）と言われた加部安左衛門の力が大きかった。加部安左衛門は



1. 表土  
 2. 黒色土 As-A泥流 (20~100cm大の礫泥)  
 3. 黒色土 As-A泥流 (10~30cm大の礫泥)  
 4. 黒色土 As-A泥流 (砂利・小礫泥、下層に鉄分凝縮層有)  
 5. 黒色土 As-A泥流 (砂利・小礫泥、鉄分アワツ泥)

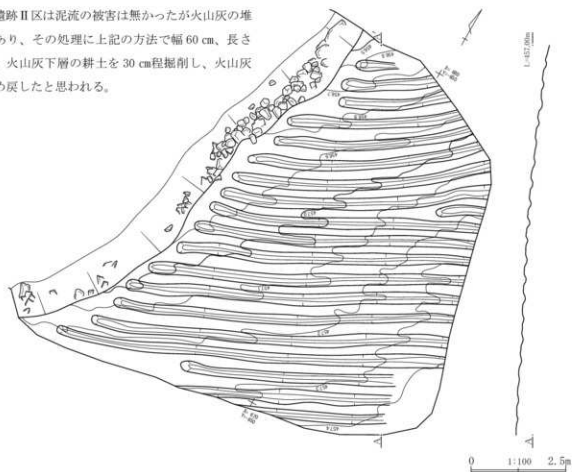
0 1:100 2.5m

戦国時代より大戸で農業を営み、江戸中期より大戸関所のある街道筋である地の利を生かし商業、鉱山業（足尾銅山）、金融業、酒造業などの多角経営に着手し財をなした。三島村等近傍農村の要求に応じて手金貸しを行っていた。これは毎年春、農家に資金を貸し、夏秋に収穫物の藪、麻、麦などの現物を取り立て、販売し収益を上げる手法である。このことにより農業も安定し、生産増へと繋がった。また、天明三年（1783）浅間山噴火に際し、いち早く地元地域流失家に50両（三島村57軒の流家へ15両、川戸村流家11軒へ3両、厚田流家19軒へ5両、矢倉流家37軒へ9両、岩下流家26軒へ7両、松尾流家6軒へ2両、横谷流家24軒へ6両、流家110軒金47両、外に川原畑喜左衛門へ3両）の救済を行い、鎌原村を始め被災した吾妻地域に金500両、米500石、麦など蔵から放出し救済の手をさしのべた。さらに引き続いて廃墟化した村に小屋掛の建設や食糧の援助など復旧に尽力した。これら多大な行為に対して幕府より苗字帯刀が許された。翌年からの冷害は高冷地山間部の多い吾妻郡地方は未曾有の大飢饉に見まわれ、多くの村々に対し数回にわたり資金援助を行い救済した。その後江戸城改築や足尾銅山再建等にも尽力し、横浜開港にともない横浜へ進出した。

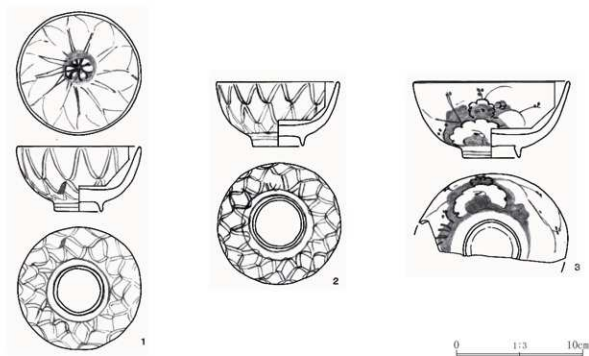
次に泥流に埋もれた畑の開発について、東吾妻町原町地区における富沢家文書「浅間山焼崩泥入畑開発帳」に天明三年九月六日より泥流を除去し、元の畑にする作業を行ったことが記されている。その方法は畑全体を30~60cm掘り返し、泥流中の30~60cmの礫を除去し、次に幅1m、長さ18m程で泥流層1.8mと下層の耕土1.2m程を1.8m間隔で2本掘り、泥流を埋め、下層の耕土を泥流上に15cm厚でならし使用とある。

本発掘調査区I区では、泥流中の30~60cmの礫を除去し、畑の脇や、山裾に小道を開き土砂崩落を防ぐための石積みとしている。しかし、下層の旧耕作土までは堆積が厚く、礫も大きく復旧は行っていない。

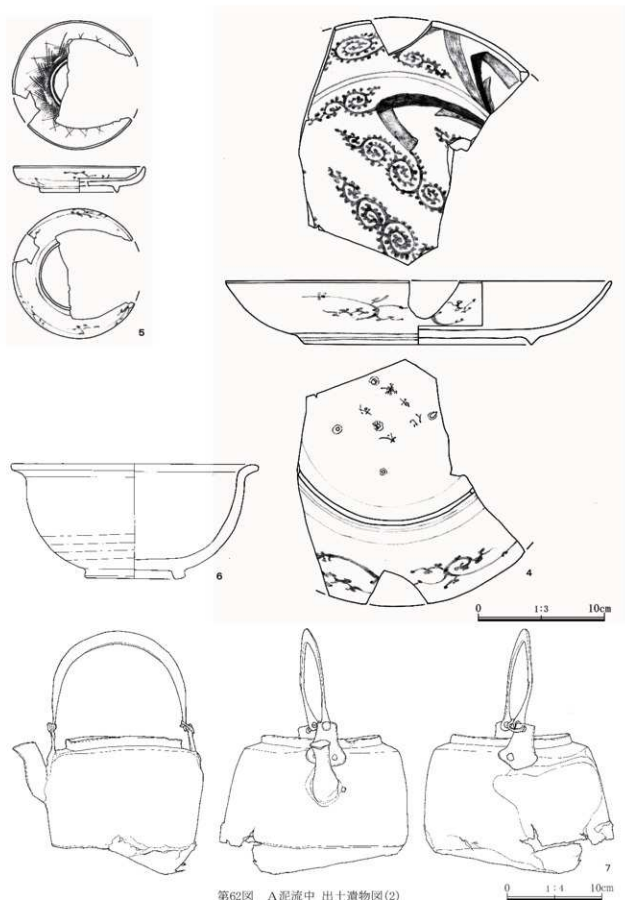
本遺跡Ⅱ区は泥流の被害は無かったが火山灰の堆積があり、その処理に上記の方法で幅60cm、長さ2.2m、火山灰下層の耕土を30cm程掘削し、火山灰を埋め戻したと思われる。



第60図 畑 第6区画 平・断面図



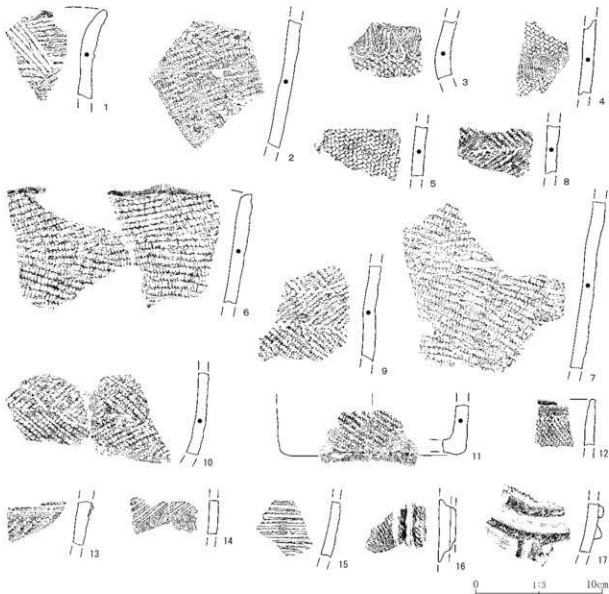
第61図 A泥流中 出土遺物図(1)



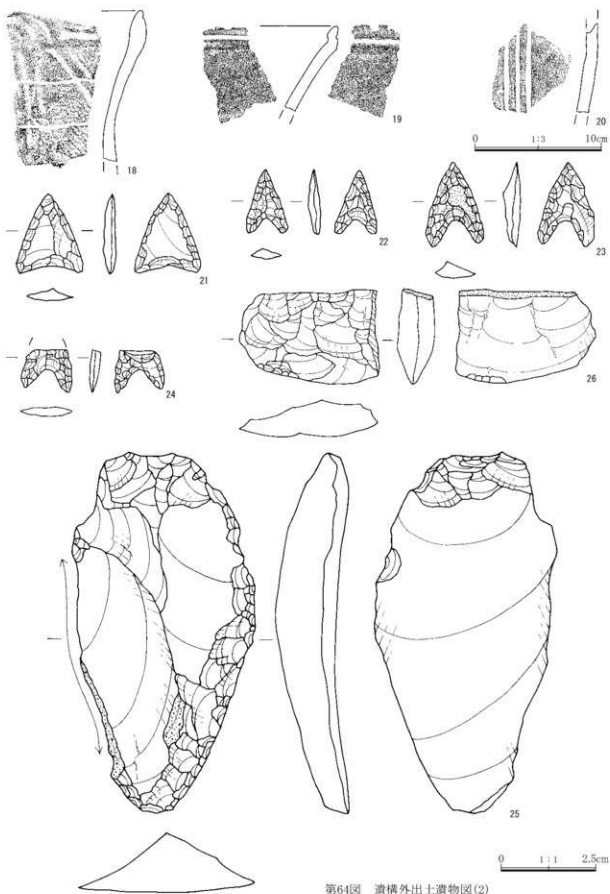
第62図 A泥流中 出土遺物図(2)

第16表 As-A泥流中出土遺物観察表(第61・62図,Pl.22-23)

No. Pl.	種類 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 口径/底径/器高	成整形の特徴	摘要
1	磁器 中碗丸形	泥流中 完形	9.8 / 3.8 / 5.1	轆轤成形、染付、釉薬透明、外面：二重網目文、内面：二重網目文、見込み：高麗刺菊文	波佐見系
2	磁器 中碗丸形	泥流中 完形	9.6 / 4.0 / 5.1	轆轤成形、染付、釉薬透明、外面：二重網目文	波佐見系
3	磁器 中碗丸形	泥流中 1/2	(12.4) / 4.4 / 6.0	轆轤成形、染付、釉薬透明、外面：雪輪梅樹文	波佐見系
4	磁器 中皿丸形	泥流中 1/4	(30.6) / (18.0) / 5.0	轆轤成形、染付、釉薬透明、内面：胡唐草、外面：唐草、銘：大明成化年製、目取5	肥前
5	磁器 小皿丸形	泥流中 1/2	10.2 / (6.0) / 2.1	轆轤成形、染付、釉薬透明、内面：松葉、外面：唐草	波佐見系
6	陶器 大碗隆反形	泥流中 口縁部欠	(19.4) / 8.0 / 9.1	轆轤成形、灰釉。	瀬戸・美濃
7	銅製品 ヤカン	泥流中 完形、蓋無	12.5 / 19.5 / 胴部高 11.7、全体高22.8 /	銅製、明出、取手接合部補修孔あり、ビス止め針金で補修(取手器厚0.2cm/胴部器厚0.1cm)	



第63図 遺構外出土遺物図(1)



第64図 遺構外出土遺物図(2)

第17表 遺構外出土遺物観察表(第63-64図、PL23)

No. Pl.	種類 器形	出土位置 残存率	計測値 (cm) 胎土・焼成/色調	成整形の特徴	摘要
1	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 口縁部	織維・白色粒含/良好/鈍黄褐色	絡条体圧痕文を斜位に施し、横位に施す。	早期末～ 前期初
2	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 胴部	織維・砂粒/良好/鈍黄褐色	縄文LRを地文に、絡条体圧痕文を施す。	早期末～ 前期初
3	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 胴部	織維・白色粒含/良好/鈍褐色	組紐を斜位施文後、櫛状工具による平行沈線でコンパス文を施す。	閉山
4	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 胴部	織維・白色粒含/良好/鈍黄褐色	組紐を斜位施文後、櫛状工具による平行沈線でコンパス文を施す。	閉山
5	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 胴部	織維・白色粒含/良好/鈍褐色	組紐を斜位施文後、櫛状工具による平行沈線でコンパス文を施す。	閉山
6	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 口縁部	織維・小礫含/良好/鈍黄褐色	単節縄文RLを縦位・斜位回転施文。	黒浜
7	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 胴部	織維・小礫含/良好/鈍黄褐色	単節縄文RLを縦位・斜位回転施文。6と同一個体か	黒浜
8	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 胴部	織維・小礫含/良好/鈍褐色	単節縄文RLとLRの羽条縄文。	黒浜
9	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 胴部	織維・小礫含/良好/鈍褐色	単節縄文RLとLRの羽条縄文。	黒浜
10	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 胴部	織維・小礫含/良好/鈍黄褐色	単節縄文RLとLRの羽条縄文。	黒浜
11	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 底部	織維・小礫含/良好/鈍褐色	単節縄文RLとLRの羽条縄文。	黒浜
12	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 口縁部	小礫多/堅/暗赤褐色	単節縄文RLを横位回転施文。	諸磯a
13	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 胴部	石英含/良好/褐色	単節縄文LRを横位回転施文。手栽竹管による平行沈線を施す。	諸磯b
14	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 胴部	小礫多/堅/鈍黄褐色	手栽竹管による集合沈線施文	諸磯b
15	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 胴部	小礫多/堅/鈍黄褐色	手栽竹管による集合沈線施文	諸磯b
16	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 胴部	白色粒含/良好/鈍赤褐色	2条の隆帯を弧状に貼付。単節縄文RL	加曾利E1
17	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 胴部	白色粒含/良好/赤褐色	2条の隆帯を弧状と垂下の貼付。16と同一個体か	加曾利E1
18	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 口縁部	白色粒含/良好/鈍黄褐色	波状口縁。沈線で文様表出後、斜位縄文RLを充填施文。	堀之内1
19	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 口縁部	小礫多/良好/鈍黄褐色	口唇下に沈線を施す。施文後磨き	堀之内1
20	縄文土器 深鉢	Ⅱ区 胴部	小礫多/良好/鈍黄褐色	幅4mmの縦位沈線施文後磨き	堀之内1
21	石製品 石鏝	Ⅱ区 完形	長2.1/幅1.8/厚0.4/1.1g	石材は碧玉と思われるが、赤色珪岩の可能性もあり。	
22	石製品 石鏝	Ⅱ区 完形	長1.7/幅1.1/厚0.3/0.4g	黒曜石	
23	石製品 石鏝	Ⅱ区 完形	長2.2/幅1.5/厚0.5/0.9g	黒曜石	
24	石製品 石鏝	Ⅱ区 上半部欠損	長(1.1)/幅1.3/厚0.3/0.2g	黒曜石	
25	石製品 スクレイパー	Ⅱ区 完形	長9.6/幅4.8/厚1.6/66.8g	硬質頁岩。右側縁にスクレイパーニッジ。左側縁に微細刻線痕。裏面の左側縁部に使用痕と思われる光沢痕(肉眼観察)	
26	石製品 楔形石器	Ⅱ区 完形	長2.5/幅3.7/厚1.1/8.8g	碧玉と思われるが、珪質岩の可能性もあり。	



## 第4章 理化学分析

理化学分析を火山灰分析と炭化材樹種同定の2件を委託を行った。

火山灰分析は、Ⅱ区調査区中央で表土下の黒色土中に緑灰色砂質土が部分的に円形または楕円形に堆積していた。調査により6号・8号・9号・11号住居跡では覆土であることが判明した。また、中央東側では88号・90号・112号土坑等の埋没後窪みとなっていた部分に堆積していたことも判明した。この砂質土は肉眼観察で火山灰と思われた。この火山灰の起源や年代を解明し、住居跡等の構築時期を限定することを目的に火山灰分析を行った。その方法は堆積状況が明瞭である6号住居跡を代表として、調査中に住居跡覆土5分層の各層からサンプル採取し小袋に入れ自然乾燥を行った試料を分析委託した。委託内容は、5層サンプルの5試料について、観察作業（試料を洗浄・ふるいわけした後、重鉱物・軽鉱物の分類・計数、火山ガラスの形態・色調などを顕微鏡観察する）、屈折率測定（火山ガラスと、斜方輝石や角閃石など重鉱物の屈折率測定）、同定作業（分析により得られた鉱物組成、火山ガラスの形態・色調、屈折率測定値などから、テフラの同定を行う）を行うものである。

炭化材樹種同定は、Ⅱ区調査区中央で6号・8号・9号住居跡の床直付近で炭化物の出土があり、この炭化物について樹種同定を行うことにより当時の構築材を明らかにすることを目的に行った。その方法は、最も炭化物が明瞭に多数出土し、その出土状態が住居中央に向かうように放射状にある6号住居跡出土物を使用した。調査中に炭化物が単位として見られた21点を小箱に現状を保ちながら採取し、自然乾燥させた試料を委託した。委託は21点について観察し、そのうち10点を詳細観察するものである。委託内容は、基礎作業（試料選定、乾燥、接合復元等）、観察面調整（木材の横断面・放射断面・接線断面の割断面試料作成）、試料観察（実体顕微鏡および走査電子顕微鏡による木材組織の観察）、記録（走査電子顕微鏡による写真撮影）である。

## 1 火山灰分析

株式会社古環境研究所

### 1. はじめに

関東平野北西部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、浅間、榛名、赤城など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで発掘調査の際に、層位や年代が不明な土層やテフラ粒子が検出された細谷B遺跡においても、発掘調査担当者により採取された5試料（下位より試料5～1）を対象にテフラ検出分析と、火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、テフラ粒子の起源や土層の層位さらに年代などに関する資料を収集することになった。

### 2. テフラ検出分析

#### (1) 分析試料と分析方法

- 1) 試料12gを秤量。
  - 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
  - 3) 80℃で恒温乾燥。
  - 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。
- #### (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第18表に示す。試料5や試料4には、粗粒の軽石やスコリアは認められないものの、灰色、白色、無色透明の軽石型ガラスが少量含まれている。試料3には、灰白色や淡褐色の軽石型ガラスが少量含まれている。一方、上位の試料2や試料1には、淡褐色の軽石（最大径2.5mm）やその細粒物の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。

### 3. 火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率測定

#### (1) 測定試料と測定方法

テフラ検出分析の対象となった試料について、含まれる火山ガラスと斜方輝石の屈折率測定を実施して、指標テフラとの同定精度の向上を図った。試料



## 5. まとめ

細谷B遺跡から採取された試料を対象に、テフラ検出分析さらに火山ガラスおよび鉱物（斜方輝石）の屈折率測定を実施した。その結果、浅間C軽石（As-C、4世紀初頭）、浅間Bテフラ（As-B、1108年）、浅間柏川テフラ（As-Kk、1128年）などに由来するテフラ粒子を検出することができた。

## 引用文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年, 群馬大学紀要自然科学編, 10, p. 1-79.  
 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層, 考古学ジャーナル, no. 157, p. 41-52.

第18表 テフラ検出分析結果

遺跡名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
細谷B遺跡	1	**	淡褐色	2.3	**	pn	淡褐色
	2	**	淡褐色	2.5	**	pn	淡褐色
	3				*	pn	灰白、淡褐色
	4				*	pn	灰、白、透明
	5				*	pn	灰、白、透明

\*\*\*\*: とくに多い, \*\*\*: 多い, \*\*: 中程度, \*: 少ない. 最大径の単位は, mm. bw: パブル型, md: 中間型, pn: 軽石型.

第19表 屈折率測定結果

遺跡名	試料	火山ガラス		斜方輝石	
		屈折率 (n)	測定粒子	屈折率 (γ)	測定粒子
細谷B遺跡	1	1.526-1.531	30	1.705-1.711	42
	2	1.526-1.530	30	1.704-1.710	43
	3	1.515-1.521	32	1.701-1.710	40
	4	1.501-1.506	36	1.705-1.710	40
	5	1.502-1.506	30	1.703-1.711	45

火山ガラスと斜方輝石の屈折率の測定は、それぞれWA10TとRIMS2000による。

## 2 6号住居跡出土炭化材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

細谷B遺跡は吾妻川右岸の河岸段丘上面に立地する、丘陵の南斜面に築かれた平安時代の集落跡である。同定を行う6号住居跡は10世紀頃に使用されていた住居跡で、焼土と共に出土した。このことから、焼失住居と考えられている。ここでは炭化材21点の樹種同定を行い、当時の建築材の選択性について考える。

### 2. 試料と方法

分析試料は6号住居跡から出土した炭化材である。炭化材はNo. 1~21に分けてタッパーに納められていた。いずれもタッパーに1点の炭化材が納められていたが、形状を良好に保つ試料はなく、試料

- 荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質, 地質研専報, no. 45, 65p.  
 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.  
 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス, 東京大学出版会, 336p.  
 早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち, 佐久考古通信, no. 57, p. 2-7.  
 早田 勉 (1996) 関東地方〜東北地方南部の示標テフラの諸特徴〜とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて, 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p. 256-267.  
 早田 勉 (2004) 火山民俗年学からみた浅間火山の噴火史〜とくに平安時代の噴火について〜, かみつけの里博物館第12回特別展「1108〜浅間山噴火〜中世への胎動」展示解説図録, p. 45-56.  
 友廣哲也 (1988) 古式土器出現期の様相と浅間山C軽石, 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p. 325-336.  
 若狭 徹 (2000) 群馬の弥生土器が終るとき, かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く〜古墳が成立する頃の土器の交流」, p. 41-43.

によっては破片状になっていたことから、本取りの観察などは行えなかった。

同定の方法は、横断、縦断、放射断面の材の断面面を作製して3断面を5mm角程度の大きさに整形した後、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定した。この後、金蒸着を施し走査型電子顕微鏡で同定および撮影を行った。残りの試料は、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

### 3. 結果

同定の結果、すべての炭化材が落葉広葉樹のクリであった(第20表)。

以下に同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

- (1) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. フナ科  
 図版1 la-c・2a~7a(No. 1・4・5・7・10・11・13)

大型の道管が年輪の始めに数列で並び、孔圏外では径を減じた道管が緩やかな火炎状に配列する環孔材である。放射組織は同性で単列である。道管の穿孔は単穿孔を有する。

クリは、北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は、重硬で耐朽性が高く、よく水湿に耐える。

#### 4. 考察

同定結果は全点がクリで、他の樹種は使用されていない。出土状況を見ると、試料No. 6・7・8・9は一列に近い形で出土した。細破片となっている試料もあるため、同一個体かどうかの判定は形状の視察では難しい。

群馬県内の古墳時代の竪穴住居跡出土炭化材の樹種には、クスギ節やコナラ節が多用される例が多い(山田, 1993)。しかし、古代の住居跡ではクスギ節やコナラ節は少数で、これら2分類群に代わってクリが多く使用される傾向がある。松井田町に所在する愛宕山遺跡の9世紀初頭の4号住居跡では、建築部材としてクリ材が多く産出し、同住居跡内で出土した木製品ではクリはほとんど認められず、建築材としてクリが選択利用されている(植田, 2000)。

また、長野原町に所在する長野原一本松遺跡でも住居跡の建築材の樹種同定を行っている。縄文時代後期の敷石住居跡5区60号では建築材61試料中60点がクリで、中世の4区5号竪穴状遺構でも建築材56試

料中30点がクリで、縄文後期と中世段階では建築材としてクリが多く利用されていた(植田, 2008)。

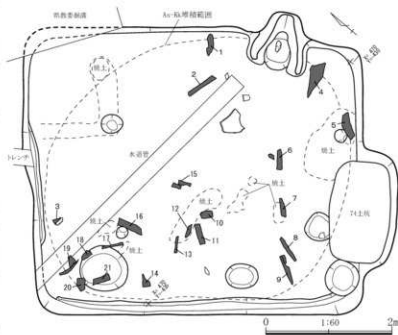
クリ材は、東日本を中心に縄文時代より建築部材として使用されていることが知られている(山田, 1993)。クリ材は、耐朽性が良く水湿に強いという特性を持ち、最近まで車両用材や家具のほか、土木材や建築材として利用されていた。当時の人々も、このようなクリ材の特性を理解して建築材として利用したことが考えられる。

#### 引用文献

植田弥生(2000) 愛宕山遺跡の第4号住居跡出土炭化材樹種同定。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「愛宕山遺跡」: 64-73, 群馬県埋蔵文化財調査事業団。

植田弥生(2008) 長野原一本松遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「長野原一本松遺跡(4)」: 269-275, 群馬県埋蔵文化財調査事業団。

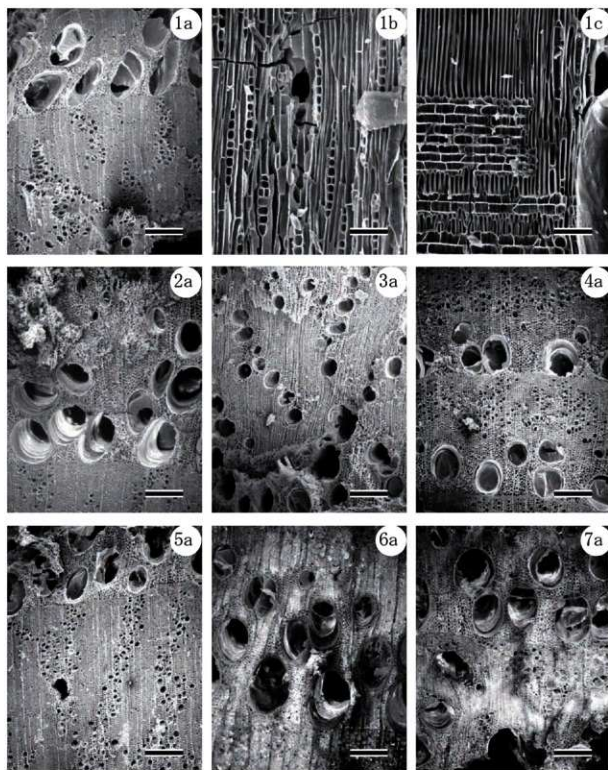
山田昌久(1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文庫集成・用材から見た人間・植物関係史。植生史研究 特別第1号, 242p。



第66図 6号住居跡炭化材出土図

第20表 6号住居跡出土炭化材の樹種同定結果一覧

No.	使用部材(可能性)	樹種	No.	使用部材(可能性)	樹種	No.	使用部材(可能性)	樹種
1	建築材	クリ	8	建築材	クリ	15	建築材	クリ
2	建築材	クリ	9	建築材	クリ	16	建築材	クリ
3	建築材	クリ	10	建築材	クリ	17	建築材	クリ
4	建築材	クリ	11	建築材	クリ	18	建築材	クリ
5	建築材	クリ	12	建築材	クリ	19	建築材	クリ
6	建築材	クリ	13	建築材	クリ	20	建築材	クリ
7	建築材	クリ	14	建築材	クリ	21	建築材	クリ



第67図 細谷B遺跡6号住居跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c, クリ (No.1) 2a, クリ (No.4) 3a, クリ (No.5) 4a, クリ (No.7) 5a, クリ (No.10) 6a, クリ (No.11)  
7a, クリ (No.13)

a: 横断面 (スケール=200  $\mu$  m) b: 放射断面 (スケール=50  $\mu$  m) c: 接線断面 (スケール=50  $\mu$  m)

## 第5章 調査の結果

### 1 北毛における住居跡出土炭化材について

細谷B遺跡の調査では平安時代の住居跡が11軒検出した。その中で4号・6号・8号・9号住居跡の床面付近では焼土の分布や炭化材が出土した。特に、6号住居跡においては住居床面より10cm程高い位置から放射状に炭化材が出土した。そこで他の住居跡より試料数が多く、まとまって検出したことから材の同定を行うことにより住居構築材が解明されることを期待し自然科学分析を実施した。

6号住居跡出土の炭化材21点について自然科学分析を行った結果すべてが「クリ」であることが判明した。(詳細は第4章理化学分析を参照)

編者はこれまでの群馬県内での発掘調査において住居構築材と考えられる炭化材は、クスギヤコナラが多いものと考えていた。しかし、今回の結果はクスギヤコナラを含まずクリのみの検出と予想に反していた。そこで、本遺跡出土例が特異な例であるのか周辺地域を比較するために、群馬県北部における住居跡出土炭化材同定分析を集成することとした。

群馬県は地形等の特徴から北部・西部・中部・東毛と分けられる。本地域は北部にあたり、吾妻郡と利根郡・沼田市がある。さらに比較として接する中部の渋川市を対象とする。吾妻地区は吾妻川の谷間の地域であり、渋川地区は関東平野に接する地域、利根沼田地区は高原地帯といえる。

なお、樹種は報告書に掲載された名称で分類・集成を行った。

#### 全体概要

管見に触れるところで分析軒数119軒の報告がなされている。各地区の分析軒数は、吾妻地区(長野原町・高山村・東吾妻町)13軒、渋川地区(渋川市)83軒、利根沼田地区(沼田市・みなかみ町)23軒である。時期は縄文時代前期から平安時代である。

炭化材の樹種はクリヤコナラ属(コナラ亜属コナラ節)ブナ科等60種にわたる。分析点数は1軒の住居跡で最少1点から最多246点を分析対象とするなど分析点数に大きな差がある。そこで検出軒数

(樹種を検出した軒数で、例えば分析1軒に5種を検出した場合は検出軒数5軒となる。)をもとに比較検討することとする。

検出樹種と検出軒数は、検出総点数2,018点、検出軒数354軒である。上位数量樹種は、クリ569点(51軒)、クスギ節が390点(44軒)、コナラ節275点(41軒)、ヤマグワ73点(17軒)、ケヤキ75点(16軒)、ニレ属48点(12軒)、カエデ属18点(12軒)と続く。

以下の表とグラフは、検出軒数と各地区各時代に共通する上位種類を、種類と検出軒数の割合で表したものである。

#### 検出上位量を樹種別で概観

「クリ」は、3地区すべての時代で検出した。

「クスギ節」は、吾妻地区で検出例は無い。

「コナラ節」は、利根沼田地区奈良平安での検出例は無い。

「ヤマグワ」は、吾妻地区・渋川地区の縄文、利根沼田地区の奈良平安での検出例は無い。

「ケヤキ」は、吾妻地区の縄文・弥生古墳、渋川地区縄文で検出例がない。

「ニレ属」は、吾妻地区では全時代で検出した。渋川地区縄文・奈良平安、利根沼田地区奈良平安で検出例が無い。

「カエデ属」は、吾妻地区縄文・弥生古墳、渋川地区縄文で検出例が無い。

その他に、イヌシデ節が吾妻地区弥生古墳・奈良平安でのみ検出したことや、カバノキ属が渋川地区と利根沼田地区の弥生古墳で検出例がある。

#### 地区別概要

分析樹種と検出軒数、検出軒数と分析軒数の割合について、各地区を概観する。検出軒数と分析軒数の割合は、1軒から複数の種類が検出することから1種類の検出を分析軒数で割ることにより、1種類を使用した軒数の割合が算出される。その算出方法は、例えば吾妻地区縄文～平安でクリが分析13軒中、11軒で検出されたことから $11/13 \times 100$ で%を出す)

吾妻地区「総数396点13軒、クリ179点11軒(85%)、ニレ属38点7軒(53%)、コナラ節35点7軒(53%)、イヌシデ26点5軒(38%)、ヤマグワ34点4軒(30%)」

渋川地区「総数1234点84軒、クスギ節354点39軒(46%)、コナラ節230点31軒(37%)、クリ342点28軒(34%)、ヤマグワ33点11軒(13%)、ケヤキ48点6軒(7%)」、

利根沼田地区「総数407点24軒、クリ78点13軒(54%)、ケヤキ24点8軒(33%)、ニレ属12点5軒(20%)」である。

縄文時代から平安時代の全体から見た特徴は、吾妻地区ではクリを使用した住居が80%を超え、渋川地区ではクスギ節・コナラ節のブナ科を使用する住居が80%を超え、利根沼田地区はクリを使用した住居とケヤキを使用した住居を合わせて80%を超えるというクリとブナの地域差が見られる。

吾妻地区、利根沼田地区の山間部ではクリの使用が多いのに対し、平野部に近い渋川地区はクスギ節やコナラ節のブナ科が多く用いられたことが見られる。

#### 各地区時代別

##### 「吾妻地区」

(縄文時代)3軒で分析を行った。検出した樹種は4種であった。表の「その他」に該当するのはタケ亜科1軒である。

(弥生古墳時代)4軒を対象ですべての住居からヤマグワが検出した。検出した樹種は18種である。表の「その他」には3軒からイヌシデ節、2軒からクスノキ科、ススキ属、タケ亜科、ミズキ属がある。(奈良平安時代)6軒で分析が行われ、23種が検出した。6軒全てからクリが検出した。表「その他」には、3軒からイヌシデ節、2軒からキハダ、クマシデ節、トネリコ属がある。

##### 「渋川地区」

(縄文時代)14軒で分析を行い、7種が検出した。クリは14軒中11軒で検出され、「その他」にクスギ節、コナラ節、アワブキ、オニグルミ、ケンボナシ属、広葉樹が各1軒ある。クリが突出している。

(弥生古墳時代)40軒の住居で分析が行われた。このうち2軒が弥生時代で他は古墳時代である。この地域は榛名山の噴火に伴い火山灰が厚く堆積し、当時の状況がそのまま残されている特徴があり、中筋遺跡での分析では、構築材の利用状況も見られている。他の地域、時代に比べ分析量も757点と全体の38%と多く、合わせ情報量も豊富であり、30種が検出している。特にクスギ節(22軒)とコナラ節(18軒)をあわせると分析軒数の40軒となる。次に広葉樹(14軒)クリ(9軒)、ヤマグワ(5軒)、カバノキ属(4軒)、アサダ、イヌシデ節、オニグルミ、コクサギ(各3軒)その他となる。

渋川地区内の分析は旧渋川市と旧北橋村で多くの軒数がなされている。注目したのは、旧渋川市中筋遺跡と旧北橋村北町遺跡である。中筋遺跡では同地区同時代の上位クスギ属・コナラ属・クリ3種が中筋では見られるが、北町ではクスギ属のみで、コナラ属・クリが見られない。これは地域差であろうか。(奈良平安時代)29軒で分析が行われ、前時代同様の種類が検出している。全時代同様にクスギ節(17軒)とコナラ節(12軒)を合わせると分析軒数となる。その他の種類には広葉樹(4軒)、クマシデ節、ヌルデ(各3軒)、エゴノキ属、カツラ、ササ類、モモ(各2軒)、その他となる。

##### 「利根沼田地区」

(縄文時代)分析報告は確認できなかった。

(弥生古墳時代)15軒で分析が行われ、16種が検出した。このうち弥生時代が10軒13種、古墳時代が5軒4種である。弥生時代の住居からクリ9軒とケヤキ6軒、カバノキ属3軒が検出するが、古墳時代の同種は0軒であった。また、古墳時代の住居からはニレ属4軒である。弥生時代はクリ、古墳時代はニレ属と分けられる。弥生時代ではその他にモミ属、ヤナギ属(各2軒)が検出した。

(奈良平安時代)8軒で分析が行われ、10種類が検出した。その他クルミ属、サクラ属、モミ属(各1軒)等が検出し、上位4種を合わせ全住居数となる。

時代と地域を見ると、(縄文時代)の全地区「クリ」、

(弥生古墳時代)の吾妻地区の「ヤマグワ」、渋川地区の「クヌギ節・コナラ節」、利根沼田地区の「ケヤキ」、(奈良平安時代)の吾妻地区の「コナラ節」、渋川地区の前時代同様種、利根沼田地区の「カエデ属」が上位にあることが注目される。

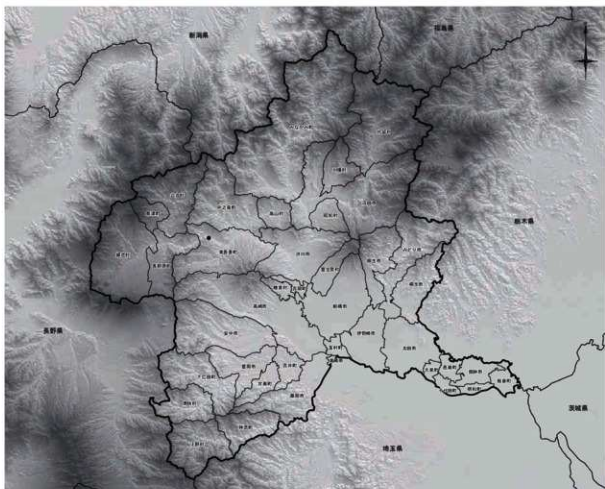
#### まとめ

以上群馬県北部における炭化材樹種同定の集成により、地区別・時代別に特徴があることが窺えた。本遺跡で行った6号住居跡炭化材樹種同定についても、集成結果のとおり「吾妻地区」(平安時代)の住居跡検出炭化材は「クリ」が分析軒数すべてで確認されるなど地域・時代の特徴を表していた。

また、編者のとらえていた「クヌギ」「コナラ」が「渋川地区」で主に検出したことは、平野部を中心に調査を行ってきたことによるものと考えられる。

群馬県北部について見る中だけでも、群馬県は関東平野と三国山脈等山間部のある自然に恵まれた地域であり、地形等様々な変化に富んだ地域であると感じさせられた。

今回は、群馬県北部に限り分析を行ったが、今後県内全域の住居跡出土炭化材の集成を行うことにより、より地域性が表れるものと考えられる。また、住居跡出土炭化材を中心に周辺環境についても合わせ資料収集を行い、地形変化の豊富な群馬県の各地区・各時代の特徴が概観できるか検証・検討を進めたい。



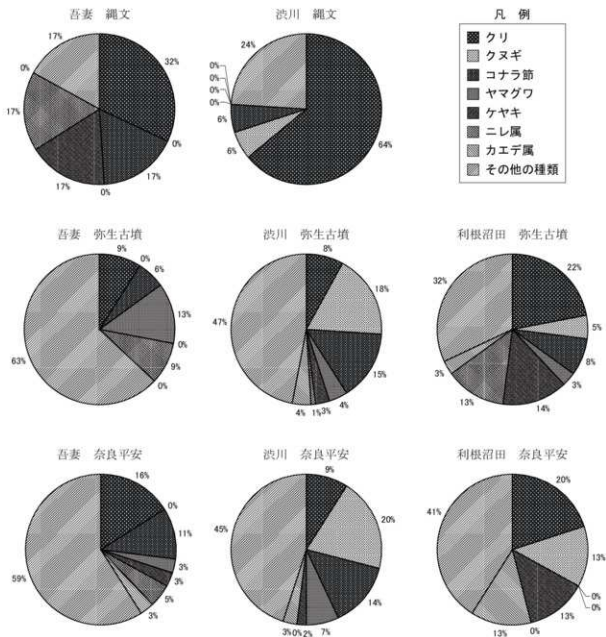
第68図 群馬県地域表示図

(国土地理院発行 数値地図50mメッシュ(標高)データを使用)



第21表 群馬県北部樹種同定

地区	時代	検出軒数	クリ	クスギ節	コナラ節	ヤマグワ	ケヤキ	ニレ属	カエデ属	その他	分析軒数
吾妻	縄文	6	2	0	1	0	1	1	0	1	3
	弥生古墳	32	3	0	2	4	0	3	0	20	4
	奈良平安	37	6	0	4	1	1	2	1	22	6
渋川	縄文	17	11	1	1	0	0	0	0	4	14
	弥生古墳	120	9	22	18	5	4	1	5	56	40
	奈良平安	87	8	17	12	6	2	0	3	39	29
利根沼田	縄文	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	弥生古墳	40	9	2	3	1	6	5	1	13	15
	奈良平安	15	3	2	0	0	2	0	2	6	8



第69図 地区・時代別樹種組成

## 2 北毛における奈良・平安時代の土器の様相についてはじめに

これまで吾妻郡内で各市町村の教育委員会や財団法人群馬埋蔵文化財調査事業団により多くの奈良・平安時代の遺跡を発掘調査してきた。しかし奈良・平安時代全体を通しての資料は、なかなかそろわなかった。今回細谷B遺跡の発掘により、東吾妻町でこれまで明らかでなかった平安時代10世紀後半の資料が追加された。そこでこれまでの資料を整理し、この地域の奈良・平安時代の土器の概要と変遷についてまとめてみることにした。

この地域の土器を理解するための地域として長野原町地域、東吾妻町・中之条地域に、旧月夜野町地域を加えた。旧月夜野町地域を加えた理由は、ここで生産された須恵器の多くがこの地域を含む県北部地域（長野原町・東吾妻町・中之条町・子持村・昭和村・沼田市等）に供給されていることによる。県内における奈良・平安時代の土器研究は、井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』第8号1978年以降多くの発掘調査の増加とともに多くの研究者により盛んに行われてきた。筆者もその頃から発掘に参加して、これまで報告書をまとめるにあたって、土器の様相について調べてきた（註1）。その延長上で今回この地域の土器の様相についてまとめてみた。

### 1 吾妻郡内の奈良・平安時代の遺跡分布

この地域では、各教育委員会の遺跡分布調査により、郡内の多くの遺跡が明らかになってきており、また各市町村教育委員会や財団法人群馬埋蔵文化財調査事業団により、多くの遺跡が発掘調査されている（註2）。それらの成果は群馬県史や報告書等で明らかにされている。群馬県教育委員会群馬県文化財情報システムによると、この地域の奈良・平安時代の遺跡概要は、以下の表の通りである。両時代で重複している遺跡が多いが、奈良時代が18遺跡で平安時代が153遺跡である。奈良時代の遺跡は中之条町と東吾妻町に集中しており、他の町村では長野原町に1遺跡報告されているだけである。（この

羽根尾II遺跡出土の遺物を見せていただいたが、奈良時代とは特定は出来なかった。）特に吾妻沢谷周辺から以西になると一軒の住居も確認されていない。集落の形成されている場所を調べてみると中之条町の名久田川流域や東吾妻町の泉沢川流域をはじめとする吾妻川に注ぐ小河川の流域で遺跡が形成されている。また長野原町では、水の確保が容易な楡木II遺跡や上ノ平遺跡や横壁中村遺跡等で、多くの集落が形成されている。

第22表 吾妻郡における奈良・平安時代の遺跡数

市町村名	奈良時代	平安時代	備考
高山村	0	1	新田西沢遺跡
中之条町	10	14	天台瓦窯含む
東吾妻町	7	22	金井庵寺含む
長野原町	1	106	奈良は羽根尾II
六合村	0	1	熊倉遺跡
草津町	0	1	井堀遺跡
嬭恋村	0	8	
合計	18	153	

## 2 東吾妻町と中之条町における奈良・平安時代の土器の様相

### (1) 奈良時代

〔土器師〕「暗文土器」は畿内の影響下で前代の7世紀から使われているほぼ平底の杯である。第2段階以降小型化して、暗文も少なくなっている。平安時代になると、他の杯類とともに使用されなくなるようである。「杯」は第1段階では球形であるが、第2段階になると球形がなだらかとなり、口縁部が立ち上がってくる。暗文土器と同様に平安時代になるとほとんど使用されなくなる。「皿」は、第1段階で出現し、第2段階では、小型化して平安時代になるとほとんど使用されなくなる。「壺」や「甕」は煮炊きや貯蔵に使用され盛んに使用される。壺も甕も従来の縦方向を中心としたヘラ削りから肩部に横方向の削りを用いるようになる。小型台付甕が第一段階で出土している。

〔須恵器〕杯類と蓋にほぼ限定され、煮炊きの

道具としては使用されていない。「杯」は、大小の2種類と底部に削りだしと貼り付けた付高台境の2種類がある。杯は、第一段階では、大きく底部はヘラ起こし後手元あるいは回転による再調整が行われている物が多い。第2段階になるとやや小型化して、底部は回転糸切り再調整が多くなる。「蓋」は第一段階では反りを持つが、第二段階では反りが無くなる。

## (2) 平安時代

(9世紀代) 土器師は煮炊き用の大小の甕が使われるが、奈良時代に使われていた杯境類は、高山村の「新田西沢遺跡」1号住居以外ではほとんど使われていない。須恵器の杯が多く使用される。土器師は煮炊きで使われている。

〔土器師〕「甕」は、肩部に斜め横方向のヘラ削りが多く見られるようになり、口縁部が「コ」の字状になる。第2段階になると「コ」の字状口縁の甕の他に、器形が似ているが整形の異なる甕が存在するようである。このように平野部で多く見られる「コ」の字状口縁の甕と同時に異なる甕が東吾妻町や長野原町では存在するようである。

〔須恵器〕(第1段階・9世紀前半)「杯」は、底部がやや厚く、底面は回転糸切り後再調整を行っていないものが多い。底径が比較的広く、底部中央が全体に厚く特に底部中央が、第2段階の杯と異なり薄くなっていないものが多い。

(第2段階) 杯の他に新たな器種として「皿」と「高台のついた境」が使われるようになる。「ロクロ甕」底部の回転糸切りを持つ小型の甕が使われるようになる。従来この甕はロクロ甕等呼称されてきた。須恵器工人の集落と考えられている藪田・藪田東遺跡で多く使用されていることや、群馬県では土器師の集団は、ロクロを使用しないと考えられていることより、この甕は須恵器工人の手により作成されたものとする。そこで土器師ではなく、須恵器の範疇として扱ってみた。「皿」この段階から次の第3段階まで、使われている。しかしこの地域では出土量が少ないようである。「境」と「杯」底径

が次第に小さくなり、器高が次第に高くなり、底部中央の器肉が薄くなる。「灰陶陶器」この段階から少しずつ出土するようになる。

(10世紀代) 土器師の甕が次第に須恵器の羽釜に、須恵器の杯や境が、次の第4段階から出現する土器質土器に取って代わられる。古代の土器文化が大きく変化する段階である。

〔土器師〕(第3段階) 土器師の甕が残るが、煮炊きの中心は羽釜が担うようになる。

〔須恵器〕(第3段階)「羽釜」煮炊きの道具として土器師の甕に代わるように羽釜が出現する。この羽釜には、大きく2つの分布地域がある。県北の利根郡・吾妻郡・旧子持村等を中心として分布する月夜型羽釜と渋川以南に分布する吉井型羽釜である。この2種類の羽釜は、分布域が異なっている場合が多く、同じ遺跡の同じ住居から両者がともに出土することはほとんど知られていなかった。しかし今回報告する細谷B遺跡や、長野原町の楡木II遺跡や上ノ平I遺跡では、同一遺跡でありしかも同一住居から両者が出土している。10世紀以降この地域の羽釜の生産と供給問題に新たな問題を突きつけている。「境」と「杯」焼成が酸化焙焼成に近い杯や境が使われる。境の高台の貼り付けたや口縁部の造り等、全体の造りや整形が雑になってくる。

(第4段階) 煮炊き用として、新たに通称「土釜」と呼称されている甕が新たに使われてくる。全体に雑な作りの物が多い。羽釜は、前段階同様に月夜野型と吉井型が共存して使われている。「土器質土器」雑な作りの須恵器杯や境が変わって、作りが非常に丁寧で器形は木器境に似た新たな土器が使われてくる。この土器類を土器質土器と呼称する。高台のついた境とつかない杯がある。基本的に酸化焙焼成である。

(11世紀代) 古代の土器文化が終焉を迎える段階である。県内の多くの地域ではこの第5段階で竪穴住居はほとんど造られなくなる。しかしこの地域では第6段階の11世紀後半と思われる段階の住居も存在しているようである。

(第5段階)「土釜」で口縁部が外反するものと直線のものが出土している。便宜的にA・B類に分けてみた。B類は整形方法が羽釜に似ている。「羽釜」は、月夜野型は出土しているが、吉井型は出していない。しかし出土遺跡が少ない事による傾向であり、今後の調査でこの段階でも吉井型羽釜の出土は確認されるものと考えたい。「土師質土器」は、高台を持つ埴は全く出していない。今後他の遺跡で少しは出するかもしれないが、基本的に高台を持つ埴は、使われなくなっている。土師質土器の浅い皿が次第に主流となり、次の第6段階では、この皿が出土するだけとなる。図には、参考資料として、浅間B軽石を覆土に持つ土坑から出土した前橋市鳥羽遺跡SK332の資料を掲載した。

### 3 長野原町における奈良・平安時代の土器の様相

この地域では、六合村・草津町・嬭恋村とともに奈良時代の住居は発掘されていない。平安時代9世紀後半段階から一気に多くの集落が形成されてくる。

平安時代(9世紀) [土師器] は、甕が多く出しているが、杯はほとんど出していない。この傾向は東吾妻町や月夜野町と共通している。[須恵器] は皿や埴・杯が使用されている。

平安時代(10世紀) [土師器] 「甕」は、「コ」の字状口縁の甕とそれ以外の甕の2種類が出土している。この傾向も東吾妻町の岡原2V1住居と共通している。この段階から羽釜が使われるようになる。東吾妻町の細谷B遺跡同様に月夜野型羽釜と吉井型羽釜が、同一住居から出土している。盛器として前半は「須恵器」の杯埴が使われ、後半になると「土師質土器」の埴や杯が使われる。「灰釉陶器」もこの段階から多く出する。

平安時代(11世紀) 他地域同様に堅穴住居がほとんど消えてしまう段階である。しかし、これまでの発掘経験から長野原町ではこの段階の集落は存在している。甕や皿と小さな杯の出土が中心である。最近の発掘調査例で、この段階の住居が次第に確認されるようになってきた。

### 4 月夜野町における奈良・平安時代の土器の様相

この地域は、群馬県北部における奈良時代以降最大の須恵器生産地である。8世紀中頃から後半の沢入A窯跡群に始まり、8世紀後半以降の洞A支群や10世紀の深沢B支群に見られるように多くの支群がある。また藪田東遺跡等の粘土探掘跡の存在や須恵器窯付近に多い溶解した製品を出土している藪田遺跡や藪田東遺跡がある。各段階の土器の説明は、東吾妻町と中之条町における奈良・平安時代の土器の様とはほぼ共通しているため、この地域の特色のみを説明する。

奈良時代(8世紀) 集落遺跡として良好な遺物が出土した村主遺跡の資料がある。この遺跡からは8世紀前半段階で大量の須恵器が出土している。杯は大小あり、底部はヘラ切後、ほとんどが手持ちあるいは回転により再調整されている。付け高台や削出高台大きな埴も多く出している。土師師では、一般的な甕の他に器内が厚く器表面を磨いた地域独特な甕が出土している。

平安時代(9世紀) 一般的な集落遺跡ではなく、須恵器生産に関連しているであろう、藪田遺跡の資料である。9世紀前半段階では、一般集落では多く見られない、底部端部でなく少し内側に高台の付く埴や、盤が多く出している。この段階から須恵器の甕が使われてくる。この甕は以後11世紀まで使用されてくる。奈良時代に多く見られた土師師の杯や埴はほとんど使われていない。その役割は大量に地元で生産存在している須恵器の杯埴が担っている。ただ、煮炊きするための製品は、土師師の甕が使われている。また酸化焰焼成で灰褐色や橙色をしたロクロで整形された甕がこの段階から使用されてきている。

土師師生産集団は、ロクロを群馬では最後まで使用しないと私は考えている。そこでこの甕は、須恵器生産集団が、土師師甕を補うために自ら生産したものとする。そこで須恵器の仲間として扱った。この甕は、県内では、10世紀以降羽釜が使われる段階で使用されてきている例が多いが、旧月夜野町

では、すでに9世紀前半の段階からロクロ整形の甕は造られ使用されている。おそらく須恵器生産集団が、土師器の甕を補うために生産を始めて、近隣の地域に供給していた物を、土師器甕がほとんど造られなくなる10世紀以降、羽釜の供給とともにともに須恵器生産集団が生産し供給しているものと考えたい。このロクロ整形の甕と羽釜との関係については、すでに三浦京子・黒沢るみ氏の指摘がある(註3)。

平安時代(10世紀)土師器は使われなくなり、須恵器が甕器と煮沸器の中心となる。灰軸陶器もこの段階から使用されてくる。この時期の最も特色として、羽釜の出現があげられる。これまでは、基本的に煮沸器は、火を直接受けても割れにくい土師器甕が、その役割を果たしてきた。しかし羽釜の出現により土師器甕の役割が羽釜に取って代わられた。その結果土師器は造られなくなっていく。土釜と呼ばれている甕が出土することもあるが、この地域では少ないようである。10世紀後半段階になると須恵器の雑な造りの甕器である埴や杯も造られなくなり、酸化焙焼成の丁寧な造りの土師質土器が使われにくくなる。

平安時代(11世紀)関東地方全体で、竪穴住居が造られなくなる段階である。それと同じように、なぜか土器もほとんど使われなくなる。従来の土師器や須恵器といった区分も出来なくなる。少数の発掘例から、羽釜と甕、甕器として皿が少量出土する。

#### おわりに

細谷B遺跡の出土遺物を見せいただき、この地域の奈良・平安時代の土器の様相を調べる機会をいただいた。しかし筆者の努力不足のために、土器を見ると行った基本的な作業をほとんどしないで、実測図の比較をすることによって、土器の特色を理解しようとした。そこに大きな無理がある。それを承知の上で、あえて今考えていることを記して、おわりとしたい。

- ① 筆者が経験してきた泉央や吉井町を中心とした、奈良・平安時代の土器の要素とこの東吾妻町

や長野原町地域の土器の基本的な土器の組み合わせや変化はほぼ共通する。

- ② 平安時代の東吾妻町の長野原町に近い三島地区と土器文化に共通点が見られる。それは煮沸具における、月夜野型羽釜と吉井型羽釜が同時に使用されていることと、ほぼ同じ時期の土師器の甕で、泉央部と共通する「コ」の字状口縁の甕と似ているが胎土や整形方法の異なる甕が使用されていることである(註4)。また、東吾妻町の細谷Bや長野原町の上ノ平I遺跡や楡木II遺跡では、吉井型羽釜と月夜野型羽釜を同一住居で使っている。このような地域は、県内でほとんど無い(註5)。
- ③ 吾妻溪谷周辺から、長野原町遺跡では、現在まで、奈良時代の住居は発掘調査されていない。平安時代の9世紀後半段階になると、長野原町で100軒以上発掘されている。また六合村や草津町でも発掘されている。弥生～奈良時代までほとんど集落が形成されなかった地域に一気に集落が造られてくる。この地域は平地が少なく水田面積は現在でも少ないことにより、新たな開発がどのような目的で行われたのであろうか。







































新たに造られた平安時代の集落からは、多くの灰軸陶器や皇朝十二銭の貞観永寶が出土している(註6)。他の出土遺物を見ても、高崎や前橋や月夜野町から出土する土器と、何ら変わることがない、当時の土器文化そのものである。











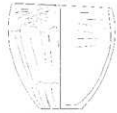










- ④ 平安時代になると、ほとんど集落が築かれていなかった長野原町に、同じ集落や同じ住居から分布圏の異なる月夜野型羽釜と吉井型羽釜が同時に使われている。県中央部や県北部からその地域の土器文化を持った人が、この地に一気にまとまって住むようになった。

以上の特色から、この地に一定の目的のために、平安時代中頃という限られた時期に、一気に県内から多くの人が移り住んだ事を示しているのではないだろうか。そこに政治的な力の存在を感じるとするには無理があるだろうか。

		土 師 器				
奈良時代	第1段階	<p>暗文土器</p>	<p>杯</p>	<p>皿</p>	<p>壺</p>	
	8C前半					
奈良時代	第2段階					
	8C後半					
		土 師 器				
平安時代	第1段階		<p>甕(コの字状口縁)</p>	<p>小型台付甕</p>		
	9C前半					
平安時代	第2段階	<p>甕</p>				
	9C後半					



























第70図 東吾妻町・中之条町における奈良・平安時代の土器編年図(1)



















		須 恵 器			
 小型甕 小泉宮戸13住5	杯(大)  小泉天神7住2  小泉天神7住3  小泉天神7住24	杯(小)  下沢高柳住2  小泉天神4住27  小泉天神4住26	削出高台・付高台境  小泉天神4住27  小泉天神4住26 	蓋  下沢高柳住1  小泉天神3住5	
 小泉宮戸24住3  前畑16住2  前畑16住3	 小泉天神25住9  前畑16住6  前畑16住9  前畑16住8	 前畑16住7	 小泉宮戸24住1		
須 恵 器					
		杯  前畑3住2  前畑3住1  前畑3住3  前畑5住2  前畑5住1			
ロク口甕  上郷岡原(2) V1住15  上郷岡原(2) V1住16	皿  下沢高柳住14	埴  小泉宮戸7be住1  上郷岡原(2) V1住8  小泉宮戸7be住3  上郷岡原(2) V1住6	 小泉宮戸7be 住4  上郷岡原(2) V1住11  上郷岡原(2) V1住12  上郷岡原(2) V1住9	灰釉陶器  上郷岡原(2) V1住1	

		土 師 器		須 恵 器		羽 釜	
平安時代	第3段階 10C前半	甕(コの字状口縁)  細谷84住4	小型甕  細谷84住3	月夜野型以外  細谷84住9	月夜野型  細谷84住5		
	第4段階 10C後半	土釜A  細谷86住3		 細谷89住8  細谷83住1	 細谷89住9		
	第5段階 11C前半	小泉宮F6住1  小泉宮F6住2 	土釜B  五十嵐2次8住1  小泉宮F6住3	 五十嵐2次4住1  小泉宮F6住4  細谷81住8	小型羽釜  細谷81住7		
	第6段階 11C後半	編年指標 奈良時代 平安時代	第1段階 須恵器 第2段階 須恵器 第1段階 須恵器 第2段階 須恵器 第3段階 須恵器 第4段階 須恵器 第5段階 須恵器 第6段階 須恵器	坏底部へラ切再調整 坏底部糸切再調整 坏底部の器肉の厚さが一定 坏底部の器肉中央部が薄くなる 羽釜の出現 土師質土器の出現 土師質土器皿の出現 土師質土器浅い皿主体	参考資料      熊鷹市島右衛門SK32		





































第71図 東吾妻町・中之条町における奈良・平安時代の土器編年図(2)



須 惠 器		灰 軸 陶 器
<p style="text-align: center;">埴</p>  <p style="text-align: center;">埴</p> 		
<p style="text-align: center;">(土師質土器)</p> <p style="text-align: center;">埴</p>  <p style="text-align: center;">埴</p>     		
<p style="text-align: center;">瓶</p> 	<p style="text-align: center;">皿</p>  <p>小泉宮戸6住5</p>  <p>細谷B11住1</p>  <p>五十嵐2次8住7</p>  <p>五十嵐2次4住9</p>  <p>五十嵐2次4住8</p>  <p>五十嵐2次8住6</p>	 <p>五十嵐2次8住3</p>  <p>五十嵐2次8住2</p>  <p>五十嵐2次4住4</p>  <p>五十嵐2次4住3</p>  <p>五十嵐2次4住5</p>
	 <p>小泉宮戸21住1</p>  <p>小泉宮戸21住2</p>  <p>前塚14住2</p>  <p>前塚9住2</p>  <p>前塚14住1</p>	

























































		土 師 器		須 恵 器		
平安時代	第2段階 9C後半	甕(コの字状口縁)  検木Ⅱ24位12  上/平1 (0)8位6		小型甕  上/平1 (0)8位3  検木Ⅱ24位15		
	第3段階 10C前半	甕  検木Ⅱ69位3  検木Ⅱ69位4  上/平1 (0)1位13  上/平1 (0)1位14		羽釜 月夜野型以外  上/平1 (0)1位11  上/平1 (0)13位12		月夜野型  上/平1 (0)4位3  上/平1 (0)4位2  上/平1 (0)13位15
	第4段階 10C後半			 検木Ⅱ16位7  検木Ⅱ16位5  検木Ⅱ16位8		
第5段階 11C前半			甗  長野原一本丸5-68位2  長野原一本丸5-68位1			



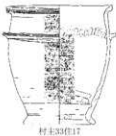







第72図 長野原町における平安時代の土器編年図

須 恵 器			灰 軸 陶 器
 <p>皿 検本Ⅱ30作4</p>	 <p>検本Ⅱ24作6</p>  <p>検本Ⅱ24作7</p>  <p>上/平Ⅰ(Ⅰ)38作1</p>  <p>上/平Ⅰ(Ⅰ)38作2</p>	 <p>検本Ⅱ24作1</p>  <p>検本Ⅱ24作3</p>  <p>検本Ⅱ24作2</p>  <p>検本Ⅱ24作5</p>	
 <p>上/平Ⅰ(Ⅰ)13作7</p>	 <p>上/平Ⅰ(Ⅰ)1作4</p>  <p>上/平Ⅰ(Ⅰ)1作5</p>  <p>上/平Ⅰ(Ⅰ)13作10</p>  <p>上/平Ⅰ(Ⅰ)1作9</p>	 <p>上/平Ⅰ(Ⅰ)1作1</p>  <p>上/平Ⅰ(Ⅰ)1作2</p>  <p>上/平Ⅰ(Ⅰ)13作6</p>  <p>検本Ⅱ69作1</p>	 <p>上/平Ⅰ(Ⅰ)13作1</p>  <p>上/平Ⅰ(Ⅰ)13作2</p>  <p>上/平Ⅰ(Ⅰ)13作3</p>  <p>上/平Ⅰ(Ⅰ)13作4</p>
 <p>ロクロ甕 検本Ⅱ69作2</p>	 <p>耳皿 検本Ⅱ69作6</p>	<p>(土師質土器)</p>  <p>検本Ⅱ16作4</p>  <p>検本Ⅱ16作3</p>  <p>検本Ⅱ16作1</p>  <p>検本Ⅱ16作2</p>	
 <p>長野原一本丸5-29作5</p>	 <p>長野原一本丸5-29作3</p>  <p>長野原一本丸5-29作7</p>  <p>長野原一本丸5-29作2</p>	 <p>長野原一本丸5-68作3</p>  <p>長野原一本丸5-68作5</p>  <p>長野原一本丸5-29作4</p>  <p>長野原一本丸5-29作1</p>	

		土 師 器						
		暗文土器	内黒土器	坏	皿	壺	甕	
奈良時代	第1段階							
	8C前半							
	第2段階							
		8C後半						
平安時代		第1段階						
	第2段階							
		9C後半						

第73図 旧月夜野町における奈良・平安時代の土器編年(1)

在地発		須 恵 器				
		坏(大)	坏	削出高台埴	付高台埴	蓋
 <p>村土60住44 村土11住33</p>	 村土27住29	 村土27住26	 村土11住21	 村土11住28	 村土27住20	
	 村土60住30	 村土27住27	 村土11住23	 村土27住34	 村土27住15	
 <p>村土27住42 村土34住20</p>	 村土60住29	 村土11住17	 村土27住33	 村土11住11		
	 村土60住27	 村土27住32	 村土60住26	 村土11住25	 村土27住24	
 <p>畿田5-42-126</p>	 畿田5-3住26	 村土26住12	 村土26住13	 村土34住9	 村土26住11	
	 畿田5-5住8	 畿田5-3住22	 畿田5-5住14	 畿田5-5住23	 村土34住6	 畿田5-5住4
	 畿田5-42-15	 畿田5-42-16	 畿田5-5住28	 畿田5-3住15	 畿田5-5住1	 畿田5-5住2
	 畿田5-42-1-10	 畿田5-42-1-16	 畿田5-42-1-18	 畿田5-5住3	 畿田5-5住3	
 畿田東3住34	 畿田東3住39	 畿田東3住66	 畿田東3住73			
 畿田東3住36	 十二原2住4	 畿田東3住74				
 畿田東3住22	 十二原2住3	 畿田東3住75				
 畿田東3住72	 畿田東3住77					

		須 恵 器		
第3段階	10C前半	羽釜(月夜野型)  巖田 83作64 村主33作16	 巖田 83作50	 村主33作17
		 巖田 83作49		
第4段階	10C後半	 村主33作33	ロクロ焼  村主33作17	
		 村主33作42	 村主33作31	
第5段階	11C前半	 大原2作1	土釜B  大原2作2	





























第74図 旧月夜野町における奈良・平安時代の土器編年(2)

(註1) 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団刊行の『清里・陣馬遺跡』1981、『大原Ⅱ・村主遺跡』1986、『矢田遺跡VI・VII』1996、1997、『荒砥荒子遺跡』(前橋市)1998等の中で、古墳時代から平安時代の土器について調べ、編年表を提示してきた。

(註2) この地域で最も古い発掘調査は、昭和36年～39年の三次にわたる群馬大学尾崎研究室により実施された「熊倉遺跡」があげられる。その後昭和57年から59年にかけて六合村教育委員会による三次の発掘調査が行われた。「出土遺物からみると、

集落の出現は9世紀中頃であり、ほぼ9世紀いっばいで終息したとみられる。」(井上唯雄 群馬県史資料編2昭和61年)。「井堀遺跡」は昭和48年草津町教育委員会が群馬大学の協力で9世紀中頃から後半段階の堅穴住居1軒を発掘調査した。両遺跡とも県内においては、比較的古い段階での貴重な調査例である。

(註3) 三浦京子・黒沢はるみ「平安時代の煮沸土器について」『研究紀要6』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1989の中で、「ロクロ整形の甕と

			灰軸陶器
	埴  畷田 603住29  畷田 603住26  畷田 603住27  村主33住12	坏  畷田 605住1  畷田 605住4  村主21住3  村主33住3	 村主21住10  村主21住8  村主21住14  村主21住11
(土師質土器)			
耳皿  村主3住11  村主17住25	埴  村主3住10  村主3住9  村主17住19  村主17住21	坏  村主3住4  村主3住2  村主17住1  村主17住3	 村主3住12  村主3住14  村主3住15  村主17住26  村主17住29

羽釜は胎土・整形に共通点があり、同一の生産体制によって生み出された可能性がある・・・と指摘されている。

(註4)「コ」の字状口縁の甕と胎土や色は近いが、器形がやや異なり、コ字状口縁の甕は、肩部に横方向のヘラ削りを持つが、この削りが、縦方向で、胴部から頸部まで及んでいるものが多いようである。他に長野原町『向原遺跡』のD区8号住居-8や9号住居-5の甕や『上ノ平I遺跡』の22号住居-12・13の甕等がそれに該当する。実態は不明で

あり、今後の検討が必要であろう。

(註5) 中沢 悟「月夜野型羽釜の様相と月夜野古窯跡群」『大原II遺跡・村主遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986

板岡正信「月夜野型羽釜の生産と流通」『研究紀要』21 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003

(註6) 中沢 悟「長野原上ノ平I遺跡出土の貞観永寶と県内出土の皇朝十二銭について」『群馬文化』289 2007

## 参考文献

- 吉妻教育会「群馬県吾妻郡誌」1936  
 ○岩島村誌編集委員会「岩島村誌」1971  
 ○群馬県史編さん委員会「群馬県史 資料編2 原始古代2」群馬県 1981  
 ○群馬県史編さん委員会「群馬県史 資料編3 原始古代3」群馬県 1981  
 ○丸山不二夫「全国に広まった上州岩島の精華を辿って」2002

## 【周辺の遺跡】

- 群馬県教育委員会「群馬県文化財情報システム」  
 ○群馬県教育委員会「群馬県中世城館跡」  
 ○(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第349集「久々戸遺跡(2)・中郷II遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡」  
 ○(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第410集「上郷原遺跡(1)」2007  
 ○(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第438集「上郷原遺跡(2)」2008  
 ○(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第379集「上郷B遺跡・巖石A遺跡・二反沢遺跡」2006  
 ○吾妻町教育委員会「前畑遺跡」吾妻町埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 1998

## 【炭化材分析】

- 群馬県「群馬県動物誌」1985  
 ○群馬県「群馬県植物誌 改訂版」1987  
 《吾妻地区》  
 東吾妻町  
 ○(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第363集「霧田遺跡」2006「樹種同定」(パレオ・ラボ) 植田弥生(パレオ・ラボ) p82-  
 長野原町  
 ○長野原町教育委員会「暮坪遺跡」長野原町埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 2001「暮坪遺跡出土炭化材の樹種同定」植田弥生(パレオ・ラボ) p24-  
 ○(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第389集「下原遺跡II」2007「下原遺跡48区1号堅穴住居出土炭化材の樹種」植田弥生(パレオ・ラボ) p162-  
 ○(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第408集「長野原一本松遺跡(2)」2007「長野原一本松遺跡5-10号住居跡から出土した炭化材の樹種」植田弥生(パレオ・ラボ) p307-  
 ○(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第441集「長野原一本松遺跡(1)」2008「長野原一本松遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定」植田弥生(パレオ・ラボ) p269-  
 ○(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第432集「榎木II遺跡」榎木II遺跡の号堅穴住居跡(平安時代)出土炭化材の樹種同定」植田弥生(パレオ・ラボ) p210-

## 高山村

- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第334集「新田西沢遺跡・新田平林遺跡」2003「新田西沢遺跡1号住居跡出土炭化材の樹種同定」株式会社パレオ・ラボ 植田弥生 p141-

## 《利根沼田地区》

## 沼田市

- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第147集「下川田下原遺跡・下川田平井遺跡」1993「下川田平井遺跡出土炭化材樹種同定」藤根久(パレオ・ラボ) p301-  
 ○(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第286集「石壘遺跡(沼田チェンバース地点I)」2001「炭化材の樹種同定」株式会社パレオ・ラボ p176-  
 ○白沢村教育委員会「寺谷II遺跡」2003「寺谷II遺跡から出土した柱根の樹種同定」三村昌史(パレオ・ラボ) p43-

## 川場村

- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第351集「生品西浦遺跡」2005「生品西浦遺跡における樹種同定」株式会社古環境研究所 p172-

## 昭和村

- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「糸井宮前遺跡I」関越自動車道(新高線)地埋蔵文化財調査事業団調査報告書第8集 1985「炭化した木材片の樹種同定」北海道開発記念館三野紀雄 p287-

## みなかみ町

- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第353集「東峰須川雷電遺跡」2005「樹種同定」株式会社古環境研究所 p51-

## 《渋川地区》

## 渋川市

## (旧渋川市)

- 渋川市教育委員会「中村遺跡」関越自動車道(新高線)地埋蔵文化財調査事業団調査報告書 1986「自然化学分析3材同定」パリーノ・サーヴェイ株式会社 p42-  
 ○渋川市教育委員会「行幸山遺跡」渋川市発掘調査報告書第12集 1987「材(炭化材)同定報告」パリーノ・サーヴェイ株式会社 p565-  
 ○渋川市教育委員会「中筋遺跡第2次」渋川市発掘調査報告書第18集 1988「中筋遺跡出土炭化材の樹種」高橋利彦(パリーノ・サーヴェイ株式会社) p42-  
 ○渋川市教育委員会「中筋遺跡第7次」渋川市発掘調査報告書第34集 1993「渋川市中筋遺跡(第7次調査)の自然科学分析調査2.b)住居の構築材に関する調査」パリーノ・サーヴェイ株式会社(橋本真紀夫・馬場健司・田中義文、高橋敏) p40-  
 ○渋川市教育委員会「奈良時代焼失住居上り出土した炭化材の樹種同定」パリーノ・サーヴェイ株式会社(橋本真紀夫・馬場健司・中根秀二・高橋敏・田中義文) p731-  
 ○渋川市教育委員会「中筋遺跡第8次 第9次」渋川市発掘調査報告書第45集 1995「構築材の材種調査」橋本真紀夫・高橋敏・馬場健司・田中義文(パリーノ・サーヴェイ株式会社) p73-  
 ○渋川市教育委員会「行幸山畑中B遺跡」渋川市発掘調査報告書第48集 1995「33号住居跡における住居構築材の材種選択」高橋敏・馬場健司・橋本真紀夫(パリーノ・サーヴェイ株式会社) p35-  
 ○渋川市教育委員会「田中遺跡」渋川市発掘調査報告書第56集 1997「田中遺跡から出土した炭化材の樹種」高橋敏・辻本裕也・橋本真紀夫(パリーノ・サーヴェイ株式会社) p37-(田子持村)  
 ○(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第160集「白井遺跡群-集落編I-(白井二位屋遺跡)」1994「白井二位屋遺跡住居出土炭化材の樹種同定」藤根久(パレオ・ラボ) p249-  
 ○(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第202集「白井遺跡群-集落編II-(白井南中道遺跡)」1996「白井南中道遺跡出土炭化材の樹種同定」藤根久(パレオ・ラボ) p392-  
 ○(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第364集「中郷忠久保遺跡」2006「中郷忠久保遺跡II区堅穴住居跡出土炭化材の樹種同定」植田弥生(パレオ・ラボ) p273-  
 ○(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第405集「吹屋遺跡」2007「吹屋遺跡3号住居出土炭化材の樹種同定」株式会社パレオ・ラボ p219-(田赤城村)  
 ○(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「勝保沢中ノ山遺跡I」関越自動車道(新高線)地埋蔵文化財調査事業団調査報告書第22集 1988「群馬県勝保沢中ノ山遺跡出土炭化材の樹種」鈴木三男(金沢大)・城塚修一(大阪市大) p180-



- 赤城村教育委員会「榑舟戸遺跡」赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書第13集1999「榑舟戸遺跡出土炭化材の樹種同定」株式会社古環境研究所 p66-
- 赤城村教育委員会「見立筆遺跡Ⅱ・滝沢日向塚遺跡」赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書第20集2003「見立筆遺跡Ⅱにおける樹種同定」株式会社古環境研究所 p249-
- 赤城村教育委員会「宮田諏訪原遺跡Ⅰ・Ⅱ」赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書第30集2005「宮田諏訪原遺跡における樹種同定」株式会社古環境研究所 p209-
- (旧北橋村)
- 北橋村教育委員会「分那八崎遺跡」関越自動車道(新函線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書1986「炭化材及び炭化種子の同定」パリノ・サーヴェイ株式会社
- 北橋村教育委員会「芝山遺跡」北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書第11集1993「芝山遺跡 炭化材・種子同定」パリノ・サーヴェイ株式会社 p164-
- 北橋村教育委員会「北町遺跡・田ノ保遺跡」北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書第18集1996「北町遺跡から出土した炭化材・種実遺体の同定」高橋敏・田中義文(パリノ・サーヴェイ株式会社) p347-
- 北橋村教育委員会「道訓前遺跡」北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書第30集2001「道訓前遺跡 放射性炭素年代測定と炭化材・種実遺体同定」パリノ・サーヴェイ株式会社 p151-
- 【土器編年】
- 群馬県「群馬県史研究」第8号1987
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「研究紀要6」1989
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「研究紀要21」2003
- 「群馬文化289」2007
- 《東吾妻町》
- 吾妻町教育委員会「郷原遺跡」1885
- 吾妻町教育委員会「前畑遺跡」
- 吾妻町教育委員会「諏訪前遺跡Ⅰ」吾妻町埋蔵文化財発掘調査報告書第14集2003
- 吾妻町教育委員会「小泉宮戸遺跡」吾妻町埋蔵文化財発掘調査報告書第19集2003
- 吾妻町教育委員会「小泉天神遺跡」吾妻町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集2004
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「上郷B遺跡・廣石A遺跡・二反沢遺跡」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「上郷同原遺跡(1)」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「上郷同原遺跡(2)」《中之条町》
- 中之条町教育委員会「大塚遺跡群五十嵐遺跡」中之条町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集1984
- 中之条町教育委員会「大塚遺跡群五十嵐遺跡第2次」中之条町埋蔵文化財発掘調査報告書第5集1985
- 中之条町教育委員会「平遺跡群下平遺跡」中之条町埋蔵文化財発掘調査報告書第8集1986
- 中之条町教育委員会「平遺跡群下反高遺跡・菅田遺跡」中之条町埋蔵文化財発掘調査報告書第9集1988
- 中之条町教育委員会「横尾地区遺跡群Ⅱ 中沢遺跡A区・七日市遺跡B区」中之条町埋蔵文化財発掘調査報告書第13集1995
- 中之条町教育委員会「横尾地区遺跡群Ⅲ 中沢遺跡C区・柳瀬遺跡B区」中之条町埋蔵文化財発掘調査報告書第14集1996
- 中之条町教育委員会「長岡Ⅱ遺跡」中之条町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集1996
- 中之条町教育委員会「長岡Ⅰ遺跡」中之条町埋蔵文化財発掘調査報告書第16集1996
- 中之条町教育委員会「横尾地区遺跡群Ⅳ」中之条町埋蔵文化財発掘調査報告書第17集1997
- 《長野県町》
- 長野県町教育委員会「向原遺跡」長野県埋蔵文化財調査報告書第5集1996
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第287集「長野一本松遺跡(1)」2002
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第303集「八ッ場ダム発掘調査集成(1)」2002
- 長野県町教育委員会「林宮原遺跡Ⅱ」長野県埋蔵文化財調査報告書第14集2004
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第356集「川原湯沼遺跡(2)」2005
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第388集「立馬Ⅰ遺跡」2006
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「下原遺跡Ⅱ」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「長野一本松遺跡(2)」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「榑木Ⅱ遺跡」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第433集「長野一本松遺跡(3)」2008
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第440集「上の平遺跡(1)」2008
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第461集「長野一本松遺跡(5)」2009
- 《碓志村》
- 碓志村教育委員会「東平遺跡調査報告書」今井東平遺跡調査報告書第2報1999
- 碓志村教育委員会・千保前田遺跡調査委員会「千保前田Ⅰ遺跡・千保前田Ⅱ遺跡」1999
- 碓志村教育委員会・千保前田遺跡調査委員会「千保前田Ⅲ遺跡」1999
- 碓志村教育委員会・千保前田遺跡調査委員会「千保前田Ⅳ遺跡」2000
- 《草津町》
- 草津町教育委員会「井屋遺跡発掘調査報告」1974
- 《六合村》
- 六合村教育委員会「熊倉遺跡」1983・1984
- 《高山村》
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「新田西沢遺跡・新田平林遺跡」
- 《みなかみ町》
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書「十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡」1982
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書「藪田東遺跡」1982
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書「藪田遺跡」1985
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書「大原Ⅱ遺跡・村上遺跡」1986
- 《その他市町村》
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書「清里・陣馬遺跡」1981
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書「矢田Ⅵ・Ⅶ遺跡」1996
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書「鳥羽遺跡」1992
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書「荒砥荒子遺跡」2000

## まとめ

細谷B遺跡は、群馬県吾妻郡東吾妻町大字三島に所在する。本遺跡の発掘調査は八ツ場ダム建設に伴う一般県道改築工事による調査である。本地域は吾妻川右岸の段丘上に立地し、南側は標高900mの山裾がせまっている。

調査区は段丘面の低地部と山裾のわずかな平坦面の台地部の2地点である。調査では、便宜的に低地部をⅠ区、台地部をⅡ区と呼称して行った。

Ⅰ区では、天明三年の浅間山噴火に伴う泥流が厚く堆積していた。特に本調査区は泥流の末端部分がどのように堆積しているかを調べることが一つの目的であった。調査の結果、3層に分かれることが判明した。低い部分は砂粒が堆積し下層に鉄分層が見られた。中層は30cm大の礫を含み、上層は30～100cm大の礫を含む砂礫層であった。泥流下からは畑跡が6区画検出した。区画間には道と段差によりなされていた。耕地は南側山裾からのなだらかな傾斜面にあり、等高線に沿うように耕作がなされていた。畝幅から近接する「上郷原遺跡」と同様であることから当地の特産品である麻の栽培を行っていたものと考えられる。また、同時代の遺構としてⅡ区では同噴火に伴うAs-A軽石（直径1cm程）を充填している土坑が検出した。古文書によると覆われた畑の復旧のために下層の土を得るために溝状に掘り、新しい土を得た後に火山灰を充填する方法が記されており本土坑はそれを検証したものとなる。

Ⅱ区では、その他に平安時代の住居跡11軒と土坑96基、溝1条が検出した。住居跡は平安時代10世紀代の構築である。覆土にAs-Kk(1,28年)の堆積が見られたり、羽釜が出土したりしていることから時期を確定した。この時期の集落は、東吾妻町ではこれまで検出例がなく、特に吾妻川対岸の「前畑遺跡」や近接する「上郷B遺跡」「上郷原遺跡」等の前後の時代をつなぐ遺跡として注目される。検出した11軒は、10世紀前半が3軒、10世紀後半が6軒、11世紀前半が2軒である。住居跡の特徴としては、石組カマドであることと、出土遺物がカマド

周辺のみであることがあげられる。よって出土遺物は、煮炊きのため土器が中心で盛器の土器は少なく全体的に遺物出土量が少ないことも一つの特徴である。カマドは南東及び東側壁に付設される。礫は左右の袖部及び壁面に立てるように設置され、焚き口部の天井石が残るカマドも見られた。また、燃焼部天井石は板状の礫が使用されカマド周辺に散布していた。この天井石には緑色した礫が使われていた点は興味深いものである。カマド内部には支脚石も残存していた。出土遺物について群馬県北部の幅年を行った結果、本遺跡出土の羽釜は月夜野型と吉井型が混在すること、甕に特徴があることなど吾妻地域特有の可能性が示唆された。また、住居跡出土の炭化材について自然科学分析を行った結果すべて「クリ」であることについても県北部を集成した結果吾妻地域の特徴であることが伺えた。

土坑は96基検出し、そのうち67基が陥穴と考えられる。この陥穴の1基(74号土坑)は10世紀後半の住居跡を掘り込み、さらに住居跡覆土に見られたAs-Kkが上層の覆土に見られたことから、土坑構築時期を平安時代と限定することができた。また、調査区中央では表土下の凹み部分にAs-Kkの堆積がみられ、下層に陥穴が検出した。しかし、これらのことから陥穴すべてが平安時代の構築とは、周辺から縄文土器の出土もあることから一概には言えない。また、陥穴壁面のローム層中に厚3cm程の筋状の跡があり板状の掘削工具痕と思われる跡が見られた。陥穴の形状は底面が長方形であり、確認面では長方形や楕円形を呈している。規模の平均は長軸1.7m、短軸0.9m、深さ1.0mであった。その配置には一部直線的に見られるものもあるが、規則性は認められず、大きく等高線に沿うようにあるものと、等高線に対し斜にあるものに分けられる。

本調査により、当地域の平安時代集落変遷や、陥穴の構築時期、天明三年浅間山噴火に伴う泥流のあり方等に重要な資料を得ることができた。

最後に本調査・整理にご協力をいただいた地元の方々を始め多くの方に謝意を記す。

# 写 真 图 版





細谷B遺跡遠景(北)



I区調査前近景(東)



I区調査前近景(西)



II区調査前近景(東)



II区調査前近景(西)

## PL.2



1号住居跡(北)



1号住居跡カマド(北)



3号住居跡(北西)



3号住居跡礎散布(北西)



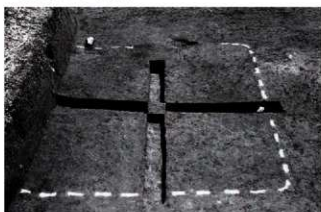
4号住居跡(北西)



4号住居跡カマド(北西)



4号住居跡カマド(北西)



5号住居跡(北西)



6号住居跡(南西)



6号住居跡確認面(南西)



6号住居跡炭化物(南西)



6号住居跡カマド(南西)



6号住居跡カマド(南西)



6号住居跡土層(南)



7号住居跡(北西)



8号住居跡(南西)

PL.4



8号住居跡カマド(南西)



8号住居跡土坑(南東)



9号住居跡(南西)



9号住居跡カマド(南西)



9号住居跡カマド(南西)



10号住居跡(北西)



11号住居跡(北)



11号住居跡カマド(北)





11号住居跡カマド(北)



12号住居跡(北西)



II区西侧西(南東)



II区西侧東(北西)



II区中央西(北西)



II区中央東(北西)



II区東(北西)



II区東遺構確認(北西)

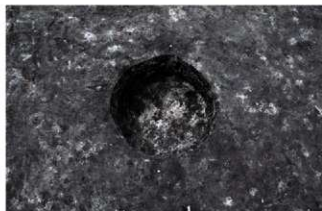
PL.6



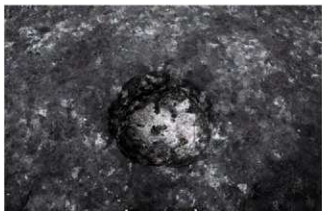
1号土坑(東)



2号土坑(南)



4号土坑(南西)



5号土坑(南東)



6号土坑(北)



12号土坑(南西)



14号土坑(南西)



16号土坑(東)



17号土坑(南)



18号土坑(南)



20号土坑(西)



21号土坑(南)



23号土坑(南西)



24.25.26号土坑(西)



28号土坑(南西)



29号土坑(東)

PL.8



30号土坑(南)



31号土坑(北西)



32号土坑(南東)



33号土坑(西)



34号土坑(南西)



38号土坑(南西)



39.40号土坑(東)



41.42.48号土坑(北東)



43号土坑(南西)



44号土坑(北西)



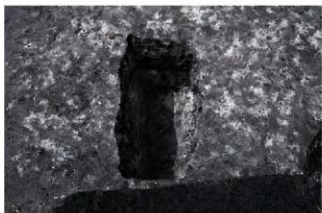
45.46号土坑(北東)



47号土坑(北東)



49号土坑(北)



50号土坑(南東)



51号土坑(西)



52号土坑(西)



PL.10



54号土坑(西)



55号土坑(東)



56号土坑(北東)



58号土坑(西)



59号土坑(東)



60号土坑(南西)



63号土坑(南)



64.65号土坑(南西)



66号土坑(北)



67号土坑(北東)



68号土坑(北)



69号土坑(北)



71号土坑(南)



72号土坑(北西)



74号土坑(北)



74号土坑土層(南西)

PL.12



73号土坑土层(南西)



75号土坑(南)



76号土坑(北東)



77号土坑(南)



78号土坑(南西)



80号土坑(南)



81号土坑(東)



82号土坑(北)





83号土坑(東)



84.103号土坑(南)



85号土坑(南)



86号土坑(南)



87号土坑(北)



88号土坑(南)



89号土坑(北)



90号土坑(南)

PL.14



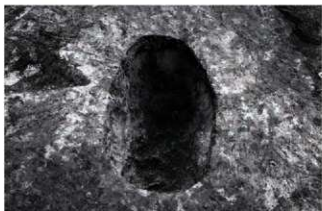
91号土坑(東)



92号土坑(南)



93号土坑(南)



94号土坑(東)



95号土坑(北)



96号土坑(西)



97号土坑(西)



98号土坑(北東)



99号土坑(東)



100号土坑(東)



101号土坑(北)



102号土坑(南)



104号土坑(東)



105号土坑(北西)



106号土坑(北東)



107.108号土坑(南西)

PL.16



109号土坑(北東)



111号土坑(北東)



112号土坑(南西)



114号土坑(南西)



115号土坑(北西)



116号土坑(北西)



1号集石(北西)



2号集石(南西)





1号溝(南西)



1号溝(北東)



1号溝土層(北東)



1号溝土層(南西)



1区西側As-A下畑(東)



1区西側As-A下畑(北)



1区東側As-A下畑(西)



1区東側As-A下畑(北)

# PL.18



As-A 下畑 1 区画 (北)



As-A 下畑 2 区画 (東)



As-A 下畑 3 区画 (北)



As-A 下畑 4 区画 (北)



As-A 下畑 5 区画 (東)



As-A 下畑 6 区画 (西)



As-A 下畑 4・5 区画境 (北)



As-A 下畑 5・6 区画境 (北)



4号住居跡作業(北西)



30号土坑作業(南)



83号土坑作業(東)



II区西侧西作業(南)



I区As-A下畑2区画作業(西)



I区As-A下畑5区画作業(西)



II区現地見学会(南)



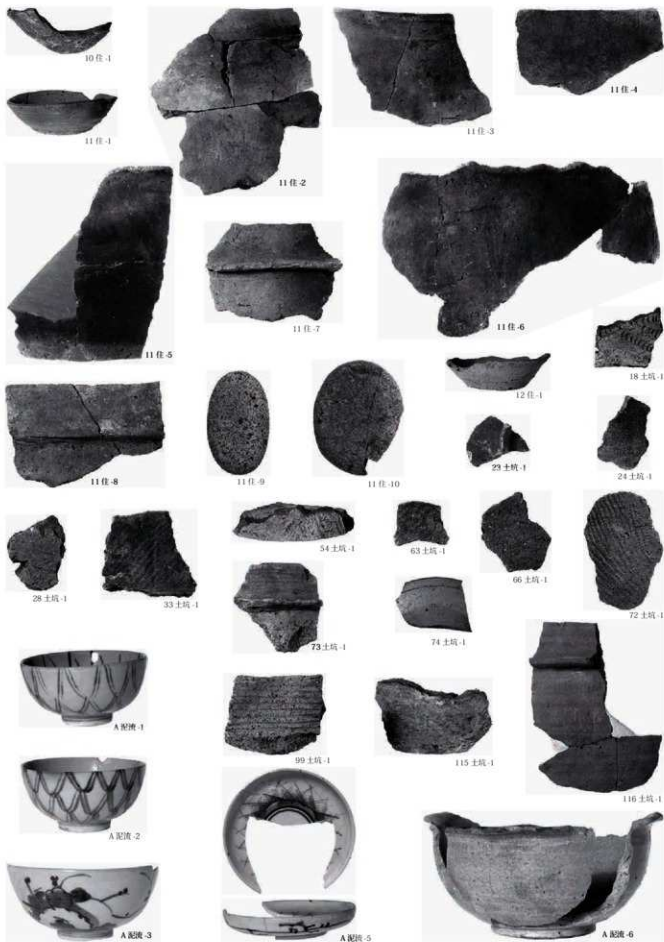
II区現地見学会(北)

PL.20











A記號-4



A記號-7



道外-1



道外-2



道外-3



道外-4



道外-5



道外-6



道外-7



道外-8



道外-9



道外-10



道外-11



道外-12



道外-13



道外-14



道外-15



道外-16



道外-17



道外-18



道外-19



道外-20



道外-21



道外-22



道外-23



道外-24



道外-26



道外-25

## 報告書抄録

書名ふりがな	ほそがいびーいせき
書名	細谷B遺跡
副書名	一般県道林岩下線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	469
編著者名	田村公夫
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20090306
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	ほそがいびーいせき
遺跡名	細谷B遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんひがしあがつままちおおあざみしま
遺跡所在地	群馬県吾妻郡東吾妻町大字三島
市町村コード	10429
遺跡番号	0062
北緯（日本測地系）	363329
東経（日本測地系）	1384521
北緯（世界測地系）	363341
東経（世界測地系）	1384510
調査期間	20080401-20080630
調査面積	5032
調査原因	道路建設
種別	集落 / その他の遺構（陥穴・畑）
主な時代	平安 / 近世
遺跡概要	集落 - 平安 - 住居跡 + その他の遺構 - 近世 - 畑 + その他の遺構 - 陥穴
特記事項	10世紀の集落と天明三年浅間山噴火に伴う泥流下畑、陥穴群
要約	平安時代住居跡11軒、土坑96基（うち67基が陥穴）、近代溝1条、天明三年畑跡6区画を検出した。集落は東吾妻町の集落変遷の空白を埋めるものである。また、出土遺物や構築材等から当地域の特色が伺える。陥穴の1基は平安時代構築を示すものであった。泥流下の畑は道や段差を設け区画される。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第469集  
細 谷 B 遺 跡

---

2009年(平成21年)3月2日印刷

2009年(平成21年)3月6日発行

発行/編集 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橋町下箱田784-2

電話 0279-52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/上武印刷株式会社

---



細  
谷  
B  
遺  
跡

一般照道林岩下線道路改築事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇九

群馬県八ツ場ダム水源地域対策事務所  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団